334.62-Y86ウ
1200500738312
334.62
Y86

始

195

334.62
Y86

日本思想戰大系 8

興亞論

吉田三郎著

旺文社發行

947
5

序

アジアの黎明を壽ぐ爆音と、砲聲と、共榮圏建設の鐵鎚の響は、大東亞の各地に轟いてゐる。

新秩序の建設は悲觀論者が過大に言ひ擴げてゐる如く困難ではないが、一部の樂觀論者の主張する如く容易でもない。要は建設に從事するものゝ心構へと實行力如何にかゝるからである。昭和十四年以來、國史學の立場から支那問題を考へ、支那建設要員再教育の仕事に關係して、數度支那各地の現狀を見聞する機會に惠まれた筆者は、所謂現實の問題を處理するに當つて、國體觀念を明徵ならしめる必要を愈ゝ切實に感ぜさせられた。避くべからざる障壁の如く考へられてゐるものが衝に當るもの次第で、意外に簡單に突破し得てゐる例を知らされたのであつた。

同時に又國體觀念が觀念に止つて、行爲の上に表現せられない場合には、これ又全然無力であることを强く認識せしめられる機會が多かつたのである。昨秋及び今春の兩度北京廣播電臺から在留諸君に放送した場合にも、期せずして論旨が此の點に歸せざるを得なかつた。「今こそ行爲を

以て心想を表現すべき秋である」ことを再三力說したのであつた。異民族、異言語の存するところに於いては、殊更行爲のみが思想を表現する。私の『興亞論』は歸するところはこの點を明らかにするにある。このやうな心境で『啓發錄』や『新論』を讀み直し、維新の志士達の識見に今更のやうに感嘆したのは、思へば當然のことであり、本書を成すに當つて『新論』にいふところの國體、形勢、虜情、守禦、長計の章に倣つたのもまた自然の成行きであつた。

本年初頭より起稿を志し乍ら、雜事に追はれて果さず、遂に比島文化工作の要員としてマニラに出發する當日の午前中に漸く口述を終るといふ有樣であつたから、博引傍證はもとより、靜かに想を練る暇もなく、日頃腦裏に去來するところを記錄したに止り、推敲の餘裕の如きもまた全くなかつた。口述終了の夜皇都を旅立ち、福岡から空路任地に到着し、同志の誘掖によつて、即日『興亞論』の實行に取掛つてゐるのが何となく夢のやうな氣がする。『興亞論』に主張したことが比島の文化工作の上に實踐出來ないとしたならば、この論議は畫餅に等しい。自分の書いた『興亞論』で自分を鞭撻し激勵してゐるのがマニラに於ける筆者今の姿である。

上海の有樣を想像してマニラに到着した筆者は、街の雜踏にも、ホテル前に廣々と展開するルネタ公園にも別段驚嘆はしなかつたが、アメリカ依存がマニラの街の一切にこれ程明らかに見られようとは豫想しなかつた。上海風景とマニラ風景との間には共通點が少くないが、上海は當地に比すると遙かに殺氣立ち、スピーディだといつてよからう。當地の人々は精神的にも肉體的にも迫力がない。といつて皇軍援助の下に獨立の準備を着々と進めてゐるから、日本人たるものは無暴な我儘が許されない。從つて文化工作に携はるものには絶えざる適當な反省が要求せられる。文化工作を遂行するには比島といふところは最適の條件を具備してゐるといつてよからう。聞くところによれば、田舍の民心、殊にモロ族が中心となつてゐるミンダナオ島の民心は醇朴ださうである。アメリカニゼーションによつて弱められた都市並びにその周邊に住む比島人の精神力を地方人のそれによつて代置する方針を以て指導したならば、比島は立派に共榮圈の一環としてその責務を全うし得ると思ふ。

着任直後英文の比島史を繙いたことがあるが、師範敎育の資料として手際よく纏められてゐるこの書物には、スペイン侵入以前の比島文化が相當優れたものであることを記し、スペインの統治によつてこれが完全に破壞せられたことを文献的に考證してゐる。結論となつてゐる米國頒有以後の歷史は、政治的發展、經濟的發展、宗敎的發展等々の章の名が示す如く、何れも發展と斷定してある。而も發展した筈の比島がアメリカと切斷された時の慘めさは今筆者の眼前に展開し

てゐる。軍事基地たらしめることにアメリカの諸施策は集中せられてゐたのであつて、民心收攬を第一義として無智な島民を消費と享樂の世界に追込み、物質的生活の豐富さに馴れしめ、アメリカ產の電氣冷藏庫、メードイン・U・S・A・の高價な品物に對する愛着は未だにマニラ市民から拂拭せられてゐない。極端にいへばマニラ市民は英語と享樂生活以外には何物も與へられなかつたのだ。

女子大學に催された生徒の作品展覽會場に竝べられてゐる品物は、原料は土產品だが作られたものは總べて歐米風の日用品である。曰くハンドバック、曰くテーブルクロス、曰く灰皿。洋裝で樂しさうにその作品の側に立つ女子大生、見に來る父兄の姿。この光景を眺めて、筆者は植民地風景の悲慘を痛切に感じたことである。女子のミッションスクール主催の民謠土俗舞踊大會の招待を受け出掛けて見ると、此處にもまた悲しい姿ばかり。しかも關係者は最も文化的のつもりで大得意である。民謠はテーマとして取上げられてはゐるが、全く歐米風音樂の作曲と手法で演奏せられるし、舞踊もまた歐米風のダンスに變形せられてゐる。殊に合唱團位私の心を痛めたものはない。高砂族そのまゝの容貌からスペイン人の容貌まで、雜然と種々な色と形の顏を揃へ、それが皆スペイン風の洋裝をして、歐米風の發聲で金切聲を張り上げる有樣は、この世の姿とは思はれなかつた。歐米人には洋裝はシックリするのは當然であるから、かうして竝べば東洋人は劣等の如く見える。土俗の服裝乃至は日本の服裝をした時、比島婦人は堂々としかも身についてみえるのに、歐米人がかやうな服裝をした時には珍妙笑止の極みである。私共は思ひをこゝに致し、アジアの傳統の復活を實現しなければならぬ。もとよりアジアの傳統はかうした服裝の上にのみあるのではなく、精神の中にも嚴として存する。而もこの大業は皇國民の强力な指導なくしては到底實現出來ない。比島人といはず、久しく歐米の支配下にあつた人々は、自分達の姿が如何に悲慘であるかを自覺してゐない。このことに私共は着眼しなければならない。

興南錬成院々生指導といふ多忙な任務を有する筆者に、二ヶ年間の在外研究の餘暇を與へ、現地の文化事業に從事することを許された大東亞省興亞錬成所、興南錬成院に對して感謝すると同時に、これに答ふべき修錬を此の地に積み、比島文化再建に貢獻したいと思ふ。

昭和十八年九月

在マニラ　日本文化會館にて

吉田三郎

目次

序

第一章　皇國の傳統と興亞の理念……一

一、神勅奉行の聖業……一

二、興亞先覺の經綸……一六

三、荒尾精と樂善堂の志士達……二六

四、東亞經綸の根本義……四九

第二章　米英亞細亞侵略の由來……五九

一、近代西洋の成立とその東漸……五九

二、イギリス人の日本渡來……七一
三、東亞に於けるアングロ・サクソン勢力の瀰漫……八七

第三章　大東亞建設をめぐる世界の情勢……一一三

一、盟邦獨伊の現狀……一一三
二、米英の思想的新攻勢……一三三
三、アングロ・サクソン民族の殘虐性……一四七

第四章　興亞政策の現實的問題……一六五

一、大東亞共榮圈建設の目標……一六五
二、亞細亞の資源とその開發……一七五
三、我が對支新政策の樹立……一九七
四、中國新國民運動の展開……二一三

五、民族的傳統の尊重……二二四
六、滿洲國及び朝鮮の問題……二四一

第五章　皇國の使命と現代教育の反省……二五七

一、指導者たる者の心構へ……二五七
二、「家」の教育……二七一
三、青年指導の問題……二八七
四、現代青年の覺悟……三〇五

第一章　皇國の傳統と興亞の理念

一、神勅奉行の聖業

わが國の神典『古事記』に

是に天つ神諸の命以ちて、伊弉那岐命・伊弉那美命二柱の神に「この漂へる國を修理り固め成せ」と詔りたまひて、天の沼矛を賜ひて、ことよさしたまひき。かれ二柱の神、天の浮橋に立たして、その沼矛をさしおろしてかきたまへば、鹽こをろこをろにかき鳴して、引き上げたまひし時に、その矛の先より滴る鹽、積りて嶋となりき。これ淤能碁呂島なり。

と、わが國の國土の修理固成が、天つ神の命もちてなされて居ることを物語つて居る。

このやうに、私共が興亞の對策を論ずるに當つても、わが國の天つ神の詔を基礎として考へる

べきであつて、歐米流の國家學說や、個人の思ひ思ひの考へ方によつて、論議が進められてはならない。卽ち、興亞の論は、皇國の傳統的な學道に立脚してなされねばならないのである。然らば皇國の學の傳統とは如何なるものであらうか。近代のヨーロッパの學問は、各〻その國々の發展の爲に成り立つたものであつて、その間色々な專門學科を分立せしめて居る。その各國の學問が、明治以來わが國の學問の中に混入することゝなり、その結果國內には、國籍を異にする學問が雜然と存在して、やゝもすれば皇國學問の傳統が見失はれんとする有樣である。だが、私達が一度、幕末の志士達の學問とその行實を回顧するならば、さうした學問の入つてくる以前の純粹なる學問の形を、その中に見出だすことが出來るのである。

二十六歲にして、小塚原の露と消え、安政の大獄の血祭りに擧げられた景岳橋本左內先生は、福井藩の醫道の家に生まれた人材であつたが、藩主の囑望に應へて、次第に國事に奔走することとなり、遂に幕府の忌憚に觸れた譯であるが、景岳先生が十五歲の時、卽ち當時としては一人前の大人になる時に、立派な武士になる爲の日本臣民の心構へとして書いた有名な「啓發錄」を見ると、先づ幼な心を去つてものに依存する弱い心をとり、一個の國民としての獨立心を養ふべきことを論じ、次いで日本人としての負けじ魂を振ひ起すことを「振氣」の章に明らかにし、續いて忠孝に志すべきことを「立志」の章に說き、更に學に勉める所以を明らかにし、學に勉める爲には、よき友を選ばなければならないことを力說して居る。昨今學問といへば、讀書をし、或は科學的な理論の究明乃至は實驗をすることのやうに考へられて居るが、果してこれでよいであらうか。景岳先生が「啓發錄」を書かれた時代に於ても、學問は讀書と詩文であるかの如く一般の者は考へて居つた。然るに景岳先生は、勉學といふことはそのやうなものではなくして、先哲偉人の殘した忠孝の事績を學んで、自らも又忠孝の道を踐み行ふことであり、これこそ學問の第一義であつて、讀書や詩文はそのやうな學問をする手段である、卽ち學問の具であるといふことを述べて居られる。

皇國の學問とは、こゝに示されたやうに、「知行一如」に依つてはじめて學問であり得るのであつて、過去の歷史を知り、又先哲偉人の行實を詳細に知ることのみが學問ではないのである。このやうな思想が机上の空論家によつて唱へられたならば、尙ほ一抹の疑念がないでもないが、景岳先生は、この『啓發錄』に主張した如くに實行され、こゝに主張した如くに、若くして皇國に殉じて居られるのであつて、景岳先生の說くところは、實に千鈞の重味を以て我々を敎へるものといはなければならない。

このやうな思想は、單に景岳先生一人の思想ではなくして、松下村塾の指導者として著名な吉田松陰先生も同樣な確信を持つて居られた。有名な士規七則の中に、

人古今に通ぜず、聖賢を師とせざれば、則ち鄙夫のみ。讀書尙友は君子の事なり。

と說いて居られるのと全く同樣の趣旨であり、他の當時の志士達の書き殘したものを見ても同樣の意見ばかりであつた。卽ち、皇國の學問は、皇國の道を行ずることであるといひ得る。皇國の道とは　上御一人の大御心を體し　上御一人の御經綸を臣民として奉行して行くことである。大御心はこれを　歷代天皇の御製に仰ぐべく、御經綸はこれを御詔勅の中にうかがふことが出來る。所謂先哲といはれ、聖賢と尊ばれ、烈士と崇められる人達は大御心を體して、　天皇の御經綸を奉行するために、文字通り身を鴻毛の輕きに比し、死を視ること歸するが如き態度を以て、臣道實踐の模範を示した人々である。從つて、皇國の道を踐み行はうとするものは、根本に於ては、御製に示された大御心を體し、詔勅に御示しになつた御經綸を奉戴し、これを臣民として奉行して行く先哲偉人の行實を通じて、具體的なる臣道實踐の方法を體得し、それを以て自らの生活を律し、而して實踐に挺身するものでなくてはならぬ。これが卽ち皇國學問の眞諦である。

從つて皇國の學問は、皇國の傳統の體認であることはいふまでもないが、同時にそれは、世界の大勢に對する正しい識見を養ふことでなければならない。松陰先生は、東北旅行の途次水戸に立ち寄つて大いに啓發され、その後の學問の指針を與へられた人として、會澤、豐田兩先生のあることを自ら語つて居られるが、會澤正志齋先生の「新論」こそは、幕末の志士達にその向かふところを知らしめ、感奮興起せしめたところの論著であるが、この書物には五つの項目が論ぜられて居る。第一は「國體」の論である。すなはち、わが國が忠孝を以て國を建て、武を尙び、民を安んずることを國政の大本として居ることをこゝに論じて居り、第二は「形勢」であつて、四海萬國の大勢をつまびらかにして居る。第三の「虜情」に於ては、戎狄がわが國を覬覦して居る有樣を明らかにし、第四の「守禦」の論に於て、このやうな國體を護持し、外國の覬覦から免かれるためには、富國强兵策の遂行が急務であることを述べて居る。そして最後に「長計」を論じてゐるが、會澤正志齋先生の長計――遠いはかりごと――とは、民を化して國體を體認せしめ、わが國が神國である所以に徹した人間に仕上げ、廣く國民の間にこのやうな俗をなすことであるといつて居る。

すなはち、「新論」に端的に示されて居る如く皇國の學問は、一面に於て透徹した國體觀をいだくとともに、その國體觀に基づいて、世界を己が掌の中に指すが如くにその實情を熟知し、これ

に對處するところの經綸を持つことなのである。故に、國體論は同時に世界經綸論であり、世界の經綸は常に正しき國體觀に立脚すべきが、皇國の學の傳統であるといはねばならぬ。

徳川光圀が志を立てゝより二百數十年後の明治年間に完成を見た『大日本史』編纂の大事業を見るに、今日いはゆる全體國家と稱せられ、新體制國家と稱へられて居る國々の歴史編纂の事業、或は百科辭典編纂事業と一脈相通ずるものがある。外國のそれらの事業のねらふところは、編纂事業を通じて思想の統一を圖るといふ點にある。『大日本史』の編纂も、義公の素志では、勅選に準じて、六國史の後を繼ぐ大事業たらしめようとされたことは明瞭であつた。學者も水戸藩に限らず　天皇のいます京都の學者を中心として、全國からこれを集め、二十八萬石と稱へられて居つた僅かな財政の中から、その約三分の一にも當る八萬石を割いてこの事業に充當されたことからみても、義公が如何にこの仕事に力を入れて居られたかが分かるのである。義公はこれによつてわが國の思想を統一し、以て肇國の大理想を實現しようとされたのであつた。世界の歴史に於て、歴史編纂の事業が二百有餘年に亙つて繼續せられ、しかもその事業によつて藩の治績が上り、文字通り國體明徴が實現された例は他にこれを求めることが出來ないのである。

かくの如き意圖の下に繼續された『大日本史』編纂事業を中心とする水戸の敎學の本旨が、會澤正志齋先生の『新論』の中に湛へられて居ることを思ふにつけても、『新論』の說くところが決して抽象的な觀念論ではなかつたことは明らかである。水府の人材を育成した弘道館の設立に關して『弘道館記』なるものがあるが、その中にも「文武分たず、學問事業その効を異にせず」と記されて居る。

私どもは、このやうな皇國の學の傳統に立脚して、アジアを興す道を探究すると同時に、その道に從つて新しきアジアを創らなければならない。新しきアジアの創造とは、東亞新秩序の建設に外ならぬ。從つて興亞の論とは、東亞新秩序建設の論であるといへよう。

先に修理固成の神勅を引用したが、今やこの神勅のまにまに、アジアには有史以來未曾有の國土生成の大業が遂行されつゝある。滿洲事變後今日に至るまで、既に滿洲帝國、新生中華民國、米英との絆を遮斷した新生泰國、イギリスの統治を離脱したビルマ國が誕生し、近くは比島が新たな國家として生まれようとして居るし、恐らくチャンドラ・ボース氏の提唱して居る如く、印度も亦イギリスの羈絆を脱して、輝しき獨立の榮えを擔ふ時期が到來するであらう。二十年間に六ケ國の國土生成といふ驚異的な事實が神典のみことのまゝに實現せられつゝあることを見るにつけて、「神州不滅」の信念が愈〻牢固となるを覺えるのは、獨り筆者のみではあるまい。

北方アリューシャンに於けるアッツ、キスカの戰ひ、又南太平洋に於けるソロモン群島の激戰を前にして、一喜一憂する徒輩がないではない。人間はとかく空氣や水の恩惠に氣付かざる如く、偉大なるものについてはその偉大さの故に却つて眞相を見逃がし勝ちなものであるが、私どもは戰局の部分的推移に一喜一憂する前に、三千年來皇國史を貫通して「天壤無窮」の神勅に違ひなきことを實證し來たつた生命力に眼を向けつゝ、至高の敬畏と信賴とを捧ぐべきである。私が、皇國の傳統に生きることを主張する所以のものは、根據なき觀念の論ではなく、また單なる希望的意見ではないのである。實に昭和の大御代に生を享けつゝ、眼前に見る輝しい皇國發展の現實に立脚して私の信念を吐露するものである。

興亞論の基礎をなすべき神勅は、既に述べた天つ神の命、すなはち、「この漂へる國を修理り固め成せ」に盡きるのであるが、歷代の　天皇は、　皇祖皇宗の御遺訓の紹述にこれつとめられたのであつて　今上陛下は朝見の御儀に際し、勅語を賜ひ、

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ賴リ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統治ノ大權ヲ總攬シ以テ踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊章ニ率由シ先德ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カランコトヲ庶幾フ

惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ內文敎ヲ敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ萬邦無比ノ國體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ廼チ志ヲ繼明ニ尙クス

と仰せられ　大正天皇も、御卽位禮の當日紫宸殿の儀に於て次の如き勅語を賜はつた。

朕祖宗ノ遺烈ヲ承ケ惟神ノ寶祚ヲ踐ミ爰ニ卽位ノ禮ヲ行ヒ普ク爾臣民ニ誥ク

朕惟フニ皇祖皇宗國ヲ肇メ基ヲ建テ列聖統ヲ紹キ裕ヲ垂レ天壤無窮ノ神勅ニ依リテ萬世一系ノ帝位ヲ傳ヘ神器ヲ奉シテ八洲ニ臨ミ皇化ヲ宣ヘテ蒼生ヲ撫ス爾臣民世世相繼キ忠實公ニ奉ス義ハ則チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノコトク以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ

と仰せられて居る。私どもが直接に大御代の御惠澤に浴して居る　今上天皇は申上ぐる迄もなく歷代天皇はいづれも　皇祖皇宗の御遺訓を紹述せられたのであつた。讀者が日常奉戴する「敎育ニ關スル勅語」に於ても諭し給ふ御敎が、實に

我カ皇祖皇祖ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス

と仰せられて居るのである。修理固成の神勅が　神武天皇に於かせられては次のやうにお表はしになつて居る。

我ひんがしを征ちしより玆に六年になりぬ。賴むに皇天の威を以てし、あだども戮されぬ。

邊りのくに未だしづまらず餘りの妖ひ尙たけしと雖も、中つ國の地に復たさわぎ無きなり。誠によろしく皇都を恢弘し、みあらかをはかりつくるべし。而して今世此の蒙さにあひ、民の心すなほなり。巢に棲み穴に住むのしわざ惟れ常となれり。夫れ大人ののりを立つるやことわり必ず時に隨ふ。苟くも民に利有らば何ぞ聖のわざにたがはん。當に山林を披き拂ひみあらかをつくりて、恭しみてたかみくらに臨み、以ておほみたからを鎭むべし。上は則ち天つ神の國を授けたまふのうつくしびにこたへ、下はすなはちすめみまの正しきを養ひたまふの心を弘めん。しかして後に六合を兼ねて以て都を開き、あめのしたを掩ひて宇と爲さむこと、亦可からずや。夫の畝傍山の東南橿原の地を觀れば、蓋し國の墺區か。治る可し。

周知の如く建國の大みことのりであつて、八紘爲宇の建國の御精神が明らかにこゝに示されて居るのである。

まつろはぬものどもを言向けやはすところのすめらみいくさこそは、文武一如の肇國以來の天皇の御經綸であるが　景行天皇の御代に各地のまつろはぬものどもを征伐したまうた日本武尊に對して　天皇は次の如き勅語を賜はつて居る。

往古よりこのかた、未だ王化に染はず。今朕汝の爲人を察るに、身體長大、容姿端正にして、力能く鼎を扛ぐ。猛さこと雷電の如く、向ふ所前無く、攻むる所必ず勝つ。即ち知りぬ。形は則ち我が子にして、實は則ち神人なり。是れ寔に天の朕が不叡、且つ國の平かならざるを惑みたまひて、天業を經綸し、宗廟を絶たざらしめたまふか。亦是の天下は則ち汝の天下なり。是の位は則ち汝の位なり。願はくば深く謀り遠く慮りて、姦を探り變を伺ひて、之に示すに威を以てし、之を懷くるに德を以てし、兵甲を煩はさずして、自ら臣隷せしめよ。即ち言を巧にして暴神を調へ、武を振ひて以て姦鬼を攘へ。

と仰せられて居る。又　神功皇后の新羅御征伐の時の御命令の中に、

金鼓節無く、旌旗錯亂すれば、則ち士卒整はず。財を貪りて多欲み、私を懷きて內に顧みれば、必ず敵の爲めに虜とせられなむ。其の敵少くとも輕んずること勿れ。敵强くとも屈することと無かれ。則ち奸暴を聽すこと勿れ。自ら服するものを殺すこと勿れ。遂に戰勝たば必ず賞有らむ。背き走らば自ら罪有らむ。

と外征に臨む者の心構へを述べさせたまうて居る。

歷朝相承けて、外國に對し又國內のまつろはぬものに對して、一意大みことのりのまにまに先輩達は奉公の誠を致してきたのであつた。　明治天皇が五ヶ條の御誓文を神前に奉られ、公卿諸

侯を會して諭したまうた時に、

往昔、列祖萬機ヲ親ラシ、不臣ノモノアレハ自ラ將トシテ之ヲ征シ給ヒ、朝廷ノ政總ヘテ簡易ニシテ如此尊重ナラサルユエ、君臣相親シミテ上下相愛シ、德澤天下ニ洽ク國威海外ニ耀キシナリ。然ルニ、近來宇內大イニ開ケ、各國四方ニ相雄飛スル時ニ當リ獨リ我ノミ世界ノ形勢ニ疎ク、舊習ヲ固守シ一新ノ效ヲハカラス。朕徒ラニ九重中ニ安居シ、一日ノ安キヲ偸ミ、百年ノ憂ヒヲ忘ルルトキハ、遂ニ各國ノ凌侮ヲ受ケ、上ハ列聖ヲ辱シメ奉リ、下ハ億兆ヲ苦メンコトヲ恐ル。故ニ朕茲ニ百官諸侯ト廣ク相誓ヒ、列祖ノ御偉業ヲ繼述シ、一身ノ艱難辛苦ヲ問ハス、親ラ四方ヲ經營シ、汝億兆ヲ安撫シ、遂ニハ萬里ノ波濤ヲ拓開シ、國威ヲ四方ニ宣布シ、天下ヲ富岳ノ安キニ置カムコトヲ欲ス。

と仰せられて居る。

わが國の外征は、歷代の御詔勅に示されて居る如くすめらみいくさであつて、歐洲列强が自國の利益を計つて、弱國を蹂躙し、相手國と抗爭するのとは根本的に異なることがこゝに明示されて居る。明治二十八年四月二十一日、清國と和を講じた後に國民に賜はりたる勅語の中に、

朕、固リ今回ノ戰捷ニ因リ、帝國ノ光輝ヲ闡發シタルヲ喜フト共ニ、大日本帝國ノ前程ハ、朕カ卽位以來ノ志業ト均ク、猶ホ甚タ悠遠ナルヲ知ル。朕ハ、汝有衆ト共ニ、努テ驕奢ヲ戒メ、謙抑ヲ旨トシ、益ゝ武備ヲ修メテ、武ヲ瀆スコトナク、益ゝ文敎ヲ振テ、文ニ泥ムコトナク、上下一致、各ゝ其ノ事ヲ勉メ、其ノ業ヲ勵ミ、永遠富强ノ基礎ヲ成サムコトヲ望ム。

とあり、明治三十八年十月十六日、露國との講和に關する御詔勅の頭初に、

朕、東洋ノ治平を維持シ、帝國ノ安全ヲ保障スルヲ以テ國交ノ要義ト爲シ、夙夜懈ラス、以テ皇猷ヲ光顯スル所以ヲ念フ。不幸客歲、露國ト釁端ヲ啓クニ至ル。亦寔ニ國家自衞ノ必要已ムヲ得サルニ出テタリ。

と仰せられ、また明治四十三年八月二十九日、韓國を帝國に併合するに際して賜はりたる詔書には、

朕、東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ、帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ、又常ニ韓國カ禍亂ノ淵源タルニ顧ミ、曩ニ朕ノ政府ヲシテ、韓國政府ト協定セシメ、韓國ヲ帝國ノ保護ノ下ニ置キ、以テ禍源ヲ杜絕シ、平和ヲ確保セムコトヲ期セリ。爾來時ヲ經ルコト四年有餘、其ノ間朕ノ政府ハ、銳意韓國施政ノ改善ニ努メ、其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖、韓國ノ現制ハ、尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス、疑懼ノ念每ニ國內ニ充溢シ、民其ノ堵ニ

安セス。公共ノ安寧ヲ維持シ、民衆ノ福利ヲ增進セムカ爲ニハ、革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可ラサルコト、瞭然タルニ至レリ。朕ハ、韓國皇帝陛下ト與ニ、此ノ事態ニ鑑ミ、韓國ヲ擧テ日本帝國ニ併合シ、以テ時勢ノ要求ニ應スルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ、玆ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合スルコトトナセリ。

と仰せられて居る。また日獨伊三國條約締結の大詔の內に、

惟フニ萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ、兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシムルハ曠古ノ大業ニシテ、前途甚ダ遼遠ナリ。爾臣民益ゝ國體ノ觀念ヲ明徵ニシ、深ク謀リ遠ク慮リ、協心戮力、非常ノ時局ヲ克服シ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼セヨ。

と宣はせられたことを想起せざるを得ないではないか。アジアを盛んならしめ、東亞新秩序を建設することは、神勅以來常に變ることなき　天皇陛下の御經綸を、われ等人民が奉行することに外ならないことは、以上述べたところによつて炳乎として毫末の疑ひも存しないではないか。

このやうな大經綸を生ませられる　陛下の大御心はまた御製にうかゞひ奉ることが出來る。すなはち、御製こそ御仁慈の現れである。

明治天皇は

明治四十一年に
國のためあだなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ

また
ことのはにあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり

また
ちかひたるおのが心をしをりにて誠の道をわけつくしてむ

三十八年に
とき遲きたがひはあれどつらぬかぬことなきものはまことなりけり

四十一年に
したしみのかさなるまゝに外つ國の人もこころもへだてざりけり

四十二年に
いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめや

四十五年に
人の世のたゞしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで

等と仰せられて居るのである。われら草莽、行住坐臥、これらの御製を拜誦し奉つて、つゆ大御心にたがはざらんことを心掛くべきである。

二、興亞先覺の經綸

肇國以來御歷代の御經綸を奉戴して、生命をかけて興亞の大事業に參畫をした先人は枚擧に遑ないのであるが、史上著名な人としては、まづかの豐臣秀吉を擧げることが出來る。

かの文祿慶長の役に、秀吉が如何なる經綸を抱いて居つたかに就いては色々な議論があるやうであるが、現在、前田家所藏の文書、若狹小濱組屋文書等によれば　後陽成天皇を支那に奉戴して、日本の新しい都を北京に奠め、都周りの十箇國を皇室の御料とし、明の關白は秀次、その所領は都周りの百箇國、日本の關白は豐臣秀保或は宇喜多秀家とし、秀吉自身は一旦北京に入つた後日本の船著場であつた寧波に居住し、朝鮮の國王が降服したならば、全領土を沒收し、日本に相應の所領を賜はり、朝鮮には羽柴秀勝又は宇喜多秀家を置き、九州に豐臣秀俊を置き、朝鮮の軍の先鋒をした衆には印度の國境近い地方に所領を與へる等と考へて居つたやうである。正に大東亞新秩序の構想であり、この企圖に對するカトリック諸國の謀略がなかつたならば、爾後の東亞の形勢は著しく變つて居つたのではないかと考へられる。

江戸期に於けるわが國の地理學者の所說は、今日獨逸のハウスホーフアーによつて唱へられて居る地政學等と相通ずるものであつて、單なる地形や人口や人種を論ずるのではなく、皇國の進展を具體的な地理に卽していかに構想して行くかが論ぜられて居るのであつて、北邊の危機が唱へられた頃、盛んに論ぜられた蝦夷地の經營論等は、最も顯著な例であると考へられる。

幕末の志士達は、先にも若干觸れたやうに、天下の形勢、四海萬國の狀況に就いて、むしろ今日の人達よりも眞劍な研究を續けて居つたので、外國が如何なる意圖を以てわが國に臨んで居るかに就いては、的確な判斷を以て居つた如くに考へられる。當時の蘭學者達が、國民に對してうち鳴らした警鐘の如きも、多くは國を憂ふる至情に出たものであるし、尊皇攘夷といふ幕末の指導的な精神も、常に東亞の經綸と離るべからざるものであつた。例へばわが國の和蘭語解讀の道を拓いたと稱せられる杉田玄白が書き殘して居るところを見ても、大槻玄澤や高野長英の行實を眺めても、その根本とするところのものは、外國侵略の危機から、如何にして皇國を救ふかといふ皇國民としての憂ひに存したのである。蘭學者が、その研究の重點を國防に置いて、外國の地

理や歴史の研究に從事し、或は戰略に及び、或は大砲の鑄造、彈藥の製造に心血を注いだことを、蘭學者を眺める際に決して看過してはならないと思ふ。

兵學者の出であつた松陰先生の如きは、特に憂國の至誠が著しく、先生が長崎に留學されたことも、東北の巡遊、江戸の遊學を試みられたのも、或は又アメリカの軍艦に搭乘してかの國へ渡らうと企てられたことも、總べて之虜情を察し、神州を彼等の跳梁から守らうとされたことにあつたのである。さればこそ、彼の丙辰幽室文稿の中に殘されて居る義弟久坂玄瑞に宛てた手紙の中で、

「米露兩國のわが國を覬覦するのに對して、條約を固くし、邊境を守つて、彼等の侵略を擅にせざる態勢をとりながら、北海道を開き、朝鮮を併合し、滿洲を挫き、支那を壓して印度に臨んだならば、米露兩國の嘗つての罪は之を許すも可なり。攻むるも可なり。必ずしも時宗に倣つて虜使を切り殺して快を貪る必要があらうか。」

と述べられるに至つたのである。

この文案を見る時に、私どもは、現に同胞が血を流して戰ひつゝある大東亞戰爭の規模をこゝに見るのであつて、國體觀に徹し、世界の形勢、虜情に通ずるものは、必ずやかゝる雄大な世界經綸を抱くに至るべきことを悟るのである。今日の國民常識の中にあつて憂ふべき見解の一つは、明治維新に對する考へ方であると思ふのである。こゝに岐路ながら明治維新と現代との關係に就いて、國民の再考を促がす意味に於て簡單に私見を述べてみたい。

松陰先生の手紙に明らかなやうに、明治維新の前後の國際情勢を見ると、その根本的な構造に於ては、大東亞戰爭以前と異なるところはない。ロシヤはソビエット聯邦に變はり、ドイツは未だ帝政による統一を全うせず、イタリーも未だ近代的な國家の形を整備して居らないけれども、アジアを巡る世界の形勢に至つては、英國の强力な南方竝びに支那大陸支配の態勢は略ゝ成つて居り、太平洋の彼方アメリカ大陸に關しては、日本を覬覦するアメリカの武威が刻々として日本竝びにアジア大陸に迫りつゝあつたし、北方シベリヤの曠野を戡定したロシヤ勢力は既にカムチヤツカ半島に及び、南下の氣配を見せて居つたのである。

今日の世界の組織は、米英を中心とするアングロ・サクソンの利害を第一として構成されてをることは既に常識化して居るのであるが、かくの如き世界の秩序は、既に明治維新の前後に略ゝその形を整へて居つたのであつた。神州の夷狄に汚がされることを生命に代へて禦がうとする志

士達は、かゝる實情に關しては世界の歴史、地理の書物を通じて、或は色々な開書きを通して充分に體認して居つたのであつて、尊皇のまことを致すことは、やがて夷狄を攘ふことであるといふ事實を信じて疑はなかつたのである。否、信じて疑はなかつたばかりでなく、信ずる如くに行動したのであつた。明治維新の指導精神は、從つて終始尊皇攘夷にある。通俗的にいはれる如く、明治維新は、文明開化或は開國を國是としたのでは斷じてないのである。

水戸學の志士達を始めとして、尊皇攘夷の志士達は當時の虜情をよく見究め、尊皇攘夷の目的を達成する爲には、取り敢へず敵國の實情を確かめ、更に敵國の武備を檢討して、これに劣らざる武威をわが國が準備する必要のあることを感じ、進んで開國を斷行したのであつた。このことは、志士の遺した著述論策の上に明らかであつて、尊皇攘夷が根本であるところに、開國の方策が許されたものであると見なければならない。

明治の時代に活躍した所謂元勳その他有爲の人材の思想も、實に幕末の志士達の魂を繼承したものであつて、そこに、日清日露の戰ひに決然として國を擧げて向かはしめるだけの政策が生まれてきたのであつた。私どもは、今日數多の東亞の經綸に關する著述を前にして、何らの氣魄も共感も感じないにも拘らず、幕末明治維新の志士達の遺著を繙いて感奮興起する所以のものは、かくの如き維新當時の國際情勢を志士達が的確に把握して、これに對處する道を示して居るからに外ならない。言ひ換へるならば、志士達の意志では、國を開いて外國の文物を採り入れたならば、遠からずして夷狄をも攘ふ實力をわが國が持つに至るであらうといふことであつて、その時期が、志士達の想像したよりも長期間を要し、八十年後の大東亞戰爭によつてはじめて、志士の期待した如き現實が到來したと見るべきであらう。

今こそ明治維新に於て實現するに至らなかつた尊皇攘夷の悲願が、志士達の確信せる如くに着々として實現せられつゝあるのである。

松陰先生の興亞の論を紹介することからやゝ傍道に流れた感があるが、松陰先生の興亞論を繼承したものとしては、南洲西郷隆盛先生の征韓論があつた。西郷南洲先生は、その遺訓の中に、

一、廣く各國の制度を採り、開明に進まんとならば、先づ我國の本體を据ゑ、風敎を張り、然して後徐に彼の長所を斟酌するものぞ。否らずして猥りに彼に効ひなば、國體は衰頽し、風敎は萎靡して匡救す可からず、終に彼の制を受くるに至らんとす。

と、ヨーロッパ文明の攝取の態度に就いて述べて居られるが、そのやうな考へ方は、當時の有司

一般とは必ずしも一致せざるところであつて、こゝに征韓論に關する意見の離齟が生じ、遂にあの不幸な結果となつたのであつた。

南洲先生の對韓論は、ヨーロッパ諸勢力、就中、ロシャの東方侵略に對して、わが國が先手を打つて朝鮮に國威を伸ばし、以てその南下を防禦せんとするにあつた。この點先に述べた松陰先生の大經綸と相通ずるのみならず、佐藤信淵の『宇内混同祕策』や島津齊彬の『東方經略論』、藤田東湖の『國民統一論』、橋本左内の『日露同盟論』とも思想的な關聯を有するものである。

具體的な政治上の問題として提起するに先立つて、周到な南洲先生は有事の場合に備へて、滿洲及び朝鮮の地理、形勢、風俗等の實地踏査を企てられた。即ち明治五年八月には、視察員として、陸軍中佐北村重頼、同少佐別府晋介を朝鮮に派遣し、次いで池上四郎、武市熊吉、彭城中平を滿洲に派遣し、彼らのもたらした報告に基づいて對韓策を論じたのであつた。南洲先生の意見によれば、大使の保護の爲に兵隊を附けて出すことは不同意であつて、明治初年から屢〻わが國に對する非禮の行爲を續けて居る韓帝は、このやうな方法で到底反省すべくもなく、むしろ條理を盡して是非を明らかにし、然る上で對處すべきであるといふ考で居られた。然も暴戾な韓帝は、必ず大使に對して危害を加へるであらうから、そのやうな具體的な動機を切つかけとして膺懲の軍を進めるべきであり、その使節を自ら引き受けようといふのであつた。このことに常に參畫をして居た板垣退助に對してその所信を述べた手紙が殘つて居るが、以上のやうなことが端的に示されて居る。

朝鮮の御一條は御一新の涯御手を付けられ、最早五六年も相立候はん。然るところ最初より親睦を求められ候義に之れあるまじく、定めて御方略之れある爲めの義かと存じ奉り候。今日彼が驕誇侮慢の時に至り、始めを變じ、因循の論に渉り候ては天下の嘲を蒙り、誰有りてか國家を隆興することを得んや。即今私共事を好み、猥に主張する論にては之なく、これ迄の行懸りにて此の如き場合に行當り候故、最初の御趣意貫かせられず候ては、後世迄の汚辱に御座候故、こゝに至り一涯人事の限盡させられ度義と存じ奉り候間、斷然使節差立てられ彼の曲直分明に公晋すべき時に御座候。これ迄御辛抱在らせられ候も必ず此日を相待たれ候事と存じ奉り候に付、誠に恐入候得共、何卒私を差遣はし下され度、決して御國辱を釀出し候義は萬々之なく候に付、至急に御評決成し下され度義と存じ奉り候。左候へば寸分なりとも御鴻恩を報じ奉るべき事にて此上なき有難き仕合に御座候間、速に御許可成し下され候樣伏して願ひ奉り候。

と述べて居る。ところが、歸朝した副島種臣が外務卿として使節に遣はされようとしたので、隆盛は重ねて是非とも自分に命を賜はるやうにとの斡旋を板垣に依頼して居るのである。その中に

使節差向けられ候へば、必ず彼が輕蔑の振舞相顯れ候のみならず、使節を暴殺に及び候義は決して相違之なき事に候間、其の節は天下の人皆擧りて討つべきの罪を知り申すべく候間、是非とゝ迄に持參らず候ては相濟まざる場合に候段、內亂を冀ふ心を外に移して國を興すの遠略は勿論、舊政府の機會を失し、無事を計りて終に天下を失ふ所以の確證を取りて論じ候處、能く〳〵腹に入り候間、云々。

と三條公が自分を遣韓大使とすることに異議なきやうに說き付けた有樣をも書き傳へて居る。

副島君の如き立派の使節は出來不ㇾ申候得共、死する位の事は相調可ㇾ申かと奉ㇾ存候間、宜敷奉ㇾ希候。

等と述べて居るところを見ても、死を決して對韓問題を解決せんとした南洲先生の心境は、容易に之を推察することが出來るのである。

然るに、出發に際して、留守中、內外の政治は大小となく改革を加へざること、文武の官吏は勅任は勿論、奏任一班に列する者までも妄りに免職等をなさざる約束の下に出發した岩倉具視大使の一行が歸朝した。明治六年九月十三日のことである。岩倉大使は、自分の留守中にかゝる國家の大事が決定されたことに不滿を持つたのみならず、親しく歐米列强の武備を視察し、事を海外に構へる事が、當時の日本としては圖るべからざる危險であると固く信じて居つたので、西鄕の遣使問題を中止せしめる爲に種々工作し、廟議に於ける大論戰の結果、遂に遣使のことが沙汰止みとなり、やがて南洲先生は官を退いて故國に歸るに至つたのである。先に南洲先生の意見を採用した三條公が、急病で倒れたことは、先生の決心を貫徹せしめ得なかつた大きな理由であると傳へられて居る。

以上の如く南洲先生の征韓論は、幕末の尊皇攘夷の志士達の精神と全く同じであり、而も單なる机上の空論ではなくして、周到なる用意と調査に基づいたものであることに着眼しなければならない。この精神は、次に述べるところの樂善堂の精神に相通ずるものがあるのである。

南洲先生の意圖は結局容れられなかつたけれども、その後朝鮮の問題に對しては、支那、ロシヤ、イギリス、アメリカ等が色々干涉を起して、東亞の平和を攪亂し、明治十五年、十七年の京城の變を生み、續いて日清戰爭となり大東亞戰爭に到るまで、キリスト敎々會に蟠踞するアメリカ勢力の使嗾によつて、不逞の徒が絕えなかつたことは、我等の記憶に新たなところである。

三、荒尾精と樂善堂の志士達

朝鮮問題が、漸次解決の途に著かんとする時、之に關聯して支那の問題が、心ある人々の間に憂慮せられるに至つた。支那に對して何らかの處置を講じなければ、東亞の禍亂は止まる所を知らないといふ信念を抱いた人達は、進んで大陸に渡り、生命を賭けて、日支提携の基盤を固くし、歐米勢力の侵入を阻止せんとしたのであつた。

中でもその功績が脈々として今日に殘つて居るものは、荒尾精先生を中心とする、漢口樂善堂の事業であるといへよう。荒尾先生は、南洲先生に傾倒した前途有爲の陸軍將校であつて、普通の道を辿つたならば、大臣宰相とまでなつた人であらうが、アジアを思ふの心止み難く、中尉の時代に蹶然軍職を擲つて支那に渡つたのである。

これより先、明治維新前後、新聞界にその人ありと知られた岸田吟香が上海に居つて、日清兩國の眞の提携の爲に盡力しつゝあつたが、たま〳〵荒尾中尉を迎へて、その人物の非凡なるに深く感じた。吟香は、これよりさきヘボンと共に日英辭書の編纂に從事し、その謝禮としてヘボンから目藥の製造法を敎へられたのであるが、器用な彼は銀座に目藥屋を開いて、これを樂善堂と唱へたのがそも〳〵の始まりで、後上海に渡つて同じ藥屋を開業すると共に、習ひ覺えた銅版印刷で、科擧の試驗に要する支那の典籍の復刻を企てゝ學生の需要に答へ、その商賣によつて得た利益を日清兩國の提携協力の爲に使用してきたのであつた。

岸田吟香の援助によつて荒尾先生の樂善堂が漢口に開かれたのは明治十九年であつて、當時上海、天津に在留して居つた同志達は、荒尾先生の風を慕つて續々と樂善堂に參集をしたのであつた。樂善堂で先生の薫陶を受けた志士達は、先生の指導によつて嚴正な生活の中に訓練を受け、支那語の習得に力めると共に、書物や藥を背に負うて、行商しながら旅費を得て、支那の各地の實地踏査を行ひ、その結果を樂善堂に持ち歸り、或は清朝を亡して漢族の時代を實現せんとする支那の志士達と交遊を試み、滅清興漢の大業の準備にをさ〳〵怠りがなかつたのである。

中でも、後の世の人をして感奮興起せしめるものは浦敬一である。浦敬一は、單身で九州の平戸から柳行李一つを手にして飄然樂善堂にやつてきた青年であるが、內地にあつては、鎭西日報の主筆として、頭山滿、佐々友房等とともに國內改造に奔走し、國を立つに當つては、養父に遺言し、若い妻とも生別し、班定遠の義節を慕ひ、山田長政の雄圖を胸にして、荒尾先生の檄に應

じたのであつた。當時僅かに二十七歳の青年であつたが、先生の指導によつて愛國の情を燃やすと共に、益々アジアを興すの熱情を高め、支那の西境の踏査に挺身したのであつた。

第一回目は途中から引き返すの餘儀なきに至つたのであるが、再度の企てには同行者を返して、崑崙山の彼方へ只一人、行商人の姿に身をやつして探索の旅をつゞけたのである。彼は漢口を去るに臨んで、もし三年間自分が音信を絶つたならば、亡き者と思つて貰ひたいといふことを書き遺して出發したのである。だが、三年はおろか今日に至るまで、浦敬一の消息は杳として知る由もない。白雲漠々たる新疆省の空に、彼が興亞の雄魂は依然として漂泊することであらう。

彼は單なる猪突猛進の無計畫な人であつたのではなく、出發に先立つて『新疆地方巡視要目』なるものを書き遺して居るのであつて、その要目に從つて實地踏査をなしたのであつた。彼の起草した巡視要目には、

新疆地方は露國の衝路に當り、苟も機の乘ずべきあらば、卽ち之を略して支那の甘肅路及び西藏路を衝くの機點とするや必然の形勢に居り、防禦上に於て頗る緊要の地とす。因て之を防禦するには如何なる力を用ふべきか、又如何にして之に着手すべきかを視察して、其の方法を定むるは、今日の急務なりとす。玆に其の視察の要目を擧ぐれば、卽ち左の如し。

第一　露兵の進入路たる伊犂路、阿克蘇路、塔爾哈臺路、喀什噶爾路の四大線の狀況を視察すること。

第二　新疆の防禦線となるべき地を察し、地形及び氣候等の利用を考定すること。

第三　新疆の回教、喇嘛族及び屯田兵、流人等の狀態を視察し、我に於て之を用ゆれば幾許の力を得べきや、又之を收攬統合するに如何にして着手すべきやを考定すること。

第四　清朝政府に於ける露國の防禦方法、兵備の配備、回民、漢族に施す政治、屯田及び流人の處分、開墾、牧畜等の奬勵法等を視察すること。

第五　清國政府が新疆を維持するに付て費す經費の事、及び其の經費の出處、並に土人、屯田兵其の他此の地に課する稅法を取調べること。

第六　新疆各地の牧畜、耕作、商業、庫藏等の實況を視て、物資の多寡を算定し、且つ清朝に於て野戰に當りては、物資の運輸供給は如何なる方法を以てする準備なりやを察すべきこと。

第七　新疆各地の要路及び回民、漢民の形勢を視て、幹部支部の配置及び之に要する人員の

豫算を立てること。

第八　牧畜、開墾、商業等の事を熟知し、新疆幹部、支部の執るべき事業及び本部より支出する資本を算定すること。

右に擧ぐる所の八目は、今度新疆に於て視察すべき要目なりとす。其の他の偵察方法は、過日議定せる一般の探偵法及び蕃族の探偵法に詳記するを以て玆には贅せず。

要するに今度の新疆の探偵は必ずしも細目に渉るを須ひず、只其の大綱要を定むれば足れり。之を約言すれば、新疆は如何なる防禦法を取るべきか、我が黨に於て此の業を成すに幾許の資本と人員を要するか、如何なる方法にて事業の基礎を立つるかの三項に過ぎずとす……

といふが如き明確な目標を立て、更に同行者であつた藤島武彦との間には、自分の存在を確かめる符號まで定めて出發して居るのである。しかも彼が、決死の志を故郷に送つた遺書は、便々として安樂な生活をのみ企圖する底の人物の遺書とは違ひ、大論文『亞細亞恢復論』であつたのである。その一節に、

清國の國勢此の如く、又大改革をなし振興するの望もなしとすれば、到底歐洲諸國の駸々乎として雄圖を逞うし來る勢を支ふることは期すべからず。十年を出でずして戰火一發、形勢上に一大變動を來すに至るや鏡に掛けて見るが如く、實に危急存亡の秋と被存候……

力を計り才を顧み候いとま無之儀にて、鞠躬盡力、斃而後止、亞細亞人民たるものの職分を全うする而已に有之候。卽ち苟も自ら先んじて亞細亞人民たるものの大義を天下に唱へ、亞細亞遠大の策を天下に明かに致し候はば、我が國小なりと雖も、清國衰へたりと雖も、必ず風を聞いて起つもの可有之、假令不肖生前に志を達する能はざるも不肖の志を繼ぎ、之を達する者有之候はば滿足の至りに有之候。

と述べてゐる。その志や大、その心境や實に皇國の不滅を信ずるものであるといはなければならない。

恩師荒尾精先生は、浦敬一が第一回の壯途に赴くに當つて

もろともに明日の生命もはからねばけふを限りの別れとやせむ

といふ餞けの歌を與へて居る。恐らく浦敬一は、この恩師の和歌を口吟みながら、唯一人崑崙の彼方の旅を續けたことであらう。樂善堂の志士達は、この浦敬一の魂を魂として活動した人達ばかりであつた。最近では、その一人一人の事績が明らかにせられて居るが、一々に就いてはこゝに述べることを避けて、樂善堂そのものの進展に就いていはなければならない。

荒尾精先生は、同志二十四名を以て樂善堂を作つた後、日清提携が興亞の基礎であることを確信して、樂善堂の精神なる國家に殉じて大陸に骨を埋める青年の教育を企てられたのであつた。これが日清貿易研究所となり、日清戰爭に際しては、この研究所で教育を受けた人達が、或は特別工作班を作り、或は通譯として皇軍の先導を勤める等、日清戰爭の戰勝に礎を築いたのであつた。日清戰爭の三崎三烈士として著名な藤崎秀、鐘崎三郎、山崎羔三郎は中でも錚々たる人達であり、その友人達も、何れ劣らざる立派な功績を殘して居るのであつた。

日清貿易研究所の第一期生として、今日生存して居られる郡嶋忠次郎氏がその談話に於て

自分は病身の爲に遂に今日まで生き延びて居るが、その間日清貿易研究所の生徒達から貰つた手紙が自分の手許にある。生徒達の手紙は殆ど全部棄てゝ居つたのであるが、その内、この手紙は殘したいと思つて取つて置いたのが八人の友人のものであつた。而もこの八人は、日清戰爭の所謂九烈士の中の八人であつたことは非常に不思議な感じがする。死ぬ人間丈の手紙を自分が今日まで殘して居るといふことは、その人達の志が、又日常の行爲が自らさうさせたのであると思はれてならない。自分が最近見た日清貿易研究所といふ劇の中で、一度丈自分が舞臺に登場する場景を見たのであるが、今にして思へば、その時は全部が本當に死を決して居つた時であつた。人間が歷史に名を止めるのは死を賭けての時であるといふことを、この自分の手許に殘された八人の烈士の書簡、或は日清貿易研究所の劇を通じて沁々と感じさせられる。

といはれたのは、實に感銘深い事柄である。かうした人達を育成した荒尾精先生は如何なる思想の持主であつたか。

荒尾先生は行動の人であつて、口舌の徒でもなければ、單なる學者でもなかつたから、今日殘されて居る著述はさして多くはない。實に三十八歳のその生涯はさながら興亞の學問の實踐であつたのだ。今、世上に流布されて居る『東亞の先覺荒尾精』なる書物を見ると、「對清意見」並びに「對清辨妄」の論策が收められてゐて、先生の識見が如何に公明博大であつたかを窺ふことが出來る。今日、肇國の精神とは八紘爲宇の精神であるといはれて居るが、そのやうな思想は、決して最近に至つて唱へられたのではない。それは先に述べた松陰先生や南洲先生の信じて疑はざる信念であつたと共に、東方齋荒尾精先生の書き遺されたところにも、明瞭にその精祕が述べられて居るのである。

我國は皇國也。天成自然の國家也。我國が四海六合を統一するは天の我國に命ずる所也。

皇祖皇宗の宏猷大謨也。已に然らば、我國前途の最大目的は、此宏猷大謨を大成するの外に出でず。顧みるに祖道の天下に行はれざるや久し。海外列國、概ね虎呑狼食を以て唯一の計策と爲し、射利貪慾を以て最大の目的と爲し、其奔競爭奪の狀況は、恰も群犬の腐肉を爭ふが如し。是時に當り上に天授神聖の　眞君を戴き、下に忠勇尙武の良民を帥ゐ、有罪を討ちて無辜を救ひ、廢邦を興して絶世を繼ぎ、天成自然の皇道を以て虎呑狼食の蠻風を攘ひ、仁義忠孝の倫理を以て、射利貪慾の邪念を正し、苟も天日の照らす所、復た寸土一民の皇澤に浴せざる者なきに至らしむるは、豈に我皇國の天職に非ずや。豈に　我君我民の　祖宗列聖に對する本務に非ずや。

と述べて居るのである。先に　今上陛下の御經綸の一端として、「惟フニ萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ、兆民ヲシテ悉ク其ノ堵ニ安ンゼシムルハ曠古ノ大業ニシテ」と仰せられたことを述べたが、時の前後こそあれ、その御聖旨は既に荒尾精先生に於て奉戴せられて居ることを注意すべきである。先生は更に、わが國體が世界に冠絶して居ることに就いて次のやうに述べて居られる。

頃者征淸軍の海陸に連勝を得るや、歐米諸國の人は、漫に我國を目して東洋の一强國と爲し、我國人も亦或は我國が宜しく東洋の盟主權を握る可きを說き、特に知らず我國は天成自然の皇國にして、其國位は世の所謂雄邦强國より數等の上に在るを。且や盟主權の物たる、覇者の事也。智術を鬪はす者の執る所也。假令全地球上唯一の盟主たりとも、決して吾人の我國に期望する如き者に非ず。然るに議者察せず。區々たる東洋の覇權を以て我國に擬するが如きは、抑も又我國前途の目的未だ確定せざるより起るの過誤ならん歟。

神武天皇大和御奠都の御詔勅を奉戴する臣民の言葉として、その雄渾なる大經綸は驚嘆に値ひするではないか。岡倉天心は「アジアは一なり」と叫んだ。荒尾精先生が臨終の言葉は「あゝ東洋が……東洋が……」といふ痛切な一語であつたが、誠に、皇國體を信ずる者にして初めてこのやうな言葉が發せられるのであらう。荒尾先生に就いてはいふべきことが多いが、その人物が如何に優れて居つたかといふことに就いては、先生の血盟の友であり、興亞の人材を幾多育成せられた頭山滿翁の評を掲げれば充分であらう。頭山翁は、

自分は五百年に一大人物が出ると聞いてゐるが、荒尾は確かに其の偉人と信じ男惚れに惚れて居つたが、僅か三十八にて早世するとは天の無情を恨むほかはない。彼の風采は老を安んじ幼を懷くの德を具へて居つて、實に見事の態度であつた。自分は今尙ほ、荒尾を想ふ毎に痛惜の感に打たれ、忘るゝ事が出來ない。

と述べて居られるのである。先生の興亞論の根本は、右に述べたやうに、肇國の精神の體現が卽ち興亞の論議になるのであつて、今日郡嶋翁のところに殘されて居る、愛弟子であるところの日清貿易研究所の新舊所員に宛てた丈餘の書簡こそ、先生のかゝる經綸を偲ばしめるに足るものである。

御一別以來、玆ニ三閱月、老生ハ疎濶、誠以不堪陳謝候次第、御海恕是祈候。時々小山兄ヨリノ書面ニ據リ、諸君ガ益々御奮勵被爲候ニ由リ內ハ百事整頓ヲ告ゲ、外ハ四方ノ信用ヲ高メ候趣、代表者タル老生ニ取ツテノ喜ハ、實ニ不過之次第、邦家ニ代リ厚ク御禮申上候。次ニ老生儀モ出京以來日夜愚奔罷在候處、諸君御奮勵ノ結果ハ、當方ニ影響シ、不容易好都合ニ相成申候。而シテ諸君ガ多年御螢雪ノ次第モ、遂ニ朝野志士ノ肝ニ銘ジ、終ニ諸君ヲシテ完全ノ御修業ヲ遂ゲシメ、邦家ノ大用ヲ委任致度トシテ、各政黨モ奮發被致、又其筋ニ於テモ本年ノ議會ニ提出スル爲、遂ニ補助金トシテ豫算中ニ可被込入樣內決相成候得バ、一先歸所御報告申度ト樂居候處、我義兄弟タル卒業生諸子ノ內ニハ、餘程資金ニ困難被致居候人モ不尠趣、諸方ヨリ承候。斯ク相成候テハ、折角多年慘憺ノ經營ヲ積ミ、醇乎トシテ現ハレタル事業モ、功ヲ一簣ニ缺キ、又忠良ノ資、勇武ノ質ヲ以テ、目前ノ私利ニ迷フ瀆俗ノ境ニ陷リ、或ハ小刀ノ細工ニ掛ラザルベカラズ。老生ノ悲憤御察被下度候。

且又今回銀貨下落ノ好機ト防穀處分後日韓間ノ感情ノ結果トハ、吾人ガ東方ニ期スル所ノ宿志ノ幾部ヲ達スルニ、近來珍敷好機會ニ御座候ヲ以テ、老生ガ其悲憤ト希望トハ終ニ勘忍囊ヲ破壞シテ突出仕候テ、仲々ニ働致居候處、時運ノ際會ハ妙ナモノニシテ、遂ニ大勢爲之動搖致來候次第ニ御座候。就テハ老生モ御承知通瘡痍未癒ノ身、非常ノ運動ハ無覺束ト存候得共、遂ニ諸君ノ膽ヲ琢シテ待タルルアリ、此好機會ノ再來ハ又難期候ニ付、玆ニ胸ヲ撫デ瞑目一番、俄ニ傷ヲ包ンデ勇躍三百、終ニ死地ニ飛入リ候。是全ク不得止次第、御諒察被下度是祈候。此上ハ諸君ノ多力ニ依リ奮運仕候外無御座候。德川家康曰ク、事ノ未ダ成ラザルヤ勘忍ニアリ。其將ニ成ラントスルヤ大膽不敵ニ、成ルヤ油斷大敵ト。吾人今日ノ境遇ハ其第二段ニ到着セリ。當ニ大膽不敵ノ運動ニ掛ラザルベカラズ。諸君亦御覺悟相成度候。

偖其悲憤ト希望トヲ達スル爲ニハ、東方通商協會ナルモノヲ組織致ス考ニテ、昨今其順序等協議中ニ御座候。其規約ノ大略ハ、別紙新聞紙ノ報導通リニ御座候。尙左ノ一言ヲ寄ス。

嗚呼當今朝野ノ間、東方ノ事ヲ言フモノ多ク、東方ノ爲ニ劃スルモノ尠ナカラザルハ、洵ニ喜ブベシトス。而シテ時運未ダ會セザル乎、計畫未ダ盡サザル乎、確然立脚ノ地盤ヲ築成シテ切實ノ建設ヲ企圖スルモノナキハ悲シムベキ也。立脚ノ地盤トハ何ゾヤ。西方東漸ニ對スル東方振興上已ムヲ得ザル諸般ノ用意是ナリ。切實ノ建設トハ何ゾヤ。彼我共濟有無相通ジ、一ハ以テ相互ノ

感情ヲ融解シ、一ハ以テ厚生利用ノ源泉ヲ悠久ニ開ク是ナリ。立脚ノ地盤ニシテ鞏固ナラズンバ、名案良策モ空論ニ歸セン。切實ノ建設ニシテ缺如スルアレバ、雄圖遠略何カセン。此時ニ方リ吾人ガ東方振興上ニ關シ、半生ノ事業ヲ賭シテ計畫シ來リシモノ、着々其緒ニ就キ、前後緩急ノ序ヲ履ミ、各種ノ機關稍成形ヲ告グルニ遇フ。吾人ヲシテ此協會ヲ効興セシムル、豈ニ已ムヲ得ンヤ。

惟フニ滔天ノ西方ニ抗シテ、屹然トシテ東方ノ振興ヲ圖ラントセバ、先ヅ東南洋ニ於ケル商權ヲ收メテ、我掌中ニ歸スルヨリ急ナルハアラズ。商權ノ歸スル所ハ國際上渾テノ權力勢威ノ歸スル所ナリ。其的例ノ如キハ宇内ノ大勢世界ノ實狀ガ、吾人ニ敎視シテ歷々諸ヲ掌ニ指スルガ如シ。吾人今ニ於テ何ヲカ疑ハン。而シテ東方振興ノ氣運ハ漸ク囘轉シ來リテ、吾人ヲシテ前途益々多望ナラシムルモノニ似タリ。吾人爰ゾ駑鈍ニ鞭チ、彌々振作奮進セザランヤ。則チ玆ニ規模ヲ擴大シ、東方通商協會ヲ興ス。已ムヲ得ザル時運ニ際會シ、已ムヲ得ザル計畫ヨリ成ル事ナレバ、吾人狷犯自ラ揣ラズ深ク百年ノ望ヲ囑セザランヤ。諸君請フ勉焉。

明治廿六年十月十一日認

在東京　荒尾精

在清國上海瀛華廣懋館新舊所員諸君

荒尾精先生の人物識見は概略右の如くであるが、先生の心からの協力者として、支那に働く人材の育成を末長く續けられたのが、之また有望な陸軍將校の位置を去つて生涯を支那問題解決の爲に投ぜられた根津一先生である。先生が日清戰爭勃發に依つて中絶した日清貿易研究所の精神を復興して、東亞同文書院を建設し、今日に至るまで、支那に皇國の文化を浸透せしめ、或は皇國の支那に於ける活躍の地盤を形成したことは、多くの人の知る如くである。然も、根津、荒尾兩先生を陰になり、陽になつて援助し、幾多の困難に遭遇する毎に、心の灯となり、或は又實質的な物質的援助を惜しまなかつたのは、近衞霞山公、卽ち近衞篤麿公爵であつたことも、私どもの銘記しなければならないところである。之らの人々は、東亞同文會なるものを結成したのであるが、今日も尙ほ同會は繼續して、少なからず支那問題解決の上に力を致して居るのである。

先に示した荒尾精先生の書簡の精神が、日清貿易研究所の精神であり、經濟を通じて卽ち生活

を通じて日支の興隆提携を圖らんとするのが、之らの興亞の先覺者達の意圖したところであつた。日清貿易研究所の學生達によつて、一時上海に商品陳列所が設けられたこともかゝる精神の現はれの一つであるといへよう。日清戰爭の終結するや、荒尾精先生は直ちに新領土たる臺灣に渡つて、同樣の精神を以て本島人が心から皇國に協力することを促進しようとして、「紳商協會」なるものを作られたのである。先生の至誠と識見とに動かされ、その眞情にほだされて之に協力するものが次々と現はれ協會の基礎は略ゝ成つたのであるが、次いで上海を經由して對岸支那に渡るべく準備して居られた時、天はこの大偉材に命を藉すことを惜しんだか、先生はペストによつて忽焉として臺灣の地に逝かれたのであつた。今日先生の堂々たる偉軀を示す寫眞が殘つてゐるが、遺がに西鄕南洲先生を敬慕した人と覺しく、その體軀又南洲先生を髣髴たらしめるものがあり、到底三十八歳の青年とは考へられない。その老成した容貌、炯々たる眼光は、今も尙ほ先生は地下に在つて、アジア恢興の業を見守られつゝあることを私どもに强く信じさせるものである。

先生の傳記の傳ふるところによれば、一時西鄕南洲先生の家に寄寓されたことがあつた。或る晩のこと、ひよつと眼が覺めて見ると、隣の部屋で、南洲先生と夫人が何か話をして居られる。聞くともなしに聞いて居ると、夫人が南洲先生に「もうこの家は雨が漏ります。この度は　天子樣から御頂戴ものがありましたから、その一部でせめて雨が漏らぬやうにしたらどうでせう。」といつて居られる。ところが南洲先生は「何をお前はいふか。今日本は雨が漏つてゐるのだ。先づ日本を修繕しなければいかんのだ。」といはれた。之を聞いて夫人は深く前言を悔い、泣いて謝まられた。翌朝先生は南洲先生のところに行つて「昨夜はよいお話を偶然にも耳にして大變感激致しました。」といつたところ、南洲先生は默つて硯を引き寄せ、筆を執つて、

一貫唯々諾　從來鐵石肝

の詩を書き與へられたといふことである。

荒尾先生は南洲先生の後を繼いで、日本の雨漏りを修繕しようとせられたのである。荒尾先生といひ、根津先生といひ、その行實は實に南洲西鄕隆盛先生の意志を繼いだものであつて、聞くところによれば、日常の衣食住に恬淡であつたことは、到底我らの想像し能はざるところであり、根津先生の如きは、何時も荒尾先生の着古しの洋服を着て、餘裕があれば、一切を擧げて後進の育成又は日本の雨漏りの修繕に使はれたのであつた。根津先生が歿せられた時に、その棺を掩ふ爲の紋付を求めたところ、羊羹色の紋付以外には、一枚の禮服もなく、偉大な故人の棺を掩ふものとして餘りに相應はしくないといふので、他に探し求めたが遂に得られず、よれ〳〵にな

つた軍服がわづかに棺を掩ふに足る唯一のものであつたと聞かされて居る。

かうした先輩の汗と油が、あの自由主義華やかなりし時代に、内外擧つて遮斷せんとした日支の關係を、辛うじてつなぎ止め得たのである。樂善堂の精神並びに日清貿易研究所の卒業生八十九名が、文字通り血涙を以て踏査した報告書は、根津先生によつて大成編纂せられて、二千頁に亙る『清國通商綜覽』となり、後にわが對支政策の基礎資料となり、更に『支那省別全集』が日清貿易研究所の後繼者達によつて作られ、之らがわが參謀本部の支那調査の基礎を爲したことを我々はこゝに銘記しなければならない。

荒尾東方齋先生達が活躍せられたのは主として支那大陸であり、先生の存命せられた頃までは、未だヨーロッパ勢力が支那大陸に根を張らんとして十分その成果を收めて居なかつた時代であるといへるが、同樣のことは南方圈に於ても考へ得るのであつて、南方の實地を見聞した先覺者は、速やかに南方に商權を伸べて、歐米勢力の侵入を未然に防止せんとする熱意を披瀝して居るのである。荒尾先生は早くからこのことに着眼して居られ、前記の書狀に於ても、今にして南方に進出するに非ずんば、やがて歐米勢力によつて南方圈が鎖されるであらうといふことを述べて居られたが、先生の敎を受けられた群嶋忠次郎氏は、日清戰爭當時、金州で非業の最後を遂げた藤崎秀、鐘崎三郎の遺骨の處理をし、それを葬つた後は乃木將軍の部下として旅順に滯在し、やがて乃木軍が臺灣に向かふや、同氏も亦皇軍に從つて臺灣に赴いたのであるが、船中遑ある毎に、將軍に向かつて荒尾精先生の南方に對する經綸を繰返し〳〵述べたので、同船の參謀が、同氏と乃木將軍と話をしてゐると、又南洋經綸ですかといつてひやかした。したがつて謹嚴な乃木將軍は東方齋先生の卓見を身に沁みて感ぜられたやうである。群嶋氏の意見によれば、乃木將軍の臺灣總督就任の陰には、東方齋先生の思想が力强く動いて居るとのことである。

南方經綸といへば、樂善堂の作られたのと略ゞ同じ頃、わが國の地理學者として異色ある存在であつた志賀重昂氏が、海軍の練習艦に便乘し、南方カロリン群島、オーストラリヤ、ニューギニヤ、フイジー、ハワイを巡歷し、具さに南方の實情を視察して、南方經綸の要を說いた『南洋時事』なる書物がある。同書の附錄に於て、印度を論じ、臺灣を論じ、安南、ビルマを論じ、ラングーンが第二の上海であることを述べて居るが、氏は當時南方圈に强力な手を伸ばしつゝあつた英國の勢力を利用すべしとして次のやうに述べて居る。

嗚呼、黃、黑、銅色、馬來の諸人種は今日にして自ら計るところなければ、竟にこの世界は白皙人種の占有に歸せん。（中略）黃人種は宜しく今日に當り白人種と競爭しこれを防禦

し、以て予輩種屬の性命を保維するの策を講ぜざる可からず。（中略）亞細亞大陸に國あり、支那と云ふ。（中略）支那人民にして多年潛伏したる勢力を漸次發揮したらんには、其形勢これを白皙人種の諸邦國と軒輊するも敢て一歩も讓らざる可し。（中略）我日本これと協同連盟し、兼て英國と氣脈を通じ、以て立國の基礎を鞏固にし、漸く前みて歐米列國に對せば、國旗の性命を永遠に保維する、蓋し難きに非らざる可し。

又史學者にして、東京帝國大學古典科の出身である菅沼貞風先生に關しては、近時色々と論ぜられて居る。古典科の廢止といふことはわが教學の歴史の上に於て大きな問題であつて、元田永孚先生が『聖諭記』を著はし、　明治天皇陛下が大學の學風に就いて御宸念の深いことを述べて居られるのは古典科が廢止せられようとして居る當時のことであつた。菅沼貞風先生は、古典科に席を置いて、日夜圖書館に通つて『大日本商業史』の名著を著はされ、未だアメリカ勢力が比島に及ばざるこの時に於て、速やかにわが商權を南方に確立するの要を著述の結論とせられ、その結論に基づいて、東京高等商業學校の講師たるの職を擲つて親しくマニラに旅立ち、外地の地理、風俗、土語を究め、大いになすところあらんとしたのであるが、之また青春二十五歳にして病魔に侵され、一日にして彼の地に歿したのである。『新日本圖南の夢』に於て

夫れ天下は既に昔日の天下にあらず。東西の二球は混じて一となり、大塊の表面は悉く群雄の瓜分割據する所となれり。英吉利の版圖はジブラルタル、スエズ、新嘉坡の海峡を越えて直ちに香港の東に逼まり印度、濠洲の獨り其の外底たるのみならずして、顧みて加奈陀一帶の地方を見るも亦其有にあらざるはなし。巨文島の占領は假令其目的を達せざりしにせよ、太平洋鐵道の落成は敵國をして一歩我に近づかしめたるの實ありと云ふべし。新希尼亞既に獨逸に挫け、安南已に佛蘭西に入る。況んや魯細亞の浦潮斯德港を開き、西伯利亞鐵道を敷かんとするあり。樺太既に彼に奪はる。蝦夷豈虞なしとせんや。況んや支那が軍備を擴張して漸く富强を謀るあり。朝鮮將に彼に折れんとす。琉球豈憂なしとせんや。

と當時の形勢を論じ、之に對處する守禦の態勢として、

内地と植民地との間に商船の往來を開き、海軍の威力を盛にするの利益あり。其物產は固より其費を補うて而して餘りあるに足る。（中略）苟も能く之を取るときは、義以て士人倒懸の苦を解くに足り、利以て日本萬世の福とするに足る。所謂小を變じて大となし、敗を轉じて勝となすは實にこの擧より始まらん。かくて阿蘭陀の領する爪哇、スマトラの諸島を取り、而して後暹羅を助けて英と一戰し、マラッカの半島を復して新嘉坡の峽門を扼し、而し

て後朝鮮を助けて露と一戰し、滿洲の全域を復して、浦潮斯德、ニコライスク、樺太、東蔡加の嶮要を占め、而して後、朝鮮、暹羅を約束して支那の頭尾を箝制し、苟も機會あらば臺灣の一島を略取して彼が海上の威權を抑へ、勢禁形格して我に從はざる能はざらしめ、以て東洋の覇國たるは夫この策にあるのみ。

と述べて居るのである。その順序なり計畫なりは歴史の進展に於て必ずしも正しくはなかつたけれども、氏の意圖したところは、大東亞戰爭によつて今正に實現せられようとして居るのである。

又、明治二十三年に南島商會といふ貿易商館を設立し、天祐丸といふ九十一噸の帆船によつて、小笠原諸島から、グアム、ヤップ、パラオ、ポネピ諸島に巡航した先覺者に、歴史家として又經濟學者として著名な鼎軒田口卯吉先生があることを忘れることは出來ない。先生は、明治二十三年三月の東京經濟誌に「南洋經略論」なる論稿を寄せ、その中に、

其土地の所有權未だ定まらざるもの實に多く、既に定まるものと雖も之を得ること實に容易なり。新四千萬の同胞は既に國内に於いて遺利なきに苦しめり。我餘分の人民を驅りて此豐饒の地に注ぎ、以て南洋經略の地と爲す亦可ならずや。

と述べ、その爲には、わが國防は海軍力を主とすべきであるとの見解を持し、

我商業艦隊の增進するを以て、永遠なる堅固なる且つ節儉なる國防と思惟するものなり。而して此商業艦隊を增進する方法、豈夫れ南洋諸島の貿易を增進し、之に植民を興し以て我日本國と此諸島との交通をして頻繁ならしむるに歸せざるを得んや。故に余輩は我日本同胞の奮起して志を南洋諸島に伸ぶるに至らんことを希望するに於て殊に切なり。

と論じて居られる。

又、樽井藤吉氏は『大東合邦論』なる書物を著はして、アジア黄人種の一大聯邦を作るべしとの所見を述べ、副島八十六氏は、明治三十年南洋に渡航し、歸朝の後『南方經營論』及び『帝國南進論』の著をなし、明治四十三年、三叉竹越與三郎氏は、有名な『南國記』をものして居るのである。氏はその著に於て、

和蘭は曾て世界の銀行なりき。これ其熱帶植民地の貿易を專有したるがために外ならず。西班牙、葡萄牙が曾て世界の覇者たる時代もありき。これ其東印度、西印度の富を壟斷したるがために外ならず。乃ち今日の英國の富裕も、印度以下の熱帶地を有するもの、與つて六七分の原因を爲す。英國と和蘭が十六、十七兩世紀の間、海上の交戰に寧日なかりしもの

は、卽ちまたマレーの海洋を制せんと欲したるに外ならず。然れば列國が、今相競うて熱帶に植民地を得んと欲するもの、偶然にあらざるを知るに足らん。

と述べ、更に同胞に警告して曰く、

嗚呼我同胞よ、今は首を回らすの時ぞかし。一億のマレー人は、英佛の文化を受くる者の外、我開誘を須つもの雲霓の如し。歐洲人がマレーの海を探るもの數百年なるも、其大寶庫たるに昔日と變化なく、これを開くものを待ちつゝあり。日本國民若し能く此大寶庫を開くを得ば、大國民の宏業茲に完成すと云ふを得ん。余故に曰く、我將來は北にあらずして南に在り。大陸にあらずして海にあり。日本人の注目すべきは太平洋を以て我湖沼とするの大業にあり。

と、早くも大東亞戰爭を豫言して居るのである。

卽ち明治の先覺者達は、皇國の傳統を體認すると共に、皇國を巡る列强の覬覦する情實を、卽ち、會澤正志齋の所謂「虜情」を明確に把握し、之に對する「守禦」の態勢を整へんが爲に、信ずるところに向かつて挺身したことを私どもは知るのである。唯惜しむらくは『新論』に所謂「長計」の策――民を化し俗をなす、興亞の人材育成といふことが、僅かに樂善堂、日清貿易研究所、東亞同文書院の一線に保たれたのみであつて、大東亞共榮圈建設の人材養成の大業がその軌道に乘るに至らず、國內の敎育に至つては、むしろ歐米敎育の形骸を摸することに甘んじ、國體の體認と世界經綸の大志を振起するが如く指導せられなかつた點を遺憾とするものである。

四、東亞經綸の根本義

江華島事件に始り、京城事變、日清戰爭、北清事變、日露戰爭を經て、韓國併合で終りを告げたわが對外關係は、他面から眺めるならば、歐米列强の强壓によつて强要せられた安政の假條約撤廢の爲の數十年に亙る苦節の歷史であり、歐米の東方に對する野心は、或は三國干涉となり、或は日英同盟となり、滿洲を巡る日米の軋轢となつたのである。大正の大御代を迎へて間もない頃、歐洲の風雲急を告げて、第一次歐洲大戰が勃發し、大戰が始るや、日英同盟の情誼を重んじて皇國は直ちに聯合國に加擔し、獨逸の東亞に於ける根據地である靑島を攻略し、聯合國の不敗の態勢を誘致すると共に、英本國と英國植民地との交通路の保全の爲に、帝國海軍は甚大なる援助を惜まなかつたのである。

この間、支那に於ては、獨逸の權益繼承を巡つて所謂山東問題が紛議の種となり、之にアメリカの對支進出の野心が加つて日支關係は急速に惡化し、明治年代、日本と提携することによつて漢人多年の願望であつた清朝覆滅の事業が成就したにも拘らず、恩義を仇で返す革命政府の措置は、心ある人をして顰蹙せしめずにはおかなかつたのである。然るに、所謂ヴェルサイユ條約が成立し、ヴェルサイユ體制が米英的世界秩序の再强化を圖らんとするに當つて、維新の大業を忘却したわが國民上下の間には、歐米的文化を進歩せるものと誤解する風潮が次第に濃厚となつた。例へば、歐米は自由平等を以て立國の基礎となし、權利の主張に依つて社會の進歩が招來せられると信ずるが如き徒輩が簇出し、勞働者がその權利を主張して爭議を釀し、以て目的を達せんとする勞働運動ですらも、社會の進歩を促すものであると信ずる者さへ生じたのであつた。東京帝國大學の新人會の思想の如きは正にその代表的なものであつて、極るところ唯物史觀の讃美となり、マルキシズムの猖獗を見るに至つたことは周知の如くである。然もこの思想とこの學說とを支援するものの如く歐洲大戰後の經濟恐慌は世界的となり、わが國に於ては戰時に膨脹した不健全なる製造工業が、戰後米英勢力の復活と共に次第に販路を奪はれ、工場は閉鎖に次ぐ閉鎖を以てし、更に昭和二年の金融恐慌によつて國民の思想は一層惡化したのである。その間國民の傳統的信念と、世界經綸の雄渾なる精神力とは、社會不安の中に何時しか姿を沒し、明治年間の先覺の抱いた東亞復興の大經綸は殆ど顧みられなかつた。興亞の先覺者に繫るその後の思想家には、往々識見なき人があり、或は國を憂ふるの餘り、左翼運動防壓の先陣に立つた爲に、一般國民から白眼視せられるに至つた。先に述べた根津、荒尾兩先生と刎頸の交りを結び、遠く玄海灘を隔てた大陸の建設に烈々たる希望と熱意とを棄てなかつた頭山滿翁の玄洋社、或は遠く黑龍江の流れを越えて對露問題の解決の爲に盡瘁し來つた內田良平翁の黑龍會の如き、またはわが傳統文化を保持せんことを使命とし、杉浦重剛先生の激勵によつて國粹會を結成した梅津勘兵衞氏の一黨の如き、何れも暴力團の名の下に一括せられる有樣であつて、世は滔々として歐米文化心醉の傾向を辿つたのであつた。

大正九年一月十日、第一次歐洲大戰の平和克復に於て賜はりたる勅語に

今ヤ世運一展シ世局丕ニ變ス宜シク奮勵自疆隨時順應ノ道ヲ講スヘキノ秋ナリ爾臣民其レ深ク之ニ省ミ進ミテハ萬國ノ公是ニ循ヒ世界ノ大經ニ仗リ以テ聯盟平和ノ實ヲ擧ケムコトヲ思ヒ退イテハ重厚堅實ヲ旨トシ浮華驕奢ヲ戒メ國力ヲ培養シテ時世ノ進運ニ伴ハムコトニ勉メサルヘカラス

と仰せられたにも拘らず、勢の赴くまゝに底止するところを知らず、同十二年十一月十日には、國民精神作興の詔書を賜はつたのであるが、臣民として誠に慚愧に堪へざることといはなければならない。

先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ擧クルニ在ルノミ宜ク敎育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニシテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭儉勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ

と時世に對して宸襟を惱ませたまうたのであつた。

此の如き風潮の中にあつて、支那に於ては國民黨の勢力と中國共產黨の勢力とが逐次その勢を伸ばし、ボロージン、ガロン（ブルツヘル將軍）等ソ聯の意圖を受けて、これらの運動を强化せんとするものもあり、わが國に於ては對支不干涉の輿論が風靡し、一面軍縮和平の世を樂しむ有樣であつて、此の勢の趨くまゝに推移したならば、先覺の志もあはや地を拂はざるを得ない有樣であつたのである。一般國民にとつては靑天の霹靂の如く、柳條溝の銃聲一發と共に勃發した滿洲事變は、日淸日露の戰はいふまでもなく、歷史の表面に現はれざる前記の如き幾多の先覺の血潮と忠魂との憤激の現はれであつて、こゝに瞬く間に滿洲の建國を生み、更にその後に續く新たなる東亞建設のすめらみいくさとなるのであつた。

このやうな風潮の中にあつて、樂善堂の流れを汲む人は世の嘲笑と輕侮を他所にして、引き續き支那の實情の探索と支那の志士に對する交友とを續ける一方、後藤新平等の大雄斷に依つて基礎付けられた滿洲鐵道株式會社が、日露戰爭の勇士の血を以て染めた滿鐵附屬地並びに日淸日露兩役皇軍の勇戰奮鬪したる關東州を確保して、來るべき時を待望しつゝあつたのである。之らの人達の活躍は、やがて陸軍の支那班の活躍と表裏一體の關係になり、滿洲事變の勃發と共にその經綸が直ちに具體的な形をとつて、滿洲國の國生みを成したことは改めていふを要しないであらう。

その滿洲國の初代總務長官の要職に就いた駒井德三氏は、先に述べた志賀重昂氏等と共に北海道農大の出身者であるが、學窓を出づるや直ちに滿洲に赴いて、農業建設の面から滿洲、蒙古、支那の實地を踏査し、わが對支政策に遺憾の心を抱いた一人であつたことを知らねばならない。

前掲世界經綸の原理たるべき御詔勅に於て、或はその御經綸を生み給ふ大御心に於て、至誠の

心が如何に大切であるかが窺はれるのであるが、駒井德三氏の經綸に於ても至誠こそ大東亞建設の根本であることが示されて居ることは、之また我ら後進の考へるべきことであるといはなければならない。吉田松陰先生は至誠の人であつた。先生の一生は生命を賭けて至誠を貫くことにあつた。孟子は至誠にして動かざるものは未だ之有らずと說いたが、松陰先生はこの孟子の言葉の正しさを、生命を賭けて示した先覺者の一人であつた。支那の人民も至誠を尊ぶこと此の如きものであり、至誠こそ民族を超え人種を超えて、相通ずるものであると考へられるが、駒井德三氏の談を通じて、外地統治の難業も日本人の資質として他國民に冠絕する至誠の心によつて果し得るものであることを知るのである。支那に於ても忠臣義烈の士は必ずしも絕無ではない。否支那に於て却つて忠臣義士が歷史の表面に躍動して居るのである。幕末の志士達は、國體の尊嚴を說き忠孝義烈を讃へんとしても、幕府の治下にあつて存分に筆を振ふことが出來なかつた關係か、或はその學ぶ所が支那の經史であつた關係か、支那の忠烈の士に就いて論ずるところが多かつた。先に述べた橋本左內先生は、岳飛を敬慕して自らの號を景岳と稱して居られるが如きは著しい例證であり、松陰先生の遺著を繙いても、屈原、文天祥、岳飛等支那の忠烈に對して歸依する心が率直に述べられて居るのである。

併し乍ら翻つて思ふに、先生が獄中に於て講ぜられたと言はれる『講孟餘話』の頭書に「聖人を學ぶの道は、聖人に阿らぬ心にあり――」と述べて居らるゝやうに、支那の國家は禪讓放伐によつて成り立つて居り、忠節の士必ずしも支那の國家興隆に參畫し得たとはいへない。この點に於て、忠孝一如のわが國に於てのみ至誠を貫ぬくことが出來るといひ得るのである。

駒井先生は、大正年代中支那に生起した問題に就いて次のやうな談話をされたことがある。

大正の頃、江北の南通に張謇といふ知名の士があつた。張謇は熱心な敎育者であつて、當時江北の聖者と仰がれ、政治に於ける孫文と竝び稱せられたのであるが、同時に經濟の道に長け、南通を中心として各種の事業を行つた。最初日本人とも提携してやつて居つたが、その後米獨兩國の技術者竝びに顧問を招聘して敎育事業竝びに纖維工業、開拓事業等に專念し、張謇王國とまで稱せられたほどの成功を收めたのであるが、彼は日本人の性質を疑つて大の排日家として知られて居つたのである。農商務大臣になつた經歷から見ても、彼が如何に重きをなしたかを想像することが出來よう。張謇の弟子達の中から、今日重慶側の要人になつて居る者も少くないと聞いて居るのである。早くから張謇の人物に關心を持つて居た先生は、何とかして彼の日本に對する認識を改めんとして、或る時南通を訪れ、その盛んな事業を視察すると共に、彼に直接面會して認

識の是正を試みようとしたのであるが、到底聞き入れられさうもなかつた。空しく張謇の許を去るに當つて、敎育を主にした彼の事業が、やがて蹉跌すべきことを警告し「その場合は、貴公の信賴するアメリカ人もドイツ人も、恐らく援助はしてくれないであらうから、何ともならなくなつたら、貴公の嫌つて居る日本人の努力を求められるがよい。」と述べられたさうである。然るに幸か不幸かこの豫言が的中し、米獨人が離れ去つて、竟に張謇は資金の融通を日本に求めねばならぬ破目に陷つた。素より當時の日本には、性質のよく分からないこの種の仕事に資金を出すものは誰一人もなくて、張謇の命を受けた使者は、窮餘の策として駒井氏の斡旋を求めた。第一次の融資を駒井氏の口添へによつて東洋拓殖が引受けることゝなり、次いで張謇は全事業の善後策を駒井氏に託する結果となつた。

然るに當時わが國に於ては、關東大震火災が起つて日本からの援助は期待すべくもなくなつた。駒井氏は實地に就いて細密な調査を遂げ、一方滿洲の張作霖を動かして彼に資金を出さしめ、さしも困難な善後措置を二年有半を以て一應終了せしめることが出來たのである。北伐その他うち續く内亂の爲に、その後江北の地帶がどうなつたかはわが國には殆ど知る人もなかつた。當の駒井德三氏も、心にかけながら後日の事は知る由もなかつたのであるが、昨年春、機會を得て二十年振りに足を踏み入れたこの地方には、立派な稔りが見出だされたのであつた。二十年前、日華兩國の將來を思ふ至誠から、邪念なく蒔いた種は立派に成育をして居た。棉や米ばかりでなく、人の心も又駒井氏の恩を二十年間大切に抱きしめて居たことが分かつたのである。

昭和十六年の春、筆者は臺灣からの歸途、船中で大谷光瑞氏の談話を聞く機會を得たが、同氏は大東亞共榮圏のマンチエスターは上海になるであらうと語られた。恐らく江北の棉作地の將來を卜してのことであらうと今にして思ふのである。しかし、大東亞共榮圏に要する棉花の相當部分を產出する可能性のある江北の秘められた歷史の内に、このやうな美しい人情が湛へられて居ることを知る者は餘り多くないやうである。昨年上海の内山書店で刊行せられた『張李直先生謇自訂年譜』にもこのやうな記事は見られない。そして、この物語が、至誠の何物であるか、大東亞共榮圏建設の理念が何であるかといふことを極めて端的に、しかも具體的に示して居るのを私は嬉しく思ふのである。

第二章　米英亞細亞侵略の由來

一、近代西洋の成立とその東漸

皇國の護持を熱願した先覺達がもつとも憂へたのは、歐米列强のアジアに對する侵略の行爲であつたことは、其の言行並びに著述に明らかである。そこで、アジアを興すといふことは、先覺達の意見によれば、歐米の政治、經濟、文化、思想等萬般の流入を阻止し、アジアの傳統を守らんとするにあることは明らかである。

古來の世界の歷史を通覽する時に、東西兩洋の交通は相當古い時代から見られるが、昨今の如く、歐米勢力が世界の指導的地位に立つに至つたのは僅か數百年以前のことに屬する。所謂古代東方諸國の時代は、アジア的な文化がヨーロッパの上位に立つて居たと見られるし、ギリシヤ、

ローマ時代の文化に於ても、必ずしもヨーロッパ文化がアジア文化より優位にあつたと見ることは出來ない。原始キリスト教の文化の如きは、ヨーロッパ的であるよりもむしろアジア的要素を持つものと解せられて居る。古代印度のドラヴィダ文化の如きは、それ以後に入つてきたアリアン文化とは違ひ、明らかにアジア的なものであつた。ローマ帝國の分立の後に、北方人種ゲルマン、或はノルマンのヨーロッパ進出があり、これによつて近代的ヨーロッパ諸國が漸次形成せられて今日に至つたのであるが、ルネッサンスの歴史を回顧するに、オスマントルコがキリスト教の聖地エルサレムを侵犯したことが十字軍の幾度かのアラビヤ進出を促進し、近代都市の勃興を刺戟し、やがてアジア的要素とアラビヤに保持されて居た自然科學の力に依つて、所謂ギリシヤ、ローマ風文化の復興がなされたのである。爾來ヨーロッパ諸國相剋の間に鍛錬せられた近代的科學文明を武器とし、亞歐交通路の遮斷に對處して、海上發展の歴史が展開されたのである。先づ海洋に慣れたスペインとポルトガルとが、大西洋圏、地中海圏、更に阿弗利加沿岸に活動を開始し、亞歐交通路の發見の爲に地理的探險、或は冒險的な航海に乗り出したのであつた。その結果としてコロンブスがアメリカの地に、ヴアスコ・ダ・ガマが印度の西南部のカリカットに至り、歐米連絡路と亞歐連絡路とが彼等の手によつて開拓されるに至つた。

爾來ローマ法王の調停によつて、スペインは米洲並びに大西洋圏、ポルトガルは印度洋圏よりアジア大陸にその勢力を扶植し、危險な航海と異郷に於ける生活鍛錬とによつて、彼等の生活力は逐次訓練せられて行つた。そして遂にポルトガルは印度のゴアを基地として支那大陸に進出を試み、スペインは所謂ラテンアメリカ、南米の各地を略し太平洋に渡つてフイリッピンに基地を設置して、舊教徒の活躍と相俟つてヨーロッパ文化が世界に浸潤する地盤を形成したのである。

近代的科學文明の進歩は自ら近代的な産業の發達を促した。今日のベルギー領、當時のオランダの一部であつたフランドルの近代産業は、ヨーロッパに於ける近代産業の先驅をなし、オランダの經濟的勢力は、ヨーロッパに於て次第に重きをなした。この頃イギリスは、國内の思想的統一を、新たなる宗教卽ちイングランド教會の獨立に伴なふ新教勢力によつて成就しつゝ、ヨーロッパ大陸に於けるカトリック勢力の内でも、國力優れたフランスとの間に種々の確執を生じた。そして兩國はオランダを自己の勢力圏に導き入れる爲に絶えず爭鬪を續けた。新しい酒は新しい革袋を求め、オランダは竟にイギリスと同樣に新教國として新しい國家的相貌を備へるに至り、その豐かな經濟力を以て、海を越えて亞歐各地に進出を開始したのであつた。

スペイン、ポルトガルの場合は、ローマ法王の調停によつて勢力圏が概定せられて居つたけれども、ローマ法王に反逆して新教を國教としたオランダにあつては、ローマ法王の指揮に從ふ道理はなく、勢の趨くまゝに西葡兩國の勢力圏内に進出を開始した。ニューヨークの歴史を記した、書物の前半はオランダの歴史であつて、ニューヨーク州附近はニューネーデルランドと呼ばれてゐた。漁村より都市に發展を開始した當初のニューヨークが、オランダの首都に因んでニューアムステルダムと稱せられた如きは、オランダ勢力が北米に進出したことを如實に示して居る。西葡兩國の勢力が錯綜した南洋諸島に於ても、オランダの活動は見るべきものが少くなかつた。

當初、主として大陸の問題に關心を向けて居たイギリスも、かうしたヨーロッパ諸國の海外發展の風潮の中にあつて、地理的にいつても海洋に馴染み深いものが、いつまでも大陸の問題にのみ縛られて居る筈はなかつた。女王エリザベスの時代は、イギリスにとつては注目すべき方向轉換の時期であつて、この時代の代表的文學者であつたシェクスピアが、しきりと劇作の題材を大ローマ帝國に求め、國民の雄渾なる氣宇の啓發に力めたのと相俟つて、イギリスの海外發展は海賊船の形をとつて次第に育成せられつゝあつた。ケンブリッヂ大學教授として、或はケイヤスカレッヂの名譽教授として英國歴史の權威者であつたジョン・ロバート・シーリーはその著『英國發展史論』(Expansion of England) に於てこの間の事情を次のやうに述べてゐる。

十七世紀の大部分を通じてオランダは世界の運輸業を手中におさめ、アムステルダムは世界の取引所であつた。英國はクロンウエル時代とチャールス二世時代の初期、このオランダの獨占權に對抗して慘憺たる努力を續けた。オランダは十七世紀の末期にいたらず早くも敗北の姿を見せ、英國はこれに先んじて、斷乎として通商の覇權を得た。このやうにあらゆる項目を一つにまとめると、次の結論が出てくる。すなはち、英國は今や海事上、通商上、工業上にも覇權を握つてゐる强國であるが、これはまつたく近世の興隆によるものであり、十七世紀以前は主要な特徴をはつきりした形であらはさず、十七世紀になつて次第にこの形態を作つて來たのである。英國がさうなりはじめたのはいつごろかといへば、この答は實に容易ではつきりしてゐる。すなはちエリザベス時代からである。この時代こそ、まさに新世界の影響がはじまつた時代であつた。かう考へると、英國が近世的な性格を備へ、獨特な偉大さを現はして來たのは、最初から新世界のおかげであつたことは、この明らかな事實から推察できる。われわれが海の支配者となつたのは海賊の血を享けたためではない。われわれが商工業を制覇したのはアングロサクソンの產業の才のためでもない。これはもつと異なつた

特別の事情に基づくものであり、われわれが何百年間も耕作と遊牧をことごとし爭鬪をこのんで海に關心を寄せなかつた間は決しておこらなかつたものである。

―古田保譯―

當時は無論スペインの勢力がヨーロッパに於ては最も偉大であり、アジアにすらその名前を使はれて居るフィリップ二世が絶大なる勢力を振ひつゝあつた。彼は新たに勃興せんとするイギリスに對して掣肘を加へんが爲の施策を講じつゝあつた。女皇帝エリザベスに對する求婚を拒絶された彼は、その後英國内の舊教徒勢力と提携せんとして女王メリーを支持し、爲にメリーは悲慘な最後を遂げたことは、英國史を繙く者の誰しも知るところであらう。かくの如き英西兩國の確執が、やがてスペイン無敵艦隊のイギリス攻撃となり、わが天正十六年、イングランド海峽に於て、英國の機敏なゲリラ戰と嵐の襲撃とによつて、遂に必勝艦隊の名を誇つたスペインの艦隊も覆滅し、スペインの久しく有して居た大西洋圏の覇權は、この時を期して英國に移行したのであつた。之に就いてシーリーは次のやうにいつて居る。

無敵艦隊の遠征は、驚くべき事件だつた。英國がスペインとの間に開いた長い戰爭の性質を考へてみるがいゝ。わたくしは英國の船乘りをまるで海賊同然だといつたが、この戰爭は實際、英國にとつて、まつたく當時に於ける一種の產業であり、富を手に入れる道であり、最も繁昌する商賣であり、最も利益の多い投資であつたのだ。この對スペイン戰爭こそ事實において英國の對外通商の發生期であつた。英國の投資はこの時からはじまつたので、その第一時代にはまづ戰爭に資本をつぎこんだわけである。これは丁度今日われわれが鐵道か何かに金を投ずるやうなものではなからうか。それと同樣に當時、拔け目のない實業家たちはジョン・オクセナームやフランシス・ドレークがプリマウスで艤裝中だつた新造船の株を持つてゐた。この船はスペインの貿易船を襲つたり、メキシコ灣のスペイン都市を侵略するために造つたものであつたが、二國はまだ正式に開戰するまでにはなつてゐなかつた。二國が正式に戰端を開いたのは、新世界の獨占政策によつて通商と戰爭とが不可分なものでないやうになつてからである。

このやうな大勢は皇國の歷史に決して無關係ではあり得ない。皇國史の論著を見るならば、織田信長の活躍した前後に、ヨーロッパ人の渡來したことが必ず記されて居る。ヨーロッパ人の來航と火器の傳來、ポルトガル、イスパニヤとの貿易、キリスト教の傳來、キリスト教の傳道、卽ち耶蘇會士のわが國に於ける活動と切支丹大名のことが書き記されて居るのみならず、平戸に於ける和蘭並びにイスパニヤの商館設置、これに次いで切支丹禁制に伴なふ鎖國、島原の亂、長崎

出島に於ける日蘭貿易の狀態等が見られるのである。殊に江戸期に於けるわが國のヨーロッパとの關係は、終始長崎の出島に於けるオランダ人を通じて行はれてゐた。したがつて世界の形勢の如きも、オランダ人の主觀を通じて、オランダの利害と深い關係を持たせつゝ傳へられたのである。故にかの『和蘭風說書』に示されて居るが如き見解を以てわが國民は世界の大勢を眺めたのである。このやうな關係から、日歐交通といへば長崎を想起し、ヨーロッパといへばオランダを意味することが一般常識となつてきたやうである。

このことは、明治維新及びその後のわが對外關係を考へる場合に、主なる相手がイギリス、ロシヤ、アメリカ等であつたのと著しく異なるが如き印象を與へ、恰もオランダの勢力が、近世西洋の主勢力であつたかの如き錯覺を起させ、近代に於ける世界秩序の認識を甚だしく誤らしめて居たやうに思はれる。近代世界の樞軸は、何といつても英國であり、わが鎖國の期間に於てイギリスの勢力は大西洋圈から北米加奈陀に伸び、アメリカ獨立後に於ては、印度並びに印度洋圈の確保と經營とによつて世界に雄飛するに至つて居る。今我々が、當面の敵として擊滅に邁進しつつあるアングロ・サクソンを中心とする世界秩序なるものが、如何にして形成せられたかを考察することが、わが國近代の對外關係を見る上に於ても必要であるとしなければならない。

切支丹の傳道師、卽ちヨーロッパ文化輸入者の歷史的研究は、史癖に迎合するに相應はしき題材である爲に、從來、日本とスペイン、ポルトガル或はランダとの關係が、必要以上に歷史研究の分野で大きな位置を占めてきたのである。右に述べたやうな關係から、日本の歷史の內にアングロ・サクソン的世界秩序の形成の跡を辿ることによつて、正に擊破せんとする米英勢力が如何なるものであるかを明らかにしようと思ふ。

わが國の歷史を、大和島根の上に生起した個々の事件の如くに强ひて狹隘に解せんとする習慣から、ヨーロッパ勢力のアジアに滲透せる事實が比較的閑却せられて居るが、アジアのどの部分をとつて見ても、先に述べたやうな西邦、蘭、英、佛等の足跡の印せられざるところはないといつてよい。先般臺灣より南支の厦門に旅行した際、最も興味深く感ぜられたことは、その行程の至る所に歐米勢力の遺跡が存在し、然もそれらの勢力が、母に日本人を持つ鄭成功の活動によつて痛烈な打擊を蒙つて居る事實であつた。厦門島の周邊に鄭成功の遺跡があるばかりでなく、澎湖島及び臺南に於ても、鄭成功の進擊を蒙つたオランダの遺跡がある。オランダの臺灣太守コイエットの著はした『閑却されたる臺灣』――延寶三年、アムステルダム出版――といふ書物が飜譯せられてゐるが、その中に、オランダ人の臺灣が鄭成功の臺灣になつた事實が興味深く語られ

てゐる。即ちこの書の著者コイエットは、オランダ東印度會社の人であつて、オランダの臺南に於ける根據地であつたゼイランジャー城の陷落の有樣を、確實な當時の體驗を基礎として記して居るのである。國姓爺（こくせんや）、即ち鄭成功がゼイランジャー城を攻擊して居る圖や、蘭人代表二名が、國姓爺の陣營に赴いて談判して居る圖や、國姓爺軍に捕へられ、勸降使としてゼイランジャー城に送られたハンブルークが、却つて城主に死守を力說し、衆人の止むるのを排し、死を決して再び國姓爺の陣營に歸らうとする圖等が口繪に見えて居る。そしてそのゼイランジャー城はオランダの城跡と共に今尙ほ臺南市中に現存し、プロビンシャ城の遺跡として、臺南を訪れる史家に三百年以前の當時を想起せしめて居るのである。

臺灣文化三百年記念會の事業として『臺灣文化史說』なる論文集が刊行せられて居るが、國史より見たる三百年記念、ゼイランジャー築城史は、蘭人の蕃社敎化、臺灣蕃語文書、安平城跡赤嵌牢に就いて、臺灣三百年の資料、鄭成功時代の文化等、何れもオランダの臺灣に殘した足跡と、之を驅逐した鄭成功の事蹟に關するものであつて、臺灣の歷史の中にも近代史の荒波が强く打ち寄せて居るのを見逃すことは出來ない。更に基隆に至ると、このオランダ勢力に對抗せんとするスペインの遺跡が存在する。基隆灣の入口を扼する社陵島は基隆八景の一つであつて、山あり谷あり、千疊敷の岩盤がある。筆者の訪れた時はこゝに一大工場が建設せられつゝあつたが、こゝはスペイン人の築城の遺跡として知られて居る。即ち寬永十九年、オランダ人はスペイン人の城を攻落し、その城の濠の一つを存置して、これにノルトホルランド城址と名付けたものであり、工場建設の爲一部を殘して他は止むを得ず取り毀つた由を關係者から耳にした。今日は砦の跡は既に毀たれて殘つて居らないが、以前はこの附近にエルテンブルフサイン砦址なるものが存したと傳へられて居る。基隆から約六キロのこの地から、徒步を以て美しい海岸を步いて行くと左手に記念館があるが、その中には臺灣に關するキリスト敎關係の文獻が陳列せられて居り、有名なキャンベルの書物等もその中に見えた。キャンベルは英國スコットランドの人であつた。明治二年臺灣に來り、在留五十年、この地の傳道に精魂を打ち込んだ人で『オランダ治下の臺灣』なる著を以て著聞して居る。この記念館に保存せられて居る歐米人の關係資料、或は土俗品を見た後、基隆に近附くと、白砂靑松の連る海岸に、ヨーロッパ人の建設した墓地が見られる。之は今以てクールベ濱と稱せられて居るが、それは明治十七年の淸佛戰爭の時、佛國の海兵がこの地に上陸し、淸國の軍隊と戰つて利あらず、數多の戰死者を出した時の引率者クールベ提督及び彼に率ゐられた佛海兵の葬られた墓地に外ならないのである。クールベが臺灣を根據地として佛領

印度支那を獲得する爲の清佛戰爭の時に苦戰をした歷史は、臺灣の新聞社で飜譯した部下の將校の記錄によつて今日も見ることが出來る。

明治前後に、イギリスやアメリカが少からず太平洋に着眼して居つた證據は、神戸のイギリス總領事館の一館員バスケ・スミスの著『日本並びに臺灣に於ける西蕃』(Western Barbarian in Japan and Formosa)の中にも見られるし、又かの日本侵略の野望を隱しつつわが鎖國の夢をうち破つたペルリの『日本遠征記』の中にも、基隆灣の水深を調査した圖が載つて居ることによつてもうかがふことが出來る。

臺灣といへば、既に日本の領土に歸してより數十年、しかも內地人の臺灣の現狀に對する認識は、極めて低調で二、三の都市の名と砂糖の產出を知るに過ぎないことは誠に遺憾の極みである。この謂はば「忘れられた臺灣」に就いて見ても、近代のヨーロッパ諸國のアジア進出の姿が見られることは、單に興味深いことであるのみならず、重要な意義を持つものといはなければならない。臺北の博物館に足を運ぶものは、博物館の入口の右手に二臺の機關車が並べられて居るのに氣がつくだらう。九號の番號を附けた機關車は、明治五年、わが國最初の鐵道である東京橫濱間の線に運轉に使用したものであつて、領臺後本島の鐵道に移され、內地臺灣を通じて五十四年間運轉せられた記念物である。この機關車には、「一八七一年、英國アボンサイド會社」といふ文字が刻まれて居り、四輪連結サイドタンクの構造である。今一つは一號の番號が刻まれて居る。これは清國最初の鐵道である上海吳淞間に使用したものを、光緒十四年、卽ち明治四十一年に、劉銘傳が本島に鐵道を敷設するに當り持ち來つて「騰雲」と稱して基隆新竹間に運轉したものである。之には「一八八七年、ホーヘンツォーレルン會社」といふ文字が刻まれて居り、四輪連結アンダータンクの構造である。この二つの機關車の前にたてば、誰しも近代アジアの性格に深い感慨を抱かせられるだらう。

二、イギリス人の日本渡來

英國人の初めてわが國に渡來したことに就いては、外務省編纂の『外交志稿』に、永祿七年(一二二四年)に五島に來て通商を請うたと見えて居るが、詳細はよく分からない。日英關係が確實に辿り得るのは、慶長五年　一二二六〇年　オランダの船リーフデ號の航海士として乘り組んで居たウイリアム・アダムスが九州の豐後に來たことである。リーフデ號が、非常な辛酸を嘗めてわ

が國に渡來した經緯に關しては、臺北帝大の岩生成一教授が譯註を加へられた『慶元イギリス書翰』の冒頭に載せられた一六一一年十月二十二日附ウイリアム・アダムスより未見の同胞並びに知友に送りし書翰に詳細に見えて居る。ウイリアム・アダムスは、自ら記すところによれば、ロチエスターを去る二哩、國王の艦隊の碇泊するチヤタムよりは一哩の地點にあるギリンガムといふ村に生を享け、十二歳からロンドンに近いラインハウスにてニコラス・デキンス師の下に十二ケ年弟子入りをし、遂に女王陛下の艦隊の艦長及び航海長となつた。次いで十一、二年餘り、バーバリ商會に勤務し、後一五九八年五隻の艦隊の航海長に傭はれ、東洋遠征の途に上つたのである。オランダを出發してから、ゴンサルベス岬に上陸し、アンボイナ島に寄港し、マゼラン海峽で冬籠りをした後太平洋に出た。この頃僚艦何れも四散し、彼の船は智利の海岸に碇泊後セントマリヤ岬で土人の襲擊を受けたり、暴風雨の洗禮を受けたりした後、辛うじて豐後に到着したものである。日本に到着した時、家康は一應アダムスを投獄したけれども、その才を認めて後に側近に侍せしめた。アダムスは家康の爲に西洋帆船の建造をなし、或は幾何學を授ける等、次第に家康の知遇を受けることゝなつた。アダムスは後に三浦半島の逸見、卽ち今日の横須賀の近傍に所領を賜ひ、三浦按針の名を以て知られた人である。西洋型帆船を始めて作つた場所が、今日皇國海軍の一基地たる横須賀であることも何らかの因緣であらう。更に興味深きことは、彼が渡來した慶長五年こそ、天下分け目の戰さといはれた關ヶ原の戰の年であり、到着後數ヶ月後にして關ヶ原の戰が行はれたことである。更に、最初のイギリス人たる按針を乘せた船の船尾に付けられたエラスムスの木像が、栃木縣の龍江院に今尙ほ所藏せられ、久しく貨狄樣と稱せられて居た事實である。

のみならず、この年、イギリスのロンドンに東印度會社が生まれ、イギリスの東亞經略の上に一躍進が行はれて居ることは面白い點である。その後四年、慶長九年に、エドワード・ミッチエル・ボーンなるものが、ゼームス一世の特許を得て東洋の遠征を企て、日本に至らんとしたのであるが、その航海士であつたジョン・デービースが、昭南島附近に當るビンタンに於て日本人と衝突し、その犧牲となつて倒れた爲に、遂に志を達せず引き上げた。日本人が當時昭南島附近に於て活躍して居つたといふことは、後に述べる鎖國の問題と深い關聯を有するのであるが、吉野時代以來、わが國人の海外に於ける發展は、八幡船或は御朱印船として朝鮮、支那並びに南洋圏に及び、各地に日本町を建設したことからも推定し得るのである。

學士院賞を得られた岩生成一教授の『南洋日本町の研究』は、オランダ、イギリス、ポルトガ

ル、イスパニヤ等の文書を蒐集した貴重なる研究であつて、慶長九年から元和二年（先に掲げた『慶元イギリス書翰』の慶元とは、慶長元和の意味である）に至る時代の御朱印船の統計を擧げて南支、印度支那、南洋諸島に往來した船の數を百八十三隻と計上し、年平均十四、五通航を算して居られる。又日本人の南洋移住に關しては、文献に殘つてゐるもの丈でも七千乃至一萬と推計せられ、日本人町が比島のマニラとディラとサンミヂル、交趾支那フエイホー、ツーラン、東甫寨のピニャールーとプノンペン、泰のアユチヤ等にあり、分散離居して居る地域に至つては、臺灣、媽港、東京を始め、モルツカ諸島のアンボイナ島、バンダ島、テルナテ島、チモール島、マキアン島、セレベス島、ボルネオ島の西南、スマトラ島の東部、ジャワ島内のバタビヤとバンタン、馬來半島内のマラッカ、バタニ、リゴール、並びに遠く印度に及んで居ることを考證して居られる。教授が踏査された範圍に於ても、日本人の足跡を物語る遺蹟並びに史料は莫大な數に上り、日本人村跡を記してゐる地圖すらも現存して居る。從つて、ピンタン附近に於て、ミッチエル・ボーンの一行と衝突し、しかもこれを驅逐したといふことは荒唐無稽の言ではないことが分る。この事件に關しては、外國人が日本史研究を試みる際に多く利用するマードックの『日本歴史』の中にも見えて居るのである。

鎖國の時代はいふまでもなく、支那事變が起る前の日本人に、共榮圏の地理に就いての知識がなかつたことは、海南島の占領當時、海南島が如何なる地域にあるか、將來の南方經綸に對して如何なる地政學的な意味を持つかを知る者が少かつたことからも推定出來る。御朱印船活躍の頃には、南支、南洋への航路は活潑であつたことはわが國民の熟知するところであつて、藤田元春氏著『日支交通史の研究』の中の近世篇に載せられた、元和航海記航路の研究の一篇を見ると、その間の事情が明らかになると思ふ。

ミッチエル・ボーンの失敗の後を受けて、ゼームス一世の國書をわが國に齎したのは、有名なジョン・セーリスである。ジョン・セーリスは、英艦のローブ號に搭乘して慶長十八年わが國に渡來し、ウイリアム・アダムスを通じて皇帝の國書を捧呈すると共に、家康から朱印狀を賜はり、平戸に英國商館を設立し、館員十名を置き、大阪に支店を設け、關西地區はこの支店を中心に堺、京都等に代理店を置き代理人を活動せしめたのみならず、江戸や長崎にも代理店を設けたのである。ジョン　セーリスの日記は、最近東洋文庫から複製刊行せられ、平戸のイギリス商館長、リチャード・コックスの日記も現存して居るから、彼らの平戸に於ける活動の實況に就いては相當詳細に知ることが出來るのである。殊に私どもが注意しなければならないことは、コック

スが政府の糾彈に遭ひ、悲痛な心境の内に悶死してゐるにも拘らず、その日記が後に出版せられて居る點である。この書物が刊行せられたのは、一八八二年、即ち明治十五年であり、編輯者エドワード・トムプソンは本書の序文を大英博物館に於て書いて居ることは注目すべきことである。

リチヤード・コックスを中心とする英商館の活動の有樣は、先に掲げた『慶元イギリス書翰』として纏められ、この書物を通じて當時の貿易の狀況並びに新舊兩敎徒確執の有樣が手に取る如く分かるのである。ゼームス一世が家康に呈した國書並びに家康から彼に渡した朱印狀は『異國日記』に載せられて居り、日英間の最初の公の交涉史料として興味あるに止まらず、朱印狀の最後の條が治外法權を認めて居ることも注意すべき點である。即ち、わが國に於て罪を犯したイギリス人は、罪の輕重によつて、イギリス人の大將即ち日本に駐在して居るイギリスの代表者が裁判し、之を罰するといふことが述べられて居る。

異國日記

慶長十八年癸丑八月四日、いんからていら國王ノ使者、於駿河城御禮申上ル。王ヨリ音信色々進上也。此國ヨリハ始テ使者也。奉書蠟紙、貳尺タテ一尺五寸、三方ニ綴ニ繪アリ、三ツニ折、二ツニ折返シテ、紙ニテ針トジノ樣ニシテ、蠟印アリ。文言ハ南蠻字ニテ不レ被レ談故、あんじんニ假名ニカカセ候。

ぜめし帝王書狀之趣旨、天道之御影ニヨリ、おふぶりたんや國、ふらん本國めらんだ國（アイルランドをいふ）コレ三ケ國之帝王ニ、此十一年以來成申候。爲レ其かぴたん、ぜねらん、じゆわん、さつりむ、此等ヲ爲ニ名代一日本　將軍樣へ、爲ニ御禮可レ申、渡海サセ申候。如レ此申通ニ罷成候ヘバ　互之國ノ樣子、廣大ニ流通仕、我國之滿足之所不涉候。於ニ向後一ハ、每年商船アマタ渡海サセ、双方商人被レ爲ニ入魂一互之書物商賣可レ被ニ仰付一候。其上日本　將軍樣御意之旨於ニ懇情一者　商人ヲ當國ニ殘置、彌兩方懇和可レ被レ成候。然上ハ、我國ヘモ、日本商人ヲ自由ニ呼入、日本之重寶之物ヲ調法サセ、賣買可ニ申付一候。於ニ此上一ハ、イク久申通、日本ヘモ世心疏通シ可ニ申入一候條、被レ爲レ得ニ其意一可レ被レ下候。以上。

大ぶりたんや國ノ王
居城へおしめしたせめし帝王　れいきし

セーリスは駿府に於て家康に謁し國書方物を呈し、慶長十八年九月一日家康より返書及び七ヶ條の通商許可の覺書を得た。異國日記によれば、其の文案は左の如くである。

一、いぎりすヨリ日本へ、今度始而渡海之船、前商賣方之儀、無二相違一可レ仕候。渡海仕付而ハ諸役可レ令二免許一事。

一、船中之荷物之儀ハ、着次第目錄ニ而可二召寄一事。

一、日本之內、何之湊へ成共、着岸不レ可レ有二相違一。若難風逢、何之浦口へ寄候共、異儀有レ之間敷事。

一、於二江戶一、望之所ニ、屋敷可レ遣之間、家ヲ立致二居住一、商賣可レ仕候。歸國之儀、何時ニ而モいぎりす人可レ仕二心中一付、立置候家ハ、いぎりす人可レ爲レ儘事。

一、日本之內ニ而、いぎりす人病死ナド仕候者、其者之荷物無二相違一可レ遣レ之事。

一、荷物オシカイ狼藉仕間敷事。

一、いぎりす人之內從者於レ有レ之者、依二罪輕重一いぎりすノ大將次第可二申付一事。

右如件

慶長十八年八月廿八日

御朱印　いんきちていら

此法度書二通被レ遣、一通ハ渡海之船ニ置レ之、一通ハいから國ニ可レ置由也。……あんし（アダムス）ニ被レ遣レ之由也

先に述べた如く、三浦按針が渡來したのが關ヶ原の戰の年であるとすれば、當時家康の最も大きな關心事は、關ヶ原の戰後德川氏の勢力に對して反擊を加へようとする石田三成に擁せられた大阪方の勢力であつた。ところが大阪方は、舊敎徒勢力に依存しながら武備の增强を圖つて居る。德川方は何とかして之に對して絕對的優勢な武備を備へなければならないといふ狀態である。家康の側近に侍した三浦按針がこのことを知らないとは、到底想像し得ないところである。果して『慶元イギリス書翰』に載せられたイギリス商館員相互の文通を見ると、家康のそのやうな要望を滿たさんとして彼らは軍需品の輸入に全力を擧げて居るのである。卽ち、大砲の賣込み、彈藥の賣込み、更に皮革製品並びに羅紗製品の賣込みに關する記事が非常に多い。例へば、慶長十九年（一六一四年）四月二十日附、大阪發、ウイリアム・イートンより、江戶等諸地滯在中のリチャード・ウイッカムに送つた手紙には、次のやうに大砲賣込みの希望の多いことを述べ

て居る。

予は本月三日都にありて、先月十七日附江戸發のアダムス君の書翰を受取りて、皇帝の大幅羅紗四十三間、及び鉛全部を百斤に付き六十匁にて買上げしことを承知したり。

當地にては百斤は四十五匁以上にも成らざるを以て、彼が予のも全部其の相場にて賣らんことを望む。彼は又予に、皇帝が大砲と火藥の買上に付き確答を與へざりしも、彼には帝が之を買上ぐべき好き望ある由を報じたり。

又同年十一月二十五日附、リチャード・コックスよりリチャード・ウイッカムに與へた手紙の中には、

次に貴下若し鹿皮を買はゞ、大にして孔なきものを注意して選擇せられたし。（予の聞く所には　目下鹿皮は大小取まぜ百枚にて三百匁なり。而して蘇木は百斤四十匁、又生糸は百斤二貫三百匁なり。其の他支那織物につきては、品質に應じて我等が賣りしこと貴下の知れる所なり。又刀 Cattans の鞘及び柄を作る爲めに用ふる一種の魚皮あり。此は若し良く選擇せば、極めて好き商品なり。然らざれば、價値少きか又は全く無價値とならん。又水牛角は百本二百匁にて、當地に賣らる。

等と、わが國に於ける鹿皮、鮫皮、水牛角の相場に就いて述べ、同年五月二十二日附、江戸のリチャード・ウイッカムから大阪滯在中のウイリアム・イートンに急送した書翰に、

我等の船の五月十五日に到着したる事、及び南風強く天候惡しき爲め、砲及び鉛は未だ陸揚せざるも、三四日中に王忠秀の役人に之を渡して領收書を得、キャプテン・アダムスを駿河に遣して、其の販賣に關する交渉をなさしめ、同所より直に平戸に急行せしめんと欲する事。

を述べ、同二十五日、リチャード・ウイッカムより平戸のリチャード・コックスに送つた手紙には、

予は貴下に敬意を表す。オランダ通譯ザンザブローに託したる本月二十二日附の前の書翰は既に着したるべしと信ず。同便に託してイートン君に一書を贈り、船の到着に至るまでの事件を通知したり。其の後商品を悉く陸揚し、鉛、砲、及び火藥は、王等又は其の役人等に渡し、キャプテン・アダムスは之に對する領收書を受取り、五倍子及び錫の見本と共に之を携へて駿河の皇帝の許に至れり。皇帝は錫をも買上ぐべしと信ず。然るに鉛は大なる缺損ありて、一斤二十オンスとして計算するときは、重量に於て千三百五十六斤の不足あり。

又同じくウイッカムよりコックスに送つた別の手紙に、

キャプテン・アダムスは、砲を十四貫目にて賣り、（司令官の駿河に在りし時、請求せし價は十五貫なれど）善く賣れたりといふべし。火藥は一斤二匁三分、彈丸は一斤六分、鉛は前書に載せたる通りにて賣れたり。

と述べ、十一月二十五日、リチャード・コックスから東印度會社に送つた書翰にも、

皇帝はカルベリン砲 Culverins 四門及びセーカー砲 Saker 一門を十四貫目にて、又鉛六百本の重量一萬一千五百十斤なるを一斤六分（十分 Condrins は六ペンスに當る）の割合を以て、六貫九百匁にて買上げたり。

等と記して居り、又大阪に於ける火藥の需要の大なることを、ウイリアム・イートンからリチャード・コックスに再三報告をして居る。即ち十月二十七日の書翰には、

目下予は貴下に書すべき大事とては無けれども、唯當地にては只今火藥の需要大にして値段良く賣れるを以て、貴下の平戸にて所持せる所を全部當地にて持ち居りしならんにはと思ふこと切なり。

と述べ、同三十日の書翰には、

予が貴下に宛てし最後の書翰は、本書と同便にて託送せしが、書中予は當地にて火藥の需要大にして、今尚依然需めらるることを書したり。されば、若し本書貴下の手に入る以前に、貴下之を賣らざるならば、大至急之を堺に送る方宜しと考へられても差支へなからん。又貴下の其の地に殘せる鉛、並に猩々緋の羅紗を送らるべし。此等の商品の賣れるべきを疑はず。

と報告をして居るのである。

以上述べたやうに、英商館が當時活躍し得たのは、大阪夏冬の陣を控へて、關東關西兩軍共に戰備の增强に狂奔しつつあつたからである。このことは、慶長元和の役の終ると共に、イギリス商館の經濟が逼塞するに及んで遂に元和八年には英蘭兩國の間に防禦同盟が成立して兩國より十二隻の船を提供して防禦艦隊を編成し、ポルトガル又はスペイン人、もしくは彼等の關係者を襲撃して、捕獲物を平戸に於て均分することを約束して居る。この艦隊の一方の根據地は平戸、他は今日のジャカルタ、當時のバタビヤにあつた。然し當時尚ほイギリスの勢力はアジアに於てはオランダに一歩を讓つて居り、英國商館閉鎖後も依然としてオランダ商館が存在し得たことは周知の通りである。

こゝに今一つ注意すべきことは、新舊兩敎徒が互ひにわが國に地盤を得んとして相抗爭し、家康の側近にあつた三浦按針を通じて爲した新敎徒のスペイン、ポルトガルに對する中傷が、事實

に於て相當大きな効果を齎し、やがてわが國をして鎖國の決心をするに至らしめたと推定し得ることである。次に掲げる書翰は、リチヤード・コックスからリチヤード・ウイッカムに送つたものであるが、リチヤード・ウイッカムは先に引用せしところからも明らかなやうに、當時江戸並びに駿府の間を往來し、コックスとアダムスとの連絡をなしつゝあつた人物であるから、リチヤード・コックスがウイッカムに述べたところは直ちにアダムスの耳に入り、アダムスを通じて家康並びにその側近者に通じたものと見なければならない。その書狀は次の如きものである。

イスパニヤ王は暴力を以てポルトガルを簒ひ、其の正統なる世嗣を逐ひ出し、世界の他の地方に於ても、類似の行爲あり。又若し出來得べくんば、日本に於ても同樣の事を爲さんと欲す。而して伴天連は、民を煽動して謀叛せしむべき、適當の道具なりと貴下が云ふも無法に非ざるべし。此絃にて彈ぜよ。但し彼等が陰に貴下に危害を加へざる樣注意を要す。

更に注意を要すべきことは、新舊兩敎徒が後に一方は關東方を利用することによつて自己の地盤を獲得せんとし、スペイン、ポルトガルは大阪方を支援して、自己の勢力維持を圖つたと目される資料の存することである。大阪夏の陣が終了し、武家諸法度を頒ち、豐國廟を廢毀し、諸國に衣冠の制を定め終つた元和二年の三月、丁度家康が太政大臣に任ぜられた頃に、リチヤード・コックスがバンタンに滯在してゐたリチヤード・ウエストビーに送つた書翰には、その間のことを次のやうに記して居る。

クローブ號の日本より出帆後、皇帝は全耶蘇會員、說敎師及びフラインを追放し、敎會堂及び修道院を破却したり。彼等は英人の日本に着せしことに其の罪を歸せり。併し彼等が如何に勝手に考へ樣とも、彼等は再び日本に渡來することを許可せられざるべしと思ふ。若王秀賴樣は、皇帝に優勝せば、彼等の渡來を許可せんと約したる由なるが、若し此の事實現せば、我等は悉く日本國外に追放せらるべきこと疑無かるべし。依て現狀の方宜し。

先に文祿慶長の役に際して、和平の交渉に當つた小西行長の周邊に、耶蘇會士グレゴリオ・デ・セスペテスがあり、彼は朝鮮の陣に於ける小西行長の懇請によつて渡鮮し、日本傳道師フカン・エイオンと共に、文祿二年十二月九日對馬に至り、行長の娘で領主宗義智の夫人であつたマリヤの好遇を受け、次いで對島を出發して熊川に上陸した。彼はその後、行長の陣屋に在つて敎徒の禮拜を指導して居たが、加藤清正の攻擊によつて遂に朝鮮を退去しなければならなかつたといふ事實が存する。宣敎師側の報告によると「清正は行長がヨーロッパ人を陣中に招致して居るのは不軌陰謀を圖らんが爲であると考へた。」からであるとしてゐるが、然し之が宣敎師のいふ如

く、單なる讒訴であつたか、眞實和平が之らカトリック教徒の連絡によつて成り立つたものであるか、この邊の事情は審らかでないが、わが國に對するキリスト教諸國の謀略の歷史を通覽する時に、我々はむしろ淸正の炯眼に驚嘆せざるを得ないのである。島原の亂に於けるカトリック教徒の活動の如きも、宗教を通しての謀略としてわれらの忘るべからざる點である。

このやうにして、國內の和平到來と共にイギリス勢力はわが國からその跡を絕ち、爾後五十年間といふものは英國とわが國との間には何らの交涉も存しなかつたのである。延寶元年（一六七三年）リターン號が長崎に入港し、通商關係の復興を請うたが、之に對して長崎奉行は通商を拒絕したので英國は望みを達することが出來なかつた。然し我々は、その背後にオランダ人の入智慧が働いて居たことを知らなければならない。卽ち、先に引用した手紙の中に、舊敎徒に對するイギリスの誹謗があつたやうに、この時の拒絕の理由は、イギリス皇帝チャールス二世が舊敎徒國たるポルトガルの女王カザリンを皇后にして居るといふにある。斯樣なことは、わが幕府當路者の到底知り得ざるところで、オランダ人のイギリス排斥の現はれと見ることができる。『通航一覽』には、この間のことを次のやうに記して居る。

長崎奉行岡野孫九郎が閣老の訓令に基き用人河原玉兵衞、與力和田彌一左衞門、通詞の福吉左衞門、富永市郎兵衞をリターン號に遣はし申傳へさした趣は次の如くである。

「從彼國商船通路四十年令斷絕、其上近年はポルトガルの國主と結婚娶之緣、親出入有之候。先年爲御訴訟、ポルトガル國王よりかれうたふね長崎へ離着岸候。依爲切支丹宗門信仰之國、向後堅渡海仕間敷候。縱風に放され、日本之地に流來候共、船人共悉御燒捨可被成旨被仰付候國と緣組仕候段、不屆に被爲思召候……依之今度商賣之儀不被遊御赦免候之旨、貨物不殘積戾候之樣にと依下知云々」（『通航一覽』第六卷二百五十三、三百六十一頁）

その後百二十年間再び日英の關係は杜絕した。その間寬政四年（一七九二年）支那に通商を强要した有名なマカートニー卿が、日英通商の開始を計畫したことが記錄に見えて居るが、英佛開戰の爲にこのことも中止となり、竟に文化五年（一八〇八年）かのフェートン號が長崎に侵入するまで、日英の關係は中絕して居る。

三、東亞に於けるアングロ・サクソン勢力の瀰漫

この日英關係杜絕の間にイギリスの勢力は著しく進展し、慶安三年にはセントヘレナ、承應元

年にはケープタウン、萬治二年にはヂャマイカ、元祿九年にはカルカッタ、寶永元年にはヂブラルタル、元文八年にはシドニー、寛政八年にはコロンビヤ、ギャナ、同十二年にはマルタを領し、フェートン號渡來後十年に當る文政元年には印度の孟買に牢固たる地盤を築く譯である。更に詳述すれば、イギリスの植民地たりしアメリカが獨立し、イギリスは印度に總督政治を布き、ベンガル灣、ペルシヤ灣を擁する印度一圓の支配體制を整へ、トルコ、アラビヤ、イラク、イランの地域にも漸次勢力を伸ばし、印度洋周邊地區に向かつても種々の工作を開始して印度洋圈全般にイギリス勢力を確立せんとする態勢にあつた。英國歴史の權威者シーリーが前掲の『英國發展史論』の中に於て、從來の英國史の書物は憲政發達史として考へられて居るが、近代英國史を把握しようとする者は、英國の膨脹史として之を眺めなければならないことを次のやうに述べて居る。

新世界とアジアに於ける英國の膨脹が、十八世紀の英國史をまとめ上げる眼目であることはすでに述べた。さらに十八世紀の中期における三つの大戰爭こそ、すなはち新世界の領有を爭つた英佛の大決戰だといはう。これは今日までめつたに注意した者もなく、當時これを認めてゐた者はおそらくなかつたであらう。しかし英佛、第二の百年戰爭の說明は次のやうになる。すなはち英佛はともに新世界領有をめざして名乘り出た競爭相手であり、十八世紀の中葉を占める三戰爭は謂はば大世界戰爭の中の決勝戰である。

いつたい、われわれが北米を領有出來たのは、無人の地を發見し、他國民より多くの船を持つてゐたから移民をこの土地へ樂に輸送できたのだといふやうな、そんな單純な理由によるのではない。なるほど他國が領有してゐたものを征服して奪つたのではないけれども、われわれには植民地經營の競爭者、われわれよりも多少先んじてゐた競爭者があつたのだ。その名をフランスといふ。

北米についての單純な事實はかうである。ジェームス一世がヴアージニヤとニューイングランドに勅許狀を與へたと同じころ、フランス人はさらに北方でアカディヤとカナダの二植民地開拓に手をつけてゐた。またウイリアム・ペンがチャールス二世からペンシルバニヤの勅許狀を受けたころ、フランス人ラ・サールは探險的手腕を發揮して大湖地方から進んでミシシッピーの水源をきはめ、船を浮べて洋々たる大河を航破し、メキシコ灣に出て、その後、間もなくフランス植民地ルイジアナとなつた廣漠きはまりなき土地を發見した。北米における英佛の關係はこのやうなもので、それは一六六八年の革命に續いて、いはゆる英佛、第二の百年戰爭がはじまつた當時

のことである。英國は東海岸に沿つて南北にひろがる一帶に肥沃な植民地を持つてゐたが、セントローレンス、ミシシッピーの二大河はフランスの手中にあつた。政治の今後を豫想し、革命當時からその後、ずつと、この二大植民地國家の前途を比較する者は、この二大河がフランスに大きな利益を與へてゐるのを見て、將來、北米は英國には屬せず、かへつてフランス領になるだらうと考へたかも知れない。

さてここで最も大切なことは、英佛二國が北米ばかりでなくアジアでも肩をならべて進んだのを見落さないことである。インドが英國商人に征服されたことは稀有な現象のやうであるが、さうしたことを考へ出す創造性とか、これを實行にうつす氣力とかいつた何か特有なものが英國人にあつたと思ふのは誤つてゐる。インド征服の考は熟慮から生まれたものだが、その限りではこれを生んだのはフランス人であつた。フランス人はまづそれが實行可能なることを認め、どうすれば可能になるかを知つてゐた。だからフランス人は先に立つてこれに着手し、完成をめざして進んでゐた。かれらは實にインドでは北米の場合よりも一層、確實にわれわれの先手を打つたのである。われわれはインドでは最初からはるかにフランス人の後塵を拜する感があり、何の希望もなく自衛の精神で戰つた。（中略）

フランス革命政府との戰爭やナポレオン戰爭も、やはり新世界の領有がその原因の一つとなつてゐることに變りはない。フランスは以前、新世界から驅逐された恨みを、米國獨立戰爭で英國に晴らしたが、ナポレオン時代には失地回復をめざして怪物のやうに動きまはつた。これは實にナポレオンの英國に對する定見であつた。すなはちナポレオンの眼にうつつた英國は決して歐洲國家の一孤島ではなく、つねに網のごとくひろがつたいくつかの屬領と植民地、そしていたるところの海を蔽ふ島々を打つて一丸とする世界帝國であつた。（中略）

かれはフランスがまさにインドを制壓せんとする瀨戸際まで來て、つひに英國に邪魔されたのをおぼえてゐた。それ故かれは討英戰爭はまづエヂプトを占領し、同時にテイッブー・サルタンを煽動して、カルカッタ政廳と戰はせるのが最もいゝと、時の總裁政府（Directory）に進言して、つひにさう決心させ、かれはこの計畫を實行した。かうして英佛戰爭はイギリス海峽からすつかり、廣大限りなき大英帝國の版圖內にうつり、アイルランドも間もなく叛旗をひるがへしたものの、フランスはボナパルトの援軍を送ることができず、わづかにユンペル將軍の指揮する一萬一千の兵を送つただけだつたので、アイルランド人はこれには大いに失望した。

この戰爭は一八〇二年のアミアン條約で終つたが、この結果は大英帝國史に一大時期を劃する

に足るものであつた。まづフランスはこれによつてエヂプトから撤兵した。すなはちボナパルトのインド帝國占領の壯圖もつひえたのである。公民テイップーと呼ばれた同盟者、テイップーは戰爭に敗れ、その少し前に殺されてしまつたので、ベヤード將軍は英軍を指揮して紅海に出動し、ハッチソン將軍と協力して佛軍をエヂプトから擊退した。同時に英國は植民地地方ではセイロンとトリニダードを占領したのである。

オランダが其の勢力を次第に失墜し、英國はフランスとの植民地戰爭に勝利を得て、略ゝ大英帝國の今日の形が形成せられたのである。新舊兩國の勢力の消長につき、シーリーは更に次のやうに續けてゐる。

十六世紀の間はスペイン、ポルトガルの二國が、ほとんどまつたく新世界を思ふままに領有してゐたのである。この二國は新世界の開拓に最も力を注いだ。主としてスペインは米大陸を、ポルトガルはアジアをねらつてゐたのだが、つひに一五八〇年、兩國は併合することとなり、それ以來、六十年間は一國となつてゐた。オランダは一五九五年から一六〇二年にいたる七年の間に堂々と帝國領有競爭に參加した。これに續いたのが英佛二國で、それは十七世紀のはじめ、英國ではジエームス一世の治世であつた。

又印度統治に就いてシーリーは次のやうにいつてゐる。

一七九八年、ウエルズリー卿がインド總督となつたが、この時からインド政策に新時代がはじまつた。かれははじめ干渉と併合の理論を實行した。その後、ヘースチング卿もこの理論をとつたのである。

一七九八年はわが寛政十年に當り、フエートン號の長崎侵入に先立つことは恰も十年のことである。當時イギリスの勢力が印度に於て牢固たるものになりつゝあつたことが、英人史家自らの語るところによつて明らかなのである。このやうな關係は、國史の上に於ては文化十年、シンガポール建設者として著名なスタンフォード・ラッフルスの謀略に基づく長崎に於けるオランダ商館讓り受け計畫に端的に示されてゐる。

以上述べたやうな英國の勢力伸張は、一面に於てはフランス革命を巡る歐洲の動亂に促進せられたと見るべきであらう。寛政四年にはオーストリヤ、プロシヤ二國はフランスの革命黨に敵對し、翌五年、フランス王が斷頭臺上の露ときゆるやオランダもイギリス、フランスと共に新たに墺普兩國に加擔し、こゝに第一回の對佛同盟が成立したのである。爾來同盟諸國とフランスの革

命黨とは屢〻干戈を交へたのであるが、フランスの勢强く、オーストリヤ領のネザーランド、卽ち今のベルギーを忽ち征服し、オランダも寛政六年之に侵略せられ、王族はイギリスに出奔した。ここにおいてオランダ國はバタビヤ共和國と變じてフランスの所領に歸した。爾後ナポレオンが沒落するまでオランダはフランスの支配下に立つたので、その植民地たるジヤワも本國と運命を共にし、ジヤワを基地とする長崎のオランダ貿易も亦その影響を蒙ることを免れ得なかつた。

オランダがフランスの治下にあり、イギリス方の聯合國側にフランスと共に對峙してゐたことは、當時漸くアジアに勢力を伸ばすに至つたイギリスによつて、オランダの商權が脅やかされることを豫想せしめる。果して英艦フエートン號が、文化五年（一四六八年）長崎に闖入し、オランダ商館員二名を拉致し、オランダ艦隊の日本近海に遊戈し居らざることを確かめた後、抑留の蘭人を拘監して解纜したといふ事件が起つた。これより先、わが國は恒例のオランダ貿易船の久しく渡來せざることを訝り、屢〻商館長に理由の說明を求めたのであるが、自國の不利なる情勢がわが國に傳はることを恐れ、言を左右にして來船なきことを辯疏しつゝあつたのである。渡來の異國船が蘭船に非ざることを確めた長崎奉行松平圖書頭康英は、蘭人の捕縛せられたことを非常に憤り、事情の判明するまで英國船を抑留せんとしたが、蘭館長ヘンドリック・ヅーフその他の者が奉行を慰撫してことなきを圖つて居る。然しながら、松平圖書頭は警備が薄弱な爲に英國人をして暴行を擅にせしめたこと、又徵發した兵隊の到着が遲かつた爲に、英艦を燒打する時を失つたことを遺憾とし、自己の責任を痛感して、英艦が立ち去るのを見屆けて自決したのであつた。この夜奉行は、部下の親しき者と酒汲み交はし、十時頃まで歡談をしたのであるが、既に自ら決するところあり、一同退去後竊かに自刄し果てたのである。奉行は死に臨み、五條の謝罪書を殘してゐる。その五條とは、

一、檢使が二蘭人を奪はれたる儘、空しく引き取りたること。

二、かゝる場合に備へる爲、豫め水陸の警戒手筈を定め置かざりしこと。

三、異船の三艇港內を廻りし時、兩番所の兵士少なかりし爲、之を看過したるは奉行も責任あること。

四、異船無禮なる要求を爲せしも、兵數不足の爲、蘭人の希望を容れ、薪水糧食を與へて穩やかに處分せしこと。

五、大村藩の兵來ること遲く、爲に燒打の時機を失ひたること。

等である。このことを聞いたる佐賀藩の重臣數人も亦自刄して主君に謝罪したのであつた。當時

の外交の衝に當つた武士の責任感は、今日私どもが以て範としなければならないものである。

このやうな謂はゞ前奏曲の後に、突如として英國が出島の蘭館を讓り受けんとする交渉をヅーフに對してなす事件が勃發した。

英國はジャワを以て、印度、支那方面に於ける英國の商業貿易の根據地と化さんとし、新たに軍艦三隻を派遣することになり、新總督ヤンセンスが之に乘り組み、文化八年（二四七一年）四月、ジャワに到着をした。この時オランダ植民地の狀態は風前の灯の如きものであり、モルツカス諸島は既に英國の手に歸し、ボルネオからは蘭人が總べて退却し、ジャワに於ては、英國の襲撃あることを豫想して、人心は戰々兢々たる有樣であつた。英國東印度會社に於ては、必ずしもジャワを英國の領土にする決心はなかつたが、先のフェートン號事件の前年、卽ち文化四年（二四六七年）以來印度總督であつたミントー卿は早くより英國領土の擴大を圖り、文化六年（二四六九年）佛領ブルボン島、及びフランス島に遠征隊を出し、次いでモルツカス諸島並びにセレベスのメナドを蘭人から奪取し、更に大擧してジャワを征討する計畫を立てゝ居た。この大事業の畫策を總督に献じたのが、當時ペナンの知事であつた一青年、トーマス・スタンフォード・ラッフルスその人であり、いふまでもなく、今日の昭南島卽ら英國の嘗ての東亞に於ける重要なる基地であつたシンガポールの建設者である。

ラッフルスは一船長の子として生まれ、十四歲の時東印度會社に入り、正式の敎育を受ける機會がなかつたが、天賦の才能は現地の敎育によつて磨かれ、馬來半島地方の言語文物の研究に熱中し、マラッカで東洋學者レーデンの指導を受けて識見を擴めた。その後彼は、總督ミントー卿の內命を受けてマラッカに至り、以來半島及びジャワの狀態の調査に從事し、ミントー卿のジャワ攻略を援助すること大であつた。ミントー卿がジャワを降伏せしめたのは文化八年であるが、彼は九月十八日に降伏條約を結ぶと共に、ジャワ征服の首謀者たりしラッフルスを、ジャワ及びその附屬地の總督たらしめた。かねて日本との通商の再開を考へて居つたラッフルスは、日本人がオランダの現狀並びにバタビヤが目下危險な狀況にあることを知るに至つたならば、必ずやオランダ人を退去せしめるであらうとの考の下に、部下のオランダ人達に日本の事情を尋問し、日本市場の調査をなした。そして日本貿易が非常に有望であり、且つ日本人が文明人であることを知るに及び英國商人の爲に直接之と通商せんとするの熱意が愈ゝつのつたのである。當時日本の蘭商の商館長であつたワルデナールが現商館長ヘンドリック・ヅーフの恩人であることを知るや、この恩義をかさに蘭商館をイギリスに讓り渡さしめんと企て、ワルデナールとダニール・エ

ーンスリーに商館讓渡の重任を委託した。エーンスリーはラッフルスが適材として任用した人で、彼は之をミントー卿に薦めて「學識ある優秀の士にして此の巧妙なる計畫を遂行するに最も信頼し得る人物なり」といつて居る。ラッフルスの彼に與へた任務は、之迄蘭人が長く專有して居たわが國の貿易を英國の手に移し、其の上之と一層廣く且つ有利な通商を興す爲、日本の國政及び資源を精査せしめる事に存し、高額の手當を彼に與へて居るのである。

かくして文化十年六月二十七日、オランダの國旗を掲げて異國船二隻が長崎に到着し、ヅーフとの間に商館讓り渡しの折衝が行はれた。一八一三年六月四日附（文化十年）ラッフルスからヅーフに當てた手紙は次のやうに記されて居る。

茲に予が貴下に通告致候件は、元日本駐在甲比丹並びに印度評議官たりしウイレム・ワルデナール氏が、オランダ及び此の植民地に起りたる事變を日本政府に上申可致、特別雇入船二隻を率ゐて委員として日本に出向し、而して貴下は同人の直接命令の下に就く事と相成候事に御座候。二船の積荷は委員の持參せる船荷目錄によりて御承知相成度候。

といふのであつて、ヅーフにとつては正に寢耳に水ともいふべき高壓的な指令であつた。ヅーフは之に對して、日本のオランダ商館は單獨孤立であり、決してジャワ附屬地といふべきものではないから、ジャワが降伏して英國の所領となつたからとて、讓り渡す譯にはいかないといつた。彼が前年、フェートン號事件によつて日本人が英國人に對して憤りの心を持つて居ること等を巧妙に利用したことはいふまでもない。一八一三年七月二十六日、ヅーフ、ワルデナール、エーンスリー並びに立會人ヘンリック・ブロンホフの四名が署名して居る協約書には次のやうに記されて居る。

日本に於ける和蘭貿易及び其の他の事務の主長たるヘンドリック・ヅーフと現瓜哇政廳の代表たる元蘭領印度評議員ウイレム・ワルデナール及びバタビヤ外科長ダニール・エーンスリーとの協約

瓜哇島及び其の附屬地の總督閣下は、一八一三年六月四日附の書面にて、第一署名者は第二署名者の直接命令の下に置かれたる由通達せられたれども、第一署名者は之を遵奉することを拒絕する旨、第二及び第三署名者に言明せり。同書によりて、植民地が敵の爲に侵略せられしこと明白なれば、第一署名者は此の命令に服從すること能はず。然し彼は現に目前に在るシャーロッタ及

びマリーの二船並びに二船にて渡來せる人馬全體が危險の境遇に在ることを、第二及び第三の署名者に警告せり。即ち若し第二署名者が日本人に、此の二船は何國の所屬なるか、何者の名義にて渡來せしかを告ぐる時は、如何に巧妙婉曲に之を言ふとも、船は忽ち容赦なく燒かれ、乘組員は悉く殺さるべし。日本人は殊に一八〇八年の英國軍艦フェートン號事件以來非常に英國民を恨み、同艦の此の地に於ける暴行に對して、最も峻酷に報復せんとて、只管機會の到來を待ちつゝあれば、第一署名者は之に對して何等の手段をも講ずること能はず。尤も此の事件の爲に、長崎奉行及び肥前侯の重臣にして番所長たりし者五人は切腹し、肥前侯自身も百日の閒家に閉居し、其の閒鬚髯も剃ること能はざりしかば、是れ見易き事なり。故に侯は勿論、其の他多くの日本人は、萬一英國人が其の手中に入る時は、皆之を殺戮せんと欲し、今現に同侯の臣民等は番所を守備しつつあり。

第一署名者は日本に於ける和蘭貿易の主長として自認し、瓜哇の現政廳とは何等の關係なく、從つて毫も之に對して責任なし。されど若し彼が事件の眞相を日本人に公表すれば、假令渡來の人々は日本國民に對して少しも侵寇の意を抱かずとも、彼等は必ず日本人の復讐心の犧牲となるべく、事態の頗る險惡なるを憂ふ。故に彼は此等無辜の者を日本人に渡して、必至の運命として、其の生命を失はしむるは、如何にも忍び難きを以て、次の協約を結ぶことに決せり。

日本人に嫌疑の口實を與へざるため、二船の積荷全部は第一署名者に引渡さるべし。然して第一署名者は常例の如く之を取扱ひ、取引事務終了の後、第二署名者に對する計算を爲すべし。

第二及び第三署名者は一八〇九年以來の負債及び本年分までの諸經費を彼等の政廳にて引受け、船荷の賣上代金を以て之を支拂ふべし。第一署名者は其の報償として、剩餘金の有る限り本年輸出を許さるる數量ほど銅を渡すことを約す。其の數量は六千七百六十六日本擔にして、一擔につき定例の如く十二兩三匁五分の相場とす。其の外第一署名者分七百擔を渡すが故に、是は一日本擔につき銀貨二十五ライクス・ダールデルの相場とし、合計一萬七千五百ライクス・ダールデルを第一署名者又はバタビヤに於ける同人の代理人に支拂ふべし。若し尙資金あれば、其の外樟腦五百擔を渡すべし。

一八一三年七月二十六日

於日本

ヘンドリック・ヅーフ

ウイレム・ワルデナール

ダニール・エーンスリー

立會人

ヘンリック・ブロンホフ

このやうにして、英國の計畫に抗することが出來たのであるが、ラッフルスは尙ほも初志を貫徹せんとし、ミントー卿に對しても、このことが必ず成功すべき旨の確信を述べ「日本との交通は開かれ、我らは甚だ有利なる銅及び樟腦を持ち還れり。予は日本に英國の永久的利權を樹立し得ることを期待す。」等ともいつて居る。彼の第二次の特使はカッサであり、翌文化十一年八月八日、長崎に到着して居る。ラッフルスはカッサを新日本商館長に任命し、ヅーフをバタビヤに還さんと企てたが、是の時カッサは、總督ラッフルスから舊甲比丹ヅーフ及び新甲比丹カッサに宛てた一書を差出して居る。

日本貿易の甲比丹たるヅーフ君及びカッサ君へ

我が政廳はシャーロッタが殊に日本貿易に適するが故に、（且つ差當り他に適當なる船なきが故に、）前回と同一の船長及び船員を乘組ませて、再び之を日本に送ることと相成候。因て此等の事を貴下に報告し、同時にドクトル・スハープを同船の航海中、船醫として任命せしことを通告に及候。尙甲比丹ヅーフの勘定として送られたる銅は、此地にて同人の代理人に正當に支拂はれ候間、御承知相成度候。積荷證及び其他の商事書類は總務部より貴下に御送附致すべく候。其の他特に報道すべき事無之、政廳に關しては甲比丹カッサより同僚甲比丹へ宜しく御報告願上候。

一八一四年七月二日バタビヤにて

總督　ラッフルス

之また前回と同樣に極めて高壓的な處置であり、ヅーフは再び前回と同樣の理由により之を拒絕して居る。而もヅーフは、自國の政變によつてオランダが非常に不利な事情にあることのわが國官憲に知らるることを恐れて極力之を防ぎ、英國の使者の到來したことをも隱蔽してゐたのである。その内オランダ本國が復活し、ヅーフの努力によつて、出島の商館は英國に讓渡されること

とを避け得たのであつた。

この事件を通しても、日本はオランダを通じてヨーロッパ人の事情を知る以外に道がなかつたといふことが、日本の世界の大勢を知る上の障碍となつたことが推定せられるであらう。先に掲げた『和蘭風說書』なるものは、わが國識者に取つては世界情勢を知るに最も有力な資料であつたが、之に就いて校訂者の板澤武雄氏は次のやうに述べてゐる。

風說書は大體において正確な報道をしてゐる。特に本書に收錄した年代は比較的詳細にして且つ正確である。英蘭戰爭の報道の如きは、オランダ側に不利益と思はれることすら報道してゐる。然るにフランス革命後、オランダ本國が一時フランスに併合せらるゝころになると、事實を曲げて報道してゐる。フランス革命の報道は一七九四年（寬政六年七月五日）に屆いてをるから、その物發より六年目になる。これから文化年間にかけて虛報が少くない。例へば文化六年（一八〇九年）六月十八日の風說書には、

フランス國王之弟ロウデウエイキ・ナポウリユスと申者、阿蘭陀國に養子仕、國王に相立申候

とあるは巧言を以て我を騙したものである。一七九五年フランス革命軍がオランダに侵入し、オランダ聯合國總督 Stodhauder のオランヱ公ウイルレム五世 Prins van Orange, Willem V は英國へ逃れ、ついでバタビヤ共和國 Bataafsche Republiek の出現を見て、オランダは革命フランスの勢力下に置かれ、越えて一八〇六年四月五日バタビヤ共和國を變じてオランダ王國 Koninkoyk Holland となり、ナポレオン一世の弟ルイ Loui Napoleon がオランダ國王に封ぜられた。この眞相を全く祕して、養子仕、國王に相立申候と誤魔化したのである。やがて一八一三年ナポレオン一世がライプチツヒに慘敗するや、英國に亡命してゐたプリンス・ファン・オランヱはオランダに歸つて王位に卽いて、ウイルレム一世 Willem I と稱せらるゝや、文化十四年（一八一七年）七月四日の風說書には、

去る巳年申上候フランス國王弟ロウデウエイキ・ナポウリユスと申者、阿蘭陀國に養子仕、國王に相立置申候處、死去仕候に付、以前之國主プリンス・ファン・オランヱ血脈之者、阿蘭陀國主に相改、國政等三十ケ年以前に回復仕候。

一八四六年まで生存したルイを三十年も前に死んだことゝして、前の虛報と辻褄を合せようと苦肉の策を弄したものである。然し、このヘンドリック・ヅーフ時代の風說書を以て、全部の

『和蘭風說書』の信用を決定することは苛酷であるばかりでなく、事實と相反するのであつて、これあるがために『和蘭風說書』全體としての史料的價値は決して減ぜらるゝものではない。否かゝる虛報を餘儀なくせられた事が亦おもしろい史料とも觀られる。（一六――一七頁）

板澤武雄氏のこの言葉は『和蘭風說書』の資料的價値を敎へるものである。

ヅーフの『日本回想錄』には、ラッフルスの命令を落手した時の心境を書いて、

されど予は一八〇九年總督ダーンデルスが爪哇に在住せし時以來、全く消息に接せず、且つ予は和蘭人としてに非ざれば己を認むること能はず。英國人が爪哇を征服せしことは容易に信じ得れども、和蘭國が佛國に併合せられしことは到底信ずること能はず。是れ或はラッフルスの命令書に從つて、此の商館を現時英國の委員なるワルデナールに引渡さしむるため、予を動かす手段として、我等の敵人が宣傳せる虛言なるやも知るべからず。因て予はブロンホフ氏の立會にて、此の書面は敵國の配下にある植民地の官憲より來りしものなるが故に、予は其の命令に服從し難しと明言せり。

と述べて居る。（異國叢書『ヅーフ日本回想錄フイッセル參府紀行』。齋藤著『ヅーフと日本』。武藤著『日英交通史の研究』參照）

以上述べたところによつて、米英的世界秩序がこの頃既に形を整へて居たことが分かる。即ち日本人の眼にヨーロッパ人の代表的なるものとして映じて居つたオランダ人の如きは、既に凋落し去つて居たのである。次いで文化十四年、英國船がわが國に訪れ、文政元年（二四七八年）ゴールドンの乘艦が浦賀に入港した。次いで文政七年には英國捕鯨船が常陸の國の大津濱に渡來して居り、安政元年（二五一四年）にはスターリングが四隻の軍艦を率ゐて長崎に來り、エンペロール號を幕府に獻上したことが見えて居る。支那にイギリス勢力が樹立せられた阿片戰爭後の南京條約締結が二五〇二年のことであるが、英國のアジアに於ける地位は大體この時代を以て確立せられたものと推定することが出來るであらう。即ち香港は既に英國の東亞の基地となつたが、之より先、文政二年（二四七九年）には前記のラッフルスがジョホール王との間に條約を締結して居り、上海、寧波、福州、厦門、廣東の五港は英國の爲に解放せられて居たのであつた。續いて嘉永安政年間、アメリカの威嚇によつてわが國が開港を承諾するや、イギリスは直ちに之に便乘し、所謂不平等條約の締結をなし、次いで優勢な國力經濟力を以て對日貿易の主力となり、巧みに締盟各國使臣を制御して、英國を主流とする外交團を結成した。フランスが沒落せんとする

幕府を支援せるに對して、炯眼なるイギリスは新興の西南諸侯、卽ち薩長を支援し、明治維新後に於ても依然として有力なる位置を占め、わが國の鐵道建設に資金や技師を提供するなど、あはよくばトルコ、スペイン更には支那との如き關係をわが國との間に釀成せんことに努めたことは周知の如くである。（拙著『日本建設史論』參照）

明治年間に於て、日清戰爭勃發の前後まではイギリスはわが國に對し强壓的態度を持し、條約改正に對しても常に不同意の意向を持つて臨み、日清戰爭勃發に際しても、わが國に責任の存することを述べて一種の恐喝的外交をなして居る。然るに日清戰爭によつてわが國の實力が豫想外に大なることを知るや進んで條約改正を申し出で、更にロシヤの南下に備へしめんとして日英同盟の締結を策謀して居るのである。イギリスは素より日露の衝突を充分豫想してゐたのであり、その攻守同盟たる性質上、もしロシヤをフランスが助けた場合にはわが國を支援する義務を負うてゐるわけであるが、實は同じ頃、ヨーロッパに於て英佛の協商が進み、フランスをしてロシヤに加擔せしむることなく、從つて自己が日露の抗戰に絕對的に捲き込まれざる用意をなして居たことが明らかである。又この時成立した英佛の協商が、やがて第一次歐洲大戰の聯合國の基礎をなしたことはいふまでもない。

明治三十八年、更に第二回の日英同盟が締結せられたのは、日露停戰協定の直前であつた。當時世界第一の陸軍を誇つた帝政ロシヤが脆くも皇國の前に屈服した實情を觀取したイギリスは勢の趨くところ、自國の東亞に於ける權益が日本の興隆によつて脅されるにあらざるやを危惧し、この條約に於ては、先には朝鮮、滿洲並びに支那の現狀維持を志してゐるにも拘らず、更に印度を含めるに至つてゐることを我々は注意しなければならない。第三回の日英同盟は、明治四十四年に締結せられてゐる。この頃滿洲に於ける鐵道問題、並びにアメリカに於ける排日問題を巡つて、日米の關係は極めて緊迫してゐた。他方日米戰爭の危機が叫ばれるや、ヨーロッパに於ては、ドイツ皇帝ウイルヘルム二世の活動が漸く顯著となり、アフリカ問題、バルカン問題、トルコ問題が風雲漸く急なる有樣であり、ドイツに對する英佛露の戰爭の避くべからざる情勢が刻々に迫りつゝあつたのである。この機に臨み英國は、まづ第一にドイツのアジアに於ける膠州灣が、萬一の場合にドイツ艦艇活躍の基地となるべきを豫想し、改めて日本との關係を緊密ならしめて、非常の際に日本がドイツの跳梁を抑へる體制を作り、更に日米兩國の關係が惡化した際にも、英國は日米兩國間の爭鬪の中に捲き込まれざる用意をもなして居る。卽ち、第三回日英同盟協約第四條には、「總括的國際仲裁裁判條約を締結せる國が日本の相手國である場合には之を敵と

せざる」旨が記され、その線に沿つてアメリカとの折衝が續けられ、國際仲裁裁判條約と同樣の效果を有する條約が英米間に締結せられたのを見るのである。

英國の豫想せる如く、大正三年には第一次歐洲大戰が勃發し、八月、わが國は直ちに對獨開戰の決意をなし、十一月には早くもドイツのアジア基地青島攻略を完了し、青島政廳の開廳式を擧行して居る。しかもこのことに關して、日英同盟協約の當路者であつたグレー卿が、その回想錄の中に、日英同盟が歐洲大戰の勃發の當時頭痛の種であつたと述べて居る如く、英國はこの機會に、皇國が優勢になることを極力警戒し、わが國の參戰に對して反對の意向をもつてゐた。即ち、英國の日英同盟に期待するところは、東亞に於ける英國權益の擁護を日本をしてなさしめんとするにあつたことが明瞭である。第三回日英同盟協約は、兩國が特別に繼續を期待しないならば、十二年後に自然廢棄に歸するものであるが、この十二年後こそは實に大正十年であり、かのワシントン會議の年に他ならない。大正十年及び翌年にかけて續行せられたこのワシントン會議に於て締結せられた條約が、太平洋に關する四ヶ國條約、並びに支那に關する九ヶ國條約なることを見れば、日英同盟の本質と四ヶ國條約或は九ヶ國條約の本質と全く同樣のもの、即ちアジア太平洋圏に於ける現狀維持、既得權益の擁護以外の何物でもないことが明らかであらう。（拙著『東亞とイギリス』參照）

以上日英の關係を中心として、イギリスを中心とする世界秩序が時と共にアジアに滲透し來つた有樣を概略述べたのである。この間支那に於ては、南京條約に次いで天津條約、北京條約が結ばれ、更に西藏に關する條約が締結せられてゐる。それらの條約に基づいて、英國の政治經濟上よりする支那支配の體制は愈々强化せられ、馬來、北ボルネオ、オーストラリヤ、南阿聯邦に於ける勢力も愈々伸展し、遂に印度洋圏は英國の完全なる支配下に屬したのであつた。第一次歐洲大戰後は、舊ドイツ領ニューギニヤ並びに赤道以南の太平洋諸島をも領有して、愈々牢固たる地盤を南太平洋に樹立すると共に、アフリカに於ても舊ドイツ領を讓り受けて、多年の宿望であつたアフリカ縱斷の目的を達成したことは、我らの耳目に新たなるところである。

かくの如くにして、七つの海を制し、世界の陸地の四分の一と、世界人口の四分の一とを支配する所謂大英帝國が完成したのであつた。近時に至つては大英帝國ブロックの形成並びに軍備縮少會議の提唱によつて、新興勢力の彈壓を更に積極化したのである。

一方第一次歐洲大戰後に於ては、この英國の嘗ての植民地アメリカが、その厖大なる經濟力を通じて英國に對しても優位を贏ち得んとし、又他の歐洲諸國をも經濟力を以て支配せんとする態

勢が露骨に現はれたのである。近代歴史を經過的に見るならば、英國勢力が太平洋圏並びにアメリカの經營を主とした時代から、印度並びに印度洋圏にその主力を移した歴史を見るべきであり、構造の上からは、歐洲諸國が世界の各地に植民地を設定し、植民地の人と物との搾取の上に、近代ヨーロッパ文明を建設したと見るべきである。又諸國がこのやうにして贏ち得た植民地支配を、金融力を以て再統一し再編成しつつあつたのがアメリカ合衆國であつた。即ち近代の世界は、かゝる意味に於て米英を中心とする世界秩序であつたといふも過言ではなく、皇國を除く他の一切の國々は、擧げてこの秩序に屈服しつつあつたと見ることが出來る。

皇國の先達、興亞の先驅者達は、既に述べた如く明らかに皇國護持の爲にかくの如き舊勢力を防禦し、時期至れば打倒し去つて、眞に正しい世界の關係を樹立せんとしたものであり、尊皇攘夷の目指すところは、實にこのやうな舊勢力の打倒に他ならなかつた。從つて、大東亞戰爭こそ維新の志士の期待したところであり、更に遡つては、肇國以來の皇國の目標とするところも又こに存したといふべきであらう。（拙著『傳統に生きる』參照）

第三章　大東亞建設をめぐる世界の情勢

一、盟邦獨伊の現狀

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト釁端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノ

アリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ玆ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ相鬩クヲ悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增强シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衞ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障碍ヲ破碎スルノ外ナキナリ

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

世界の現狀を語るまへに、われわれは謹んでこの宣戰の大詔を奉唱したい。

米英兩國は、支那に於ける殘存政權を支援して東亞の禍亂を助長し、平和の美名に匿れて東洋制覇の非望を逞しうせるのみならず、與國を誘つて帝國の周邊に武備を增强し、わが國に對して挑戰して、帝國の平和的通商に凡ゆる妨害を加へ、遂に經濟斷交をなしたるに對し、皇國が止むに止まれずして蹶然起つたのが大東亞戰爭であることは、御詔勅を拜する者が均しく心に銘記するところであらう。又米英的世界支配體制を覆し、ヨーロッパに新たなる統一を招來しようとしつつあるものに盟邦ドイツの存在することは、昭和十五年九月二十七日の大詔に明瞭に御示しになつて居るのである。卽ち、「政府ニ命シテ帝國ト其ノ意圖ヲ同シクスル獨伊兩國トノ提攜協力ヲ議セシメ玆ニ三國間ニ於ケル條約ノ成立ヲ見タルハ朕ノ深ク懌フトコロナリ」と仰せられて居るやうに、獨伊兩國は帝國とその意圖を同じうするものであることを、改めて我ら國民は確認しなければならないのである。

第一次歐洲大戰の善後措置として國際聯盟が形成せられたが、國際聯盟の意圖するところは、新興日本の勢力を抑制し、ドイツの再起を不可能ならしめんとするに存したことは、獨伊兩國が聯盟を離脫して以後の國際聯盟が、有名無實と化した點から見ても極めて明らかである。捉へようとした魚が逃げ去つても、尙ほ投網の綱を握つて居ることが如何に興味のないものであるか

は、いさな取りの經驗を持つ子供時代を想起すれば、誰しもが感得し得るところであらう。

ドイツは第一次歐洲大戰に、武力戰に於ては決して聯合國に劣るものではなく、停戰協定の時すらドイツの陸兵は國外に於て戰鬪をなしつゝあつたのである。然もベルサイユ條約が成立するや武裝を解除され、天文學的數字を以て數へられる賠償金の重壓に呻吟し、國民生活は極端なる困窮の淵に投ぜられたのであつた。このどん底の生活がドイツ國民に要求せられてゐた時、ヒットラー總統は毒瓦斯に痛められた眼が或は失明に終るのではないかといふ憂慮を抱きながら、病院のベットに横たはつて居つたのである。ヒットラーの頭にこの時浮かび上つたものは、幼少の時代、尊敬した歴史の先生であつたレオポルド・ペッチ博士の面影であつた。ペッチ博士は、ゲルマン民族に對する力强い愛情を歴史教育によつて若きアドルフの心に根强く植ゑ付けたのであつた。ヒットラーの生まれたオーストリヤのハプスブルグ王朝が、ゲルマン民族に忠實でなく、却つてスラヴ族と提携して、ドイツ民族の統一を妨げたことに對するペッチ博士の民族的な憤りは、その得意の雄辯によつて若き日のアドルフの心に深く刻み込まれたのであつた。この民族的憤りが今正に沒落せんとするドイツを再興するの熱情にヒットラーを驅り立てゝ、病氣が全快するや、同志を糾合しつゝナチスの運動を展開したといはれて居る。『我が鬪爭』の雄篇は、ヒットラーのドイツ民族再建の爲の鬪爭を書いたものであつて、外國人たる私どもが之を繙いても尙ほ刺戟せられるところが少からずあるのである。

ナチスが昭和八年にドイツの政權を獲得し、やがて今日の隆盛なる第三帝國建設への一路を驀進するに就いて、新しい民族意識の昂揚に努めたことはいふまでもないが、新しい文化建設の權威としてドイツ人の據るべきものは、ドイツの民族精神に他ならなかつた。タキツスの『ゲルマニヤ』や、グリムの童話の中に湛へられて居る古代ゲルマンの精神を宣揚し、この精神に民族再建の絶對的權威を感じつゝ建設に邁進しつつあるのが現代ドイツであると見ることが出來る。有名なローゼンベルクが『廿世紀の神話』で、ゲルマン的な男性的な文化が興隆した時に世界の文化は健全であり、ユダヤ的な女性的文化が支配した時代は文化の腐敗墮落が招來されたと見て居るのも、かうした世界觀に立脚して居るものと考へられるのである。

統制經濟に於て、又國防學に於て、或は文化宣傳の樣式に於てきび〳〵したドイツの政策は、ドイツと同じやうに赤化の慘禍を體驗したわが國指導者層に異常なる共鳴を呼んだ。ドイツ的な方法を隨時參酌しつつ今日の日本の革新が斷行せられて居るのである。そこに米英尊重に代はる現代のドイツ文明の尊重、惹いてはヨーロッパ文化の尊重といふ傾向が見られ、依然たる西洋崇

拜が別の形に於て今尙ほ認められるのは、一部識者の間の顰蹙を買つて居るのである。翻つて考へるに、ナチスドイツの興隆がヨーロッパ的な文化傳統の再建に存するのか、或は又他に以て範とすべきものを求めつゝあるのか、この邊のいきさつを私どもは今一度反省する必要があると思ふ。無論根本は既に述べた如くゲルマン民族精神の昂揚に存するのであるが、このやうな民族精神の昂揚に着眼するに至つた抑々の動機は、ヒットラー並びにその幕僚の間に、アジア的な文化、更に的確には日本精神に對する絶大なる尊敬の念の存することを前提とするものである樣に考へられる節があるのである。

勞働奉仕（アルバイト・ダイーンスト）（Arbeit Dienst）或は歡喜力行（クラフト・ドルヒ・フロイデ）（Kraft durch Freude）等の運動は、最近ドイツの模倣として一部の者の間に考へられて居るけれども、皇國の歷史を顧みる時、勞働奉仕といふことは決して珍しいことではなく、村落の生活に於てその中心をなす神社の行事の中に常に見らるゝところのものであつた。川畑道喜文書に見られる築地の修理の一件の如きは、典型的且つ大規模な勤勞奉仕の事例であるが、これと類を同じうする小規模なものは、全國到る所に見ることが出來るのである。又歡喜力行のやり方として、白堊の萬噸級豪華船を用意して勞務者の慰安の旅を實施し、ラインの周遊を通じて、ラインの護りが國防の上に如何に重大であるかを勞務者層に感ぜしめ、或は北歐の景勝の探勝を目的とするかの如くノールウエーに觀光旅行をなさしめ、且つナルヴィクに上陸せしめて、來るべき北歐作戰に備へたヒットラーの明敏なる施策を謳歌する者もある。その深遠なる計畫に對しては私も心から敬意を拂ふものであるが、このやうな考への財政建直しを、嘘をつかぬ主義を以て爲し遂げ得たかの恩田木工（おんだもくこう）の事績の中にも、歡喜力行に於て目指すものと相通ずるところの存することを見逃すことは出來ない。即ち木工は、藩に於ける報本反始、祖先崇拜の觀念の薄いことを憂へて、之が復興を圖る爲に、經濟統制を嚴にし勤儉困苦缺乏に堪へる當時の生活の中にも祖先を祭る日のみは御馳走を許すことを公布した。弱き人間の心が、御馳走食べたさに祖先の祭りを行つて、久しく顧みられなかつた佛具にはたきが掛けられ、佛壇も清掃せられた。手段としてのお祭りが續けられる內に手段と目的とが所を換へ、御馳走を食べることは第二段となつて、目的とするところの祖先崇拜の氣運が澎湃として松代の藩に起つたといふ物語が傳へられて居る。歡喜力行の着想はかうした木工の施策と別個のものではないのである。

既に述べた如く、わが明治維新が皇國の傳統に復歸する皇政復古を樞軸として展開したこと

が、ドイツ民族の復興を民族精神への復歸によつて達成しようとするヒットラーの構想に敎訓を垂れなかつたと斷言することは決して出來ないのである。このやうに、形の上から眺めてもナチスの施策には私ども國史を學ぶ者には皇國史の實例より學んだと考へしめるものが多々存するのである。之は單なる想像ではなくして、ヒットラーの周邊を眺めるならば、ドイツの施策が皇國の史實の中から汲み取られて居るのも決して偶然ならざることを窺ひ知ることが出來るのである。

ライプチッヒに於て地政學協會を設立し、幾多の智能を結集してヒットラーに大なる獻言をなしつゝある、ヒットラー幕下の頭腦中の頭腦と目されて居るハウスホーファー(L. Haushofer)の存することは、我らの看過し能はざるところである。ハウスホーファーは『太平洋地政學』の著を以て著聞する人で、彼がチェレーンに始る地政治學のお株を奪つたかの如くに地政學の泰斗と目され、その指導下に、或る意味に於てはドイツの學問が總べて地政學的な色彩を持つ程の影響力を持つに至つた動機が、彼の日本研究に存することを思はなければならない。日露戰爭によつて强大な陸軍を擁するロシヤが皇國の爲に一敗地に塗れたのであるが、この世界の謂はば不可解な事實に當面して、ドイツ國家は皇軍が何故このやうに强いかを探究する爲に、青年將校をわが國に特派したのである。この特派せられた青年將校こそ若き日のハウスホーファーに他ならなかつた。彼は京都の十六師團の武官として具さに皇軍の强き理由を探究しつゝ、その根本がわが國の歷史と風土に影響せられること非常に大なるものある點に着眼し、歸國の後、『大日本』『大日本の國防力、世界的地位、及び將來に關する考察』を上梓して居るのである。その後も彼は屢々日本に關する論考を發表し、その主要なるものが編纂せられて、ハウスホーファー著『日本』として最近刊行せられたのである。同書にハウスホーファーの主張として述べられて居るものを列擧すれば、

一、日本の地理學的基礎
二、大日本
三、大日本の國防力、世界的地位、及び將來に關する考察
四、日本の政黨
五、日本の地理學的解明に關するドイツの功績
六、日本國家の發展の地理學的基本方向
七、日本帝國とその地理的發展
八、南東アジアの自決への再起

九、日本及び日本精神……地理及び民族學的研究
十、世界的强國及び帝國としての日本の成長過程
十一、太平洋の地政學
十二、日本の國家革新
十三、舊日本

等である。ハウスホーファーの日本研究の一端に就いては別の機會に述べたことがある（拙著『傳統に生きる』）から詳說を省略するが、このことは如何にドイツが日本の國家並びに日本の歷史の研究をドイツ民族の再建の爲に活用しつゝあるかを端的に物語るものといはなければならない。

次に、ドイツの戰力增强の根基をなすところの食糧增產の衝に當つて、偉大なる功績を收めた農村食糧大臣ベルノ・ダレーが、わが國の學者の訪問を受けた時に、

「ヨーロッパ人の多くは、驚くべき發展を遂げた近代日本にすつかり感心して居る。しかしその日本の創造力がどこから湧いてきたかといふ根本的な態度に就いては甚だ無關心だ。自分は日本の太古から現代に至るまでの歷史を親しく研究し、日本民族の本當の力の泉が、惟神の道であるといふことを突き止め得た。實際、ドイツの農民層に根差して居る民族的世界觀は、日本の神道と著しい類似性がある。日本と同じ樣にドイツの農民は祖先崇拜を實踐し、又鄕土そのものと深く結び付いて居る。この點に於てドイツは尙ほ日本から學ばなければならない。」

と述べたとのことであり、大臣の應接室には、ドイツ各地方の工藝品を多く蒐集して居たと傳へられて居る。ドイツの農村に劃期的な世襲農地法を制定したダレー博士が、日本の研究家であることは之また見逃がすべからざることといはなければならぬ。

ダレーの著書は、岡田宗司氏に譯述せられ、『民族と土』と題されて居るが、ダレーは一九三〇年にドイツ國民社會主義勞働黨に入黨し、ヒットラーは直ちに彼に、ドイツ農民を第三帝國建設の爲の根幹たらしむべく組織するの大任を委ね、ダレーはこの任務を遂行する爲に、農業政策機關を創設して居る。一九三三年昭和八年春にナチスが政權を獲得するやダレーは四月四日、ドイツ農民階級全國指導者團の長に任命せられ、次いで同月十九日、ドイツ農民協同組合聯合會長に選任せられ、五月十二日にはドイツ農會會長、六月二十九日にドイツ國及びプロイセン食糧大臣、翌年一月、ドイツ國農民指導者に任命せられたことを以てしても、ヒットラーがダレーを信ずること極めて厚く、ドイツ再建にダレーの意見が重きをなして居ることが知られるのである

が、この人材が日本の傳統文化に對して異常なる尊敬の念を拂つて居ることを、私どもは留意しなければならない。

御詔勅に於て、「帝國ト其ノ意圖ヲ同シクスル獨伊」と仰せられたのは、このやうなドイツの實情に對して述べさせ給うたのであつて、利害打算に基づいて獨伊との提携が行はれたものでは斷じてないことを私どもは改めて想起しなければならない。世上動もすれば、ドイツの施策を以て赤化主義であるとなし、ドイツに引きずられて日本が何事かをなしつつあるかの如き惡意ある想像と宣傳とをなすものがあるが、ドイツの精神的又思想的指導が却つて皇國に存すること、並びに皇國の施策が逆にドイツの向背を左右するものであることを、國民たるものは充分に知つておかなければならない。

既に述べた如くドイツは、日本の國體に鑑み、民族精神に復歸することによつて國民自らがゲルマンの傳統を體認し、この精神に基づいてヨーロッパに新しい統一を齎さんとするのである限り、ヒットラーはニーチエの後繼者を以て自ら任じて居ると見られる節が多々あるのである。例へば、ムッソリーニに對してニーチエの全集を贈つたと傳へらるゝが如きはその例證である。ニーチエは、周知の如く、キリスト教化した近代ヨーロッパ文明に愛想をつかし、健全な太陽信仰の復活を憧れて「ツアラトウストラ」を著したが、更に晩年に於ては、限りなき日本への憧憬の念を抱いたものの如く、その日記に、彼の憧れが記されて居ると聞いて居るのである。

それは兎も角、ヒットラーのそのやうな新しい精神によるヨーロッパ統一を妨げつゝあるものが卽ち米英である。由來イギリスはヨーロッパの國家ではないのである。このことに關しては、鈴木成高氏がその著『歴史的國家の理念』の中に於て

「しかも我々にとつて見逃がしてはならないこは、この世界の四分の一を占める厖大なるイギリス領土の中に於て、ヨーロッパの中に存在するものとしては、本國のブリテン島を除いては僅かにヂブラルタルの巖山と地中海に於けるマルタ島があるだけにすぎないといふ事實である。これがヨーロッパに於けるイギリスの領土の全部である。卽ち、單に歐洲丈に就いて見るならばイギリスは決して大國でも强國でもなく、むしろ小國であるとさへ云ひ得るであらう。實際過去の歴史を振り返つて見ても、イギリスは、歐洲に於ては恰も小國の中の鬪士でもあるかの如く、と結ぶことにあつた。卽ちイギリスは、歐洲に於ては恰も小國の中の鬪士でもあるかの如く、大國の制覇運動が起される度毎に、常に數國の小國家群を率ゐてそれに對する小國の自由を擁護せんとする運動を長く執拗に反復してきたのであつた。イギリスは歐洲に於ては小國で

ある。イギリスが強國であり大國であるのは正に歐洲外の世界に於てであつたのである。」と述べて居る通り、近くはウイルヘルム二世のヨーロッパ統一を、更に遡つてはナポレオンの歐洲統一を阻害した主力は常にイギリスであつたのである。イギリスは、カナダ、オーストラリヤ、南阿聯邦等の所謂自治領と、印度及び王冠植民地を擁して國家を成して居るのである。從つてヨーロッパは、勿論それが英本土に近接する點に於て甚だ重要ではあるが、然も尙ほイギリスの存亡は必ずしもヨーロッパの存亡の中に限定せられないのであつて、この點はイギリス人を考へるものが常に考慮しなければならないと同時に、ヨーロッパに於ては古來未だ嘗て統一の存したことのないといふ事實に注目すべきである。小國分立して、民族と言語を異にする悲慘な數千年のヨーロッパの歴史を、皇國の輝しい歴史的展開に刺戟されて統一せんとするヒットラーの意慾こそ、帝國とその意圖を同じくする獨伊といふに値ひするものである。

聞くところによれば、ドイツ人は皇國の强さに就いて、皇國民が凡ゆるものを國家に捧げ、戰時に備へて居るものと信じてゐるため、そのやうな觀點に基づいて皇國の實情を調査した一ドイツ人が、歐洲へ留學に行つた或る醫師に對して、「日本は多くの看板を掲げて居るが、之は他日戰爭に際しての鐵資材を用意するものである。恐らく日本ぐらゐ、各家庭が金屬を多く保有して居る國はないであらう。然るに、唯一つ日本に拔かりがあるやうに自分は思ふ。それは、上野の公園のベンチである。あれが今數センチ短かつたならば、軍用トラックの上に載せて兵士のシートになし得るであらうに。」といつた。むしろ日本人の全く意圖せざることまでも彼等は想像を逞しうしてゐるのであつた。之に對してその醫師は、「皇軍はトラックで輸送される時に、ベンチ等には掛けないのだ。」と答へたところが、「それで初めてこの疑問が解けた。」といつたさうである。之らも、現代のドイツ國民が日本に對する羨望の心の一つの現はれと見て差支へないではあるまいか。

ドイツは、自國民の統一の爲に、ゲルマン民族の血とゲルマン民族の文化との存する地域を所謂生活空間と考へ、經濟的に見る時には之が廣域經濟圏であるとなして居る。この生活空間を占める新たなる國家が、ドイツの第三帝國圏であるとして居るやうである。この新しい國家、即ちライヒ（Reich）の中に近世的な國家即ちシュタート（Staat）が否定せられつつあるのである。このやうな新しい國家觀念も亦、八紘爲宇の精神に負ふところなしといひ得ないであらう。大東亞共榮圏の建設といふことは、皇國を主體とする新しい「國生み」であつて、この意味からも皇國とドイツとがその意圖を同じうして居ることが分るのである。

久しくドイツに駐劄してナチスの諸々の政策を考察して歸朝した人が、歸任第一歩を東京に印して抱いた感想は先づ日本に物が多いことであつた。しかも近寄つてよく見ると、例へば纖維製品の如き使用に堪へざるものの多きことであつた。ドイツの代用品は立派に代用品たるの役目を果し、然も纖維製品の如きは、羊毛製品よりも丈夫である場合が多いのであつて、この點、日本の行き方に一抹の疑念を抱かせられたさうである。

第一次歐洲大戰に於て徹底的などん底生活を體驗したドイツは今回の戰爭に當つてもいち早く統制經濟の實施に着手したのである。彼等の統制の仕方は、最低生活の確保をなし、その限度内に於ては國民は極めて明朗なる氣持を抱き得る如くに配慮されて居るのである。卽ち、衣料切符といひ、食料切符といひ切符の配給あるところ必ず物資が確保されてゐる。代用品は前記の如くに立派に代用の價値を有し、代用品とは僞造品であるといふが如き觀念を決して抱かしめないとのことである。又物價經濟の實情を見ても、擔當する官吏の過半數は地味な原價計算に從事し、他の者は經濟犯罪に關する書類の處理に從事し、法令の作成を以て統制成れりとするのではなく、指令がどの程度に實行せられて居るかを點檢し指導するところに重要任務が置かれて居るといふ極めて實質的な行政を行つてゐる。數字は發表せられて居らないけれども、國民の貯蓄並びに納稅は極點にまで達し、常に敗れて悔なき總動員の姿を呈して居る由である。このやうな背水の陣こそ不敗の體制を意味するものであり、このことを聞くにつけても、山本元帥が好んで用ひられた「常在戰場」の心構へ、卽ちわが武士道精神の眞髓を想起するのである。

明治維新に於て日本は、皇國の傳統に生きるべく努めた。然るに米英の思想侵略はわが國の傳統を再び遮斷して、武士の生活を恰も陋習であるかの如く思惟する風潮を馴致して今日に至つて居るのであつて、現在武士道精神は却つてドイツにみられ、わが國に於ては尙ほ徹底した武士道精神の昂揚が認められない點は誠に遺憾に思ふ。

ムッソリーニ治下のイタリーも、近代米英的な思想を拂拭してイタリーの傳統的精神に生きようとしたものであることは、フアッシストの綱領並びにフアッシストの思想の中に明らかに示されて居るといつて差支へないであらう。さうした點に於て、獨伊の提携更に日獨伊三國同盟の成立が出來たことを思はなければならない。恐らく初期に於てはイタリーはさほど日本に對する關心を抱いたものとは考へられないけれども、わが國と接觸を重ねるにつれて、皇國の偉大さが首相ムッソリーニには次第に理解せられたものと見るべく、フアッシスト黨内部に於ける日本研究の熱意は非常に隆盛に赴いたものと聞いて居るのである。然るに最近突如としてムッソリーニの

挂冠が世界を震撼せしめたので、現象的な國際情勢の推移しか眼につかない人達の間に於ては、イタリーに對する嘲笑罵倒の言を弄するものすら出現し、ヨーロッパ情勢が甚だしく獨伊に不利であるかのやうな感想をもつものもないではない。然しながら三國同盟が、既に述べた如く精神的統一の上に立つて居ることを確信するものにとつては、今回のイタリーの政變の如きは、大局的にむしろ嘉すべきことであるとさへも考へられるのである。

まづ第一に想起されることは、イタリーの參戰に際しヒットラーが、むしろイタリーの中立を希望してゐる旨が傳へられたことである。第一次歐洲大戰のときイタリーに駐劄したわが國の某將軍は觀戰武官として戰線に於けるイタリー兵の活動狀況を見たが、皇軍を常に見て居る將軍の眼には彼等の戰鬪力が餘りにも劣つたものに映つたので、その後のファッシストの活動によつても、果して數百年間國家を持たなかつたイタリー國民が本當に實力を備ふるに至つたか否かは疑問であるといはれたのを聞いたことがある。米英の評論家の定評として、ドイツ國家は恰も駿馬に凡庸の騎士が乘り、イタリー國家は駑馬に非凡の騎士が乘つた如きものであるといはれてゐる。今回のチュニス、チュニジヤ作戰につぐシチリヤ並びに南イタリーに於ける彼等の神經戰は、正に彼等が駑馬に譬へたところのイタリー人民に對するものであり、「將を射んとするものは馬を射よ」の戰術によつて、この神經戰が次第に効を奏しつつあつたのである。自分の御する馬が如何なるものであり、如何なる心境になりつつあるかを最もよく知る者は、この馬を御する首相、非凡なる政治家ムッソリーニである。ムッソリーニはこの實情をヒットラー總統に訴へて、兩者の間に、新事態に對處すべき方途が講ぜられたことは新聞の報ずる如くである。この會談に於て如何なることが論議せられたかは今日知る術もないのであるが、先のヒットラーのイタリー參戰に關する感想に徵しても、ヒットラーがイタリーの參戰を必ずしも好ましきものであるとは思つて居なかつたことが想像されるのである。從つて、イタリーに兵力を割いて之を援助する意圖のなかつたことは容易に推定し得るところである。更に注目しなければならないことは、イタリーの首都ローマには、キリスト教世界の中心をなすヴアチカン宮殿があり、こゝには法王が世界のカトリック教徒に向かつて指令を發して居る事實である。しかも法王は米英に對して好意を持つものとして知られて居るのである。ニーチエの後繼者を以て任ずるヒットラーにとつては、假にイタリーがファッシストの政權に屬するとしても、戰線統一の上に甚だ危惧の念を抱かざるを得なかつたことはいふまでもないのである。

米英兩國は、ファッシスト並びにその領袖たるムッソリーニに對する戰爭は挑むけれども、ヴ

アチカン並びにカトリックに對して戰を挑むものでないことを屢次宣傳してきたのであるから米英に取つてはイタリーに對する思想攻略の素地は既に出來てゐたといへる。そこへローマの集中爆擊やシチリヤ上陸をやつてイタリー國民が心理的に動搖を來たしたところを狙つて、うまくバドリオ政權を籠絡して三國條約蹂躙、單獨媾和の擧に出でしめたのである。しかし、バドリオ政權の裏切行爲がどれだけドイツの立場を脅威するかといふことに就いては問題にならないのであつて、ドイツが豫め力を注いだ歐洲要塞の堅牢さは、一バドリオ政權の裏切によつて微動だにするものではない。更に東亞の情勢等は、獨伊兩領袖の間には常に情報が傳へられて居るから、ファッシストの退陣による外面的な獨伊樞軸の不利な形勢は、樞軸諸國に單獨媾和が無條件降伏以外に成立せざる大勢を知らしめることゝなり、こゝに樞軸對反樞軸の體制は絶對に妥協を許さざるものになつたと見ることが出來、樞軸陣營の團結をいよいよ固くせしめたのである。

既に述べた如く皇國は米英に對して宣戰を布告したのであり、敵イギリスの心臟が他ならぬ印度並びに印度洋圏であるとしたならば、樞軸諸國がこの心臟に對する止めを刺さざる限りは、大東亞戰爭の目的は完遂し得たとはいひ得ないのである。この目的に向かつて更に一歩前進することが、ムッソリーニ挂冠の次に來たるべきものであるとするならば、ムッソリーニの挂冠はヨーロッパに於ては思想戰の統一を齎し、大東亞戰爭の將來に對しては、その戰局を本來の線に沿うて一段と躍進せしめたものと考へて差支へないのである。

さあれ、幽閉のムッソリーニが救ひ出された經緯はまさに二十世紀の奇蹟である。そこにわれわれはヒトラー總統の、血盟の同志に對する厚き友情をみるのであるが、同時にこの固き精神的結合の裡に、再起のムッソリーニがその偉大なる才能と熱烈なる世界新秩序への信念とによつて、有力なる日獨への協力者として再出發する日の遠からざることを信ずるのである。

二、米英の思想的新攻勢

このやうなイタリーの戰局を語るにあたつて是非紹介しなければならない點は、世界の思想戰に關するその道の一專門家の意見である。氏は歐米諸國のキリスト敎に就いて精通せるのみならず、ユダヤ問題及びカトリック敎問題に關する實踐的な體驗を有し、それ故に又現下のわが國の思想界が、防備なき狀況に取り殘されて居ることに深甚の憂慮を抱いて居るのであつて、本年初頭以來、世界に於けるカトリック敎徒の活潑なる動き、及び之に呼應するユダヤ人の活動に關し

て、概略次に記すやうなことを述べて居るのである。

米國大統領ルーズヴェルトがユダヤ人の血を幾分享けて居ることは明らかであるが、彼の副大統領としてユダヤ人勢力のルーズヴェルト政權への連絡をなしつゝあるヘンリー・ウォーレスが、世界に向かつて「世界新秩序のキリスト教的基礎」なる演說をなして以來、カトリック勢力の暗躍の著しいことが注意せられるのであるが、ニューヨークの大司祭たるスペルマンは、ラテンアメリカ即ち嘗てスペインの勢力圈であり、その意味に於てカトリックの勢力圈でもある南アメリカに赴き、この地に對して何事か畫策するところがあつたが、やがてローマのヴアチカン宮殿に至り、この地を根據として或はスペインに、或はイースタンブールに現はれて、カトリック教徒並びにギリシャ正教會關係者の慰問をなしたのであつた。名は慰問であるが、實は政治的な折衝をしたと覺しく、スペルマンのスペイン渡來後、スペイン國内に於て反樞軸的な動きが著しくなり、フランコ政權の地盤をなすファランヘ黨の勢力は衰へ初め、又イースタンブールより彼が歸來するや、反宗教を信條とするソヴイエット政府は、世界に向かつて第三インターナショナルの解消を宣言し、更に國内に於けるギリシャ正教會の修理を默認するといふ大轉換をなしたのである。無宗教よりカトリックとの妥協へ。ソ聯は大いなる變革をなしたといはなければならぬといふのである。ギリシャ正教會は農民を教徒とする東部ヨーロッパ並びにロシヤの教會であつて、スターリンはこの教會の復舊によりカトリックと妥協してゐるのか、或は反カトリック勢力の育成强化をなしつゝあるのかは研究を要するが、何れにしても宗教問題に大なる變化を齎したことは事實である。ヴアチカンとムッソリーニとがこのスペルマンを滯在せしめたといふ事實が、今回の政變に何らの關係がないとは斷ずることが出來ないであらう。ムッソリーニが挂冠した後に、反樞軸軍がイタリーに基地を求めるとすれば、ドイツの熾烈なる攻擊を蒙るであらうから、當分の間その設置を避くべきことを兩者の間で約して居るかも知れない。要するに米英とのつながりの存するヴアチカン宮殿が、治外法權的な形に於てローマに存在することは、樞軸陣營の中に米英の勢力が何らの妨害なく滲透し得ることになるのであつて、その反樞軸陣營の思想的基盤が、ヘンリー・ウォーレスのいふ如くキリスト教的世界新秩序の建設を目途するものであるとするならば、愈ゝ以て先に述べたムッソリーニの挂冠は、樞軸陣營の異分子の剔抉としての意味を考へざるを得ないのである。

聞くところによれば、ヘンリー・ウォーレスはアメリカの獨立を新たなるアメリカの國璽によつて解說して居り、その國璽の圖案にはエホバの新しき力を象徵する鷲が描かれ、その胸には十

三本の筋を刻んだ楯があり、一方の足には十三州の平定を象徴する十三本の征矢が握られ、他の足には勝利の象徴たる十三本の枝を持つ橄欖が握られて居るさうである。即ちアメリカの國を營む根本精神が、エホバの神の指導下に世界を形成し、しかもそれは常に勝利を約束せられて居ることを示したものといはれるのである。裏側の封印の上に押される國璽には、未完成のピラミッドの繪が描かれ、ピラミッドの頂上の部分には世界唯一の眼、即ちエホバを象徴する眼が描かれ、ピラミッドの土臺をなす部分は十三段に仕切られて居る。之はいふまでもなく十三州を象徴するのであつて、既に十三州の經營に於けるキリスト教的秩序が完成した事を意味するのであり、その未完成は、エホバのみそなはすものに尙ほ缺けたる部分があることを示し、之を建設せんとするのがアメリカの使命であることを圖に於て示して居るのである。

最近報ぜられる如く、南太平洋方面に於けるアメリカの反攻は侮るべからざるものがあり、ルーズヴェルトの宣傳に基づく「眞珠灣を忘れるな」(Remember Pearl Harbour)の標語が存外アメリカ知識階級の關心と敵愾心を促進し、日本は不意討をした卑怯な野蠻國であるとの觀念を抱く者が少くないとのことである。しかしアメリカの思想にしてもしヘンリー・ウォーレスの說くが如きものであるならば、明らかに彼等はキリスト教的世界の建設といふ目標の下に戰を續けて居ると見なければならない。こゝに執拗なる反攻の精神的基礎を見出だすことすら出來るのである。ルーズヴェルト、チャーチルを中心とした所謂米英會談の結果、大西洋憲章なるものが世界に流布せられ、その後も各方面の有力者によつて戰後の日本膺懲案なるものが喧傳せられて居る。無論敗戰を糊塗せんが爲に如何にも反樞軸軍が勝利の中にこの戰爭を閉ぢ、勝利者として樞軸側を膺懲する態勢が出來たかの如き宣傳に過ぎないとしても、この宣傳の中に、彼等の思想が窺はれない譯ではない。即ち日本膺懲の方法として彼は先づ第一に、軍備の撤廢をあげ、更に武裝解除、軍人の膺懲、××××××等を述べて居るのである。

前駐日米大使グルーは、日本滯在中の觀察と經驗に基づいて、日本に關する二つの著述をなして、アメリカ國民の奮起を促すと共に、日本の侮るべからざることを述べて居る。即ち、「眞珠灣一週年記念」及び「日本からの報告」に於て「日本の軍隊は武器劣る時は、精神力と訓練とで之を克服する。之に反して優秀な武器を有しながら負ける軍隊も往々にしてある。」とて、日本の精神力の優れて居ることを述べ、「日本人の多數は、文化とは困難な生活に堪へることであり、勤勞や戰爭を厭はないスパルタ的能力であると考へ、東洋文化を以て歐米奢侈享樂文化の對稱的存在なりと考へてゐる。日本人は英米人の身邊に充滿してゐる物質的偸安を輕蔑し、我らの浪費性に

比するに、自らの節儉性を以てし、我らの黨派根性に比するに、國家的團結と國家崇拜の念を以てしてゐる。更に日本人は我ら米國民の精神は安易なる生活への冀求、個人的慾望、淺墓なる黨派根性に滿ち、然も傲慢且つ虚榮心強く氣魄無く、肉體的にも柔弱なる國民と考へて居る。」と指摘し、「日本の國家的團結は、國民が　天皇の神聖を信じ、擧國一致、その政府を支持し、數年來個人的にまた團體的に、戰爭に備へてきたもので、日本人には不平分子は一人もゐない。」とすら述べて居るのである。即ち皇軍の最も強い理由は　天皇の神聖を信じ　天皇に歸一し奉るところにあることを確信して居る。然も彼グルーは別の機會に於て、「日本を倒すには彼らの××××××××××ところのものにひびを入れなければならない」といふ意味のことを述べてゐるのである。即ち戰後の日本膺懲案と相通ずるが如く、彼らは何れもわが國民的信念に對する思想戰を重要視して居るのである。このことは、ヘンリー・ウォーレスの言、或はスペルマンの暗躍と考へ合はせる時に、アメリカの意圖するところと日本を中心とする樞軸諸國の期待するところとが、思想的にも全く相背馳したものであることを物語つて居るのである。

戰爭の初期、アメリカの思想體制は必ずしも整備したものとは言ひ得ず、先に述べた如くに、「眞珠灣を忘れるな」等といふことに依り僅かに敵愾心の昂揚に努めるのみであつたが、その後大掛りな宣傳機構の整備をなし遂げ、今ではラジオを通じて世界的に働き掛けて居るのである。即ち一切の宣傳に關することは之を戰時情報局（Office of War Information——O・W・I）を中心にして行ふこととし、昨年七月から宣傳關係諸機關を統一して、一般情報集散、檢閲、軍事諜報の三大機關に分かち、一般情報集散の機關は右に述べた戰時情報局となり、社會評論家として又作家として周ねく知られたエルマー・デイビスを長官に据えてゐる。檢閲は、自由主義のアメリカに珍しい空前の峻嚴さを加へ、米國で最も多量にニュースを取扱つてゐるA・P通信社の編輯長バイコン・ブライスがその長官に任命せられ、軍事諜報機關は作戰諜報局（Office of Strategic Services ——O・S・S）として、軍事關係の外國情報の蒐集と、對外特殊情報作戰を主要使命としてゐる。その長官としてはワシントン切つての情報通といはれたウイリアム・ドノーバンが任命せられ、陸海軍に直屬して活潑な活動を行つてゐるのである。その後四ヶ月を經た十一月には、ルーズヴエルトはデイビス及びドノーバンを督勵して更に對外宣傳機構の充實に力を入れ、先の統合に洩れた情報關係諸機關の機能、就中對外無電發信機能を戰時情報局中心に再統合して、民間短波無電局十四ヶ所を接收し、同時に二十二ヶ所の短波無電局を新設し、緻密なラジオ網を以て全世界を籠絡しようといふ計畫を立てたのである。單なるデマ放送ではなくして、わが

國民の信念を撼がし、或は軍官民の離間に棹さすが如き放送を行つて居るのである。戰時情報局は官民情報通を集め、A・P通信社ロンドン局長キャロルを戰時情報局ロンドン支局長に任命したり、ウィルキーのソ聯訪問に際しては多年ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙モスコー通信員であつたバーンゾーをわざ〳〵本局から引抜いて隨行させたり、太平洋問題調査會で支那通として知られたオーエン・ラチモーアを在米支那人の巢である桑港にやつて、大東亞向け宣傳に干與させるなどの方策をやつて居るのである。元來アメリカ人は實利主義の國民であるから、戰さに敗れれば、自分達の物質的に惠まれた生活が永遠に失はれるであらうといふ考から進んで戰時生活の切り換へを行ふ點では非常な積極性があるといはなければならない。日常生活の戰時化を通じて、アメリカ人の參戰の氣運を興隆したと傳へられるのもあながち宣傳とのみは受取れないものがある。

このやうな實情に思ひを致す時、大東亞戰爭の思想的な目標が奈邊に存するかが明らかになるであらう。極めて單純ないひ方をするならば、キリスト敎的世界新秩序の建設と皇道に基づく世界新秩序建設との長期に亙る戰さであるとも見られるのである。從つて、すめらみいくさを遂行するところの皇國民として、敵側の原理に共感するが如き者があるとするならば、すめらみいくさを攪亂する徒輩なりと斷ぜざるを得ないのである。

ソヴイエット聯邦は、共產主義國家と稱せられて居るけれども、一國社會主義の困難は如實に示されて居るのであつて、嘗ての貴族專制の代りに共產主義者專制の國家に次第に推移しつゝあることは、多くの論者のいふところである。併しながら、嘗ての貴族が農民の收奪にのみ心を奪はれ、自己の逸樂榮進を事としたのに對して、共產貴族は少くともそのやうな點に於ては全く異なつた國家觀を持して居るから、現下の困難なる對獨戰爭にもよく堪へて居るものと見ねばならぬ。獨ソ戰爭勃發當時、任地モスコーにあつたわが某將軍は、當時開戰の報を聞いたロシヤの青年男女が、又革命當初の悲慘な生活に陷るのではないかと悲嘆に暮れ、涙を流しつゝあつたが、戰鬪開始と共に、必ずしもドイツの蹂躙に任せるにあらざる自己の實力を知るに及んで、次第に抗戰意識を持つに至つたやうに觀察して居られる。しかしソ聯も戰力の基礎をなす食糧問題に關しては非常なる困窮を來してをり、恐らく獨ソの和平を望むこと切なるものがあると考へられる。アメリカのあるソ聯通は、その近著の中に於て「ソ聯の軍隊が恐るべき裝備を持つことを世界が驚嘆する時期が到來するに相違ない。その理由の第一は國民運動の中堅をなすものが、革命の最中に訓練せられた當時の青少年であること、第二は無比の同盟軍であるところの冬を持つ

ことである。」と述べたさうであるが、獨ソの戰はこの豫言の必ずしも僞りに非ざることを示して居る。彼は更に、ソ聯の工場が蛙の如く移動可能性のものであることを述べて居るが、これまた今次の戰にその事實なることが示されて居る。現在ソ聯の軍事工業の基地はウラル以東にあつて、優良なる磁鐵鑛と製鐵炭、卽ち粘結炭とが近接して採掘されるところのマグートゴルスクの如きはその中心地である。更に大遊擊隊がヴォルガの上流に數十箇師團待機して居るとも同書に述べられて居るのであるが、之らが冬季反攻作戰に有力な働きをしたものと豫想されるのである。

又最近前極東軍司令官の戰死が傳へられて居り、種々の點から日ソ關係の好轉が窺はれることは、ソ滿國境線のソ聯軍隊を大量的に歐洲戰線に移動せしめたからではあるまいか。又わが國が之に相呼應するかの如くアリューシャン陣地を撤去したことも、その間の實情を思はしむるところがあるかも知れない。

八月下旬に至つてケベック會談が行はれ、第二戰線問題等が論ぜられるに際して、スターリンは遂に會談に參加せざるのみか、駐米大使リトビノフ並びに駐英大使マイスキーを召還するなど、反樞軸軍に對する不信の意を表明しつゝあることも、ソ聯今後の動向を示唆するものの如く見える。冬季作戰に於て反抗し得る經驗を持つて居るソ聯が、最近我武者羅な戰線回復に狂奔しつゝあることは、相互に千數百萬の大軍を合はせて死鬪を續けつつある獨ソ兩國の間に、何らか新しき狀態が芽ぐみつゝあることを思はせないでもない。想像が許されるならば、挂冠したムッソリーニが、スペルマンによつて反樞軸側に傾きかけたスペインや、イースタンプール、更に黑海の歸趨を左右するトルコ等に奔走して、之らの地帶を再び樞軸の一翼たらしめる活躍をなすものと見ることも考へられないではない。ソ聯が、反樞軸軍が大西洋岸に大擧上陸をして第二戰線を結成して、ドイツの戰力を破壞することを期待してゐるのに對し、米英兩國はかくの如き危險を敢へてせざるのみか、バルカン並びに黑海方面に第二戰線を結成する氣配を示し、この方面に年來進出の野心を抱くソ聯に却つて不快の念を抱かしめつつあるといふ解釋も一部で行はれて居る。かくの如き解釋はあくまでソ聯が米英陣營であることを前提とするものであつて、その前提自體に今一應の檢討を要するのではあるまいか。調停者なき獨ソの間にあつて、皇國が之に對する正當なる調停をなし得るとするならば、歐洲の統一又日本の力に依つて光明を見出だすものといふべく、アジアに於ける偉大なる「國生み」が更にヨーロッパの天地に於ける「國生み」にまで發展することが出來るであらう。その意味に於てヨーロッパの問題は、獨伊對ソ聯、或は獨伊對米

英の力の關係によつて決せらるるのではなく、わが國の決意と力によつて決定すると考へるべきである。私は現下の世界は正に皇國の一擧手一投足によつて決せらるゝものとの確信を持つものである。ヨーロッパの統一なり大東亞共榮圏の建設が着々と進む時、亞歐の通路はペルシヤ灣よりトルコを經由し、黑海に注ぐ數多の河を通じてヨーロッパに及ぶものといふべく、トルコ問題の將來は世界の戰局に對して大なる意義を持つものといはなければならない。

イラク並びにシリヤは目下英國にとつて重要なる石油資源地であり、ハイファー、バクダッド間にはイギリスの航空路並びに輸送道路が造られ、イラクの油は地中海に送り出されて居るやうであるが、然しバクダッド、ハイファー間の鐵道は未完成であり、油送管はキルクよりハイファー及びトリポクに敷設せられ、地中海作戰に大なる貢獻をなして居るが、シリヤ、パレスチナ、トランスヨルダン、イラク、之らの地域が樞軸の勢力圏に入つたあかつきに於ては、亞歐の連絡路はスエズ運河經由によるよりも著しく短縮せられ、既に述べた如き黑海の地政學的價値は十二分に發揮せられるのである。そしてヨーロッパに缺除せる凡ゆる物資が、世界の富庫である南洋圏より印度洋を通つてヨーロッパに齎され、御詔勅に示されて居る如く、ヨーロッパ諸國もまた各々其の所を得、兆民又其の堵に安んずることが出來るであらうと考へられる。

このやうな世界の趨勢を見るにつけて、重要な問題は回教徒の問題である。樞軸國、反樞軸國が鎬を削つて居る戰場は例外なく回教徒の地盤にあるのである。今述べた地域に連なるイラク、イランより印度の西北を通つて蒙疆に至る支那の西域地方、更に又エヂプトを通じてスペイン對岸に至る北アフリカの地域もまた回教徒圏であり、皇軍が一應の戡定を了した南洋の東印度諸島にも回教徒勢力が大きな位置を占めて居るのである。人口こそ僅かであるが、自立心特に旺盛な比島のモロ族の信ずるところの宗教之また回教であるのである。

この故にこそ戰前のドイッが數百に及ぶ回教徒の講座を大學に置き、回教徒問題を眞劍に講究すると共に、回教徒問題の實地擔當に當る人材の養成に努めた意義があるのである。この回教徒圏は、所謂古來の「絹の道」と稱せられた亞歐を繫ぐ陸路に他ならないのであつて、現在わが指導下にある蒙疆政府治下にも僅かながら纏回及び漢回があり、彼等は重慶の新疆、甘肅工作が嚴重にならざる以前は、自由に西藏並びに中央アジアとの貿易をなしつつあつたのであるが、將來恐らくこの「絹の道」が、日本の優秀なる技術によつて亞歐通路となるならば、キリスト教的世界秩序に對する最も熾烈なる對立物である回教徒が、樞軸陣營の有力なる分子として活動するであらうことも、單なる夢物語とはいへないであらう。

「トルコ」の著者、野間三郎氏は、地中海ペルシヤ灣通路がスエズ通路よりも遙かに捷徑であることに就いて次のやうに述べてゐる。

スエズ運河を通過するポートサイド、カラチ間を四千八百粁とすれば、全英路を利用するものは、陸路ハイファー、コーウェイト間一千三百粁と、海路コーウェイトとカラチ間二千粁、計三千三百粁となり、こゝに一千五百粁の短縮を見るのである。之を船舶一時間十五浬、汽車三十粁と觀察すれば、スエズ路は七日五時間であるに對し、全英路經由の五日六時間は約二日の短縮になるのであり、ここに新通路の意義がある。

全英路が更に黑海へのルートに切り換へられたならば、先に述べた如き亞歐回路は一段と短縮せられるであらうし「絹の道」に敷かれた鐵道と相俟つて、世界の距離は著しく短縮せられるものといへよう。

以上近時の樞軸側に甚だ不利に見えるヨーロッパ問題が、大局的見地よりすればむしろ非常に有利な態勢であることを述べたのであるが、米英の策動は、その目指すところ深く且つ久しい歴史の傳統に發するものであるから、決して侮るべきものではなく、刻一刻と　天皇歸一の體制に向かひつゝある世界の大勢を阻害する恐れなしとしないのである。ここに米英が如何なる形を以て樞軸圏内に攪亂の手を差し伸べ來つたかを述べる必要があると思はれる。

三、アングロ・サクソン民族の殘虐性

南阿聯邦の今日ある基礎を培つたと目されるセシル・ローズは、彼の遺言によつてその財産を寄贈したのであるが、その寄贈の目的に就いて、

「世界に於ける英國の支配を擴大することを眞の目的とするところの秘密結社を建設し、それを發展せしめ、又大英帝國よりの出稼ぎ人組織を整備し、又凡ゆるエネルギーと勞働と企業慾とによつて生活資料を獲得し得る總べての國土に、英國人民を植民せしめる組織を完成し、特にアフリカ全大陸、アラビヤの聖地、ユーフラト谷、サイプラス及びクレタの諸島、南米全土、大西洋の諸島、更に大英帝國が未だ支配して居ないかの馬來多島海、支那及び日本の沿岸等、皆英國移民が之を領有し、究極にはアメリカ合衆國をも英帝國内の一部として奪還し、又本國議會に植民地代表の制度を採用し、之によつて英帝國の離散せる議員達を融合せしめ、最後に戰爭を不可能ならしめる程度の強大なる軍備を樹立する。」

と述べて居るが、英帝國が實行に於て示した野望は、セシル・ローズのこの言葉に端的に示されて居るといつても過言ではあるまい。（國際經濟學會編『英國植民政策史』參照）

そのやうな目的を達する爲に、英國は如何なる殘虐な行爲をも辭さなかつた。之らのことに就いては最近種々の著述が述べて居るから多言を要しないと思はれるが、虜情に就いて深い認識を持たない者は、支那の阿片戰爭を見るべきである。又それに關聯して彼らの暴虐は、アロー號事件に止めを刺し、北京郊外圓明園の焚掠の行爲を見れば明らかである。先に述べたハウスホーファー教授の子息であつて、現に伯林政治大學の教授として令名あるドクタア・アルブレヒト・ハウスホーファー（Dr. Albrecht Haushofer）は、ドイツ外交研究所及びハンブルグ外交政策研究所の叢書の中に『英國の支那侵入』(Englands Einbruch in China-1940)なる書物を著はし、英國の支那侵略の意圖を簡單に要領よく述べて居るのである。又イギリスの印度支配が如何に殘虐なものであつたかに就いては、ラインハルト・フランク（Reinhard Frank）が『英吉利の印度支配』(Englands Herrschaft in Indien　なる小冊子に於て徹底的にその假面を剝ぎ去つて居るのであるが、その書の終に、イギリス人の印度に對する徹底的な彈壓が下されたアムリツア事件に關して、オスバート・シツトウエルの作つた詩が掲げられて居り、英國の惡虐は之に依つても知ることが出來るであらう。

土民どもには
吾々のやうな
自治は出來ぬ！
「正義と秩序」は
彼らには解らぬ。
土地の資源を
開拓くことも知らぬ。
土民の政府は、
何時でも、くづれて
その後に、英人が
踏み込んで來て
「正義と秩序」を

回復するのだ。
イギリス國族のはためく所
何時でも
正義と秩序があるのだ。
――印度にも、アイルランドにも、
そして又エヂプトにも。
吾々はアイルランドに
自分の政府を選ばせるが、
吾々から離れることは
決して許さぬのだ。
そんなことを許したならば、
彼等はそいつを惡用する。
それは不正だ。
何故かと言ふと、

吾々が支配者國民であるからだ。
海上や陸上の吾々の
英雄的業績がそれを證明する。

アムリッツァを見るがよい！
匈奴やボルシェヴィキが
印度を支配すれば
正義と秩序は
崩壞(くづ)れてしまふ。
彼等はその上で土民どもを
――殘酷至極に――
裁判にかけて
殺戮するだらう。
ところが吾々ならさうはしない。

吾々は支配者國民であるからだ。
吾々はたゞ將軍を派遣し、
將軍がかたをつけてくれる。
裁判などと七面倒なことは
問題にしないのだ——。
將軍は兵隊と
一緒にやつて來て
街の上にねた
二千の土民を
かたつぱしから
射殺し負傷けた——。
それで諸君もおわかりでせう。
「白人の責務」とはどんなものかを
して又どうして

吾々が支配者國民であるかをも。
印度人どもは
奇妙な國民だ。
彼らはユーモアのセンスを持たず
「ポンチ」繪を見ても笑ひもしない。
ところが吾々には
くそ面白くもないことを
彼等はげらげら笑ふのだ。
かういふことを吾々は
——反逆とよんで居る。
そこで
吾らの將軍は
アムリツアで

「正義と秩序」を
恢復せねばならなかつたのだ。
何故かと言へば、
若し彼が
二千の土民を射殺さなかつたら、
土民が彼を笑つただらうからだ。
そこで將軍は
彼等を射殺したのだ……。

そもそも支配者國民といふものは
かうした責務を引き受けねばならぬのだ。

何といふ侮辱的な言葉であらう。この詩を讀んで憤りを感じないものは彼等英國人の虜になつて居るものだ。このやうな思想が文化的であり、思想的な高さを示すものであると考へるものは、既に皇國民としての心を失つたものに他ならないのである。著者フランクは、英國の工業が如何にして印度の產業を破壞したか、又印度民族の健康を如何にして破壞したか等のことに關して種々の事例を擧げて居る。英國は學校及び教育に依り印度民族の進歩を計つたかといふ設問に答へて彼は、英國占領前の印度教育制度に比して、英國治下の印度教育が如何に低調なものであるか、英國の印度人教育に使ふ費用が極めて少いものであり、文盲者の創出によつて如何に印度の傳統と文化が遮斷せられてゐるかといふことを記述して居る。又アメリカの一コロンビヤ大學の豫算の方が英領印度全體の教育豫算よりも大であると一米人がいつて居るが、正に驚くべきことではないか。前アメリカ教育制度調査委員のウイリアム・ハリスの意見によれば、

英國の印度に於ける學校政策は文明の癌である。私はこの問題について詳細に研究した。

十八世紀の最近年に於て英國の博愛主義者ウィルバーフォース氏は學校教師を印度に派遣する樣に提唱した事がある。ところがこの提議に對して、東印度會社の一幹部の應酬した言葉は次の如くである。「吾々が先刻アメリカを失つたのは、愚にも我々がアメリカに、學校や大學設置を許したからである。我々は印度に對して今一度この馬鹿々々しい誤を繰返すといふことは絶對に出來ぬ。」と。

言葉は簡單であるが、イギリスの印度統治が如何なる意圖を以て行はれて居るかを充分に窺ひ知ることが出來るのである。

グルト・ヴインシュの『英國の恐怖政治』(Englands Regiment in Palastina)には、ジュネーブのパレスチナ・アラビヤ人代表の請願書が載せられて居るが、アラビヤ人に對するイギリス軍隊の空前の侵害とテロ手段に關して、その兇行行爲を三つの種類に分類して報告をして居るのである。

一、緊急令の僞裝下に行はれた兇行。(その命令は、兇行を制定してはゐないにも拘らず)

A、何等罪なき所有者の家屋を爆破すること。

B、戸外の重傷者に宿を提供した家々の爆破。例へば官廳報告にも記載されてあるナブルス及びダイル・エル・ゴーソウンに於ける如し。

C、單なる疑による人民の檢束。その後訊問の場所へ連行する途中、何等の理由なくして射殺したること。例へば、ヤッファ裁判所前に於て證明せられたるが如し。

D、一村又は一市の全男子を調べるといふ口實のもとに檢束し、彼等を數時間乃至數日間烈日のもとにさらし、種々の拷問及び侮辱を加へ、食糧及び水を供給せず、これを數時間乃至數日間續けた結果、遂に數百名の者が人事不省に陷つた。その爲、少なからず死者を出した。例へば、ベイト・リマ及びハルボウルに於ては八名の死亡である。

E、檢束者をば僅かに、その全數の一少部分を收容し得るに過ぎざる狹隘な場所、室、若しくは、堀又は井戸に詰込む。かうした場所は、その生理的必要を滿たすに足る施設もなく、何時間も何日も之を忍ばねばならぬ結果、遂に、檢束者の多くは人事不省に陷るのである。例へば、アラビヤ人銀行頭取ショーマン氏及びその同輩者等々の場合の如し。

二、義勇兵と近隣に於て戰鬪した後に、若しくは、武器搜索中に村落に於て行ふ軍隊の兇行。

A、全動產及び食糧品の破壞——搜査の結果が無効果に終つた場合も然り。

B、發見した有價物件及び現金の奪取。

C、村落居住民を抽籤で決めること。何等の論議又は決議なしに若干の人間を射殺すること。

D、少女及び婦女の凌辱。

E、兇行に對して反抗、若しくはその樣子を示した人間を射殺すること。

F、襲擊村落に所屬する家畜及び動物の射殺、等々。

三、ユダヤ人及び英人警察官の檢束中アラビヤ人の拷問。

A、鞭を加へて出血せしめ、人事不省に陷らしむ。

B、燒鐵棒をあてゝ皮膚を燒く。

C、捕虜を寒冷時、冷水の瀧にあてる。

D、胃と背を壓迫し、犧牲者に嘔吐を催さしめ、人事不省に陷らしむ。

E、生殖器を壓し、或は引張つて犧牲者を人事不省に陷らしむ。

F、特別な裝置をもつて爪を引き拔きその下の皮膚を燒く。等々。

南方戰線に間々傳へられる米英兩軍の野蠻的な行爲は、この報告書が必ずしも事實を誣ひたものでないことを立證するのである。英國のかつての植民地たりしアメリカのやり口も亦何ら之と選ぶところはない。かのコレヒドール並びにバタアンの作戰に於て、學生より徵發した米比軍を前線に立ててアメリカ人は後方陣地に隱れ、皇軍との正面を比島人に受け持たせて、然も給與の點に於いて差等を設け、刀折れ矢盡き降伏した敵に於ても、捕虜收容所に向かふ米人は尙ほ饅鏤たる元氣を示してゐるのに、比軍は困憊の極、歩行にも堪へざるものが多かつた。收容所に於ける皇軍の好遇と米軍將兵の殘虐とを對比した比島の青年は、アメリカ人は平時には紳士であるが、戰時に於ては全くの野蠻人であるといふことを口々に訴へたさうである。米英人の心は、之らの例に示された如き本質を持つのである。然るに彼等は、平時にあつてはその植民地並びに外地統治に於て示した素晴らしい成果に徵しても、之らの本性は巧みに隱蔽せられて、神の民の如き印象を與へて居ることも見逃がすべからざることゝいはなければならない。その著しい例は、耶蘇會並びに新敎各宗團を中心とする彼等の外地に於ける宗敎工作並びに文化工作に於て明らかに見られるところである。之らの點からの批判は、既に拙著「日本建設史論」「思想戰」「アメリカの野望を擊つ」「傳統に生きる」等に屢々述べたところであるからこゝには重ねて說かない。彼等がアジアの各地に設けて居る敎會、學校、圖書館、博物館、病院、養老院及び各種の慈善事業等は、表面は人類の救濟の仕事であり、又未開後進民族の智能の啓發、德性の錬磨であるとされて居るが、之らの事業の進展によつてその地の傳統的文化が遮斷せられ、徒らに歐米文化に對して故なき尊敬を拂ひ、歐米人の頤使に甘んずる自信なき知識人を育成して居るのである。平塚益德氏の『支那敎育文化史』はその結論に於て、

一度我々が、之等宣敎師が支那人を所謂文化人たらしむることによつて何を齎さうとしたかを顧みる時、我國の立場と同時に、東亞全體の共同福祉といふ建前からして、それらが批

判、排撃せらるべきものたる所以を知り得るのである。既に明らかにしたる如く、支那に於ける宣教師の教育活動は、究極の所新しき支那を歐米化せしむることにあつた。勿論中には明確にこの點を意識せざる者もあつたし、又中にはこの點を意圖し且つ公言して憚からざるものがあつたのである。然もかうした支那の歐米化の運動なるものは既に、十九世紀末よりその徴候が現はれ始めて居るもので、今世紀に入つてからの米國側の壓倒的進出により、結局支那の米國化といふ形態に發展して行つたのである。（中略）支那の教育の米國化の有する第二の意義、要するにそれは、支那をしてわが國に對立せしめ、我を排斥し侮蔑せしむるの意圖を有し、少くともそれの必然的な結果として、かくの如き精神を馴致する性格を有したのである。（中略）我々はこの點を銘記し、かうした地盤を芟除しつつ、新しき東亞に於ける眞に價値あり、意義ある教育運動を、新しき意慾と而して又大いなる構想の下に力強く展開しなければならぬのである。この爲に、直接には日支兩國間の自覺ある教育者の協力が要望せられると共に、廣くは、わが國思想界、宗教界、教育界、一般が、眞にこの點に目覺めて、力強き前進を、敢行しなければならないのである。

と結んで居るが、筆者もまた、支那大陸、朝鮮、滿洲方面に視察の旅をした結論として、同氏と全く同様の感想を抱かざるを得ないのである。

イギリスが、政治經濟的に支那に臨んで居る態度の如きも、中國の富裕なる層に對しては喜び迎へられて居るけれども、これに依つて、八割以上を占める中國農民の生活は益ゝ困窮し、喜び迎へて居る富裕者層も、實は全く米英の支配に屈して居るのであつて、その關係が今日中國共產黨の跳梁を生んで居ると看做して差支へないであらう。

戰前、スペイン統治の後を受けてアメリカが比島の統治を開始して以來、比島人の勤勞者の賃銀並びに俸給は著しく高騰し、彼等の物質生活は急激に高まつた。皇軍進駐以後、比島人は、スペインは自分達に宗教を與へ、アメリカは教育と富を與へ、日本は何を與へんとするかといふやうな反問を發する位アメリカに對する好意が持たれて居たのであるが、アメリカが比島に期待して居るものは、決して比島人が立派な人間となり、彼等が國政を自らなし、活潑な獨立的な經濟生活を營むことに存したのではなく、喜ばせながら徹底的にアメリカに依存せしめるにあつたのである。例へば、比島といへば麻を想起する如く、ミンダナオ島ダバオを中心とする日本人の活躍によつて莫大なる麻が生產せられたのであるが、この麻を精製し、糸や織物にする全過程が比島に育成せられたのでは決してなく、原絲の儘大量的にアメリカに送られ、アメリカに於て加工

せられたものが逆輸入せられて、彼らの消費に供せられる仕組になつて居た。また比島には高級葉卷が數多栽培せらるゝにも拘らず、葉卷の表面を蔽ふ葉の製造はこれを行はしめず、生產された煙草は全部アメリカ本土の消費に向けられ、比島には安い紙卷煙草が販賣されるといふ有樣であつた。日本が比島の經濟建設をするに當つての大なる癌は、彼等が工業を持たず、工場を經營する體驗を持たない點に存するのである。然も彼等アメリカの齎す商品は常に一定の限度を保つて輸出され、比島に厖大なストックの出來ない樣配慮し、アメリカとの關係が杜絶した場合には、直ちに彼等は日常生活の困窮を訴へざるを得ない仕組みに出來上つて居た。凡ゆる日常生活品は、Made in U. S. A. であり、高い彼等の賃銀の大半は、享樂的な消費生活の爲に費やされ、比島人に多くの賃銀を與へたアメリカは、その消費を通じて殆ど全部を捲き上げたので、彼らの間に資本の蓄積等は行はれ得なかつたのである。ジャズ、洋食、華美な服裝、ビクターのレコード等々を比島人が享樂する時、アメリカの富は益々豐かにせられて行つたことを思はなければならない。早くより比島の獨立を確約しながら、比島自らがその獨立を主張し得なかつた理由はこのやうな比島の經濟的獨立の基礎が常に脅やかされつつあつたことによるのである。表面的に非常なる好意と優遇が示される場合に於ても、アメリカの企圖するところは、政治的、經濟的支配力の强化以外の何物も存在しなかつたことを知らなければならない。東亞新秩序建設の意慾に滿ちた皇國臣民が、東亞共榮圏各國の指導をなすに當つては、このやうな反樞軸諸國の過去數百年に亙る施策を充分檢討すると共に、彼等の虜情卽ちこの施策の根底に横たはる不逞なる支配慾にまで洞察の眼を深めなくてはならぬ。

第四章　興亞政策の現實的問題

一、大東亞共榮圏建設の目標

前章に於て、歐米各國の國情と將來の展望を述べ、今後のヨーロッパの問題が、アジア諸國就中日本の態度によつてのみ決定せらるゝことを述べた。このことは現在並びに將來に關していひ得るのみならず、悠久の古へからの歴史がこれを物語つて居るのである。

物資の上から考へても、南方圏に於ける農產鑛產資源、印度に於ける鑛產纖維資源、大陸に於ける人口は、到底ヨーロッパがその足許へも寄ることを得ないものである。この事實は、悠久の古へから歴史的にアジアの力によつてヨーロッパが左右せられきたつたことの必然性の基礎をなすものである。然るに近代數百年間に、前章に述べた如く、歐米勢力によつて殆ど全世界が支配

されんとする形勢に陷つたのであるが、ひとりわが國のみは歐米の虜情を熟知し、之に對處する適切な方策を講じた爲に、今や再びアジアの指導權が確立せられようとして居るのである。近き頃迄ヨーロッパ諸國に支配せられたアジアに文化なしといふ見解がヨーロッパ人の間に常識化してゐる。その西洋學問を金科玉條として支持するアジアの所謂知識人達には、アジアに偉大なる文化の存することを失念したものが多いのである。印度に於ける佛教文明、西南アジアに於ける回教文明、支那に於ける儒教文明、皇國を中心とする世界無二の精神文明は、實に人類の偉大なる文化であつたといひ得る。近時新興のヨーロッパ諸國、所謂新體制國家といひ全體主義國家といふものは、何れもアジア的文明を回顧し、これによつて國家の精神的基礎付けをなして居ることを忘れてはならない。卽ちアジアを興すことは、歐米諸國の侵略の後、その殘虐なる侵略戰に對する反擊にあるのではない。彼等の虜情を的確に闡明し、この虜情によつて遮斷せられたアジアの傳統的なる文化を復興興隆せしめることに存するのであり、御神勅に、「この漂へる國を修理り固め成せ」と仰せられた如くに、米英の文化侵略によつて混沌たる國情を呈し、傳統的文化に對する自信を喪失せるアジア十億の人々に各々その所を得しめ、その堵に安んぜしめることが、アジアを興すことに他ならないのである。

このやうな皇國のすめらみいくさに對して敵側は、ＡＢＣＤラインを强化して不當なる彼等の支配體制を維持せんとするのであるが、その內Ｄラインは既に皇軍に截定せられ、Ａラインの前進基地比島、グアムは陷落し、Ｂラインの前進基地である香港、北ボルネオ、シンガポール、ビルマは之また皇威に浴するに至つたのである。現在Ａラインの一翼をなすかの如く考へられて居たソ聯が、前記の如く反樞軸との提携を肯んぜず、反樞軸側がＡラインと豫想した北のカムチャツカ半島沿海州がＡラインを構成しなくなつてゐることも注目せざるを得ないであらう。更にＣライン、重慶政府並びに陝西省延安を本據とする中國共產黨勢力も、之に對抗する南京政權の有力化と共に相當の打擊を蒙つて居ることが明らかである。目下ＡＢＣＤラインの第一線は、皇軍の勇戰奮鬪によつて慴伏し彼らは後方陣地である印度、セイロン、オーストラリヤ、ソロモンの線の確保に狂奔し、所謂飛石戰術の反攻を呼號して居るのである。北方に於てソ聯の動向今日の如き時期に於ては、敵たるもの又殊更にアリューシャンの强化を圖る他はないであらう。今や皇國は、敵イギリスの心臟部にして且つ英國重工業の中心地たるカルカッタを隔ること僅か一千キロの地域に既に陣地を整備して、直ちに止めを刺し得るの態勢をとつて居るのである。こゝに英國に致命傷を與へ、印度並びに印度洋圈を確保し得たならば、こゝに日獨の握手が具體的に成立

し、地中海方面に對する樞軸勢力の伸長、米英勢力の擊滅への態勢が整ふのである。更に皇軍の指導權によつて獨ソ間の停戰が出來るならば、皇軍の絶大なる武力的支援の下に、ドイツは西方イギリス本土並びにアメリカ心臟部たる東海岸に向かつての大西洋作戰も可能となるのである。しかし乍らこのやうな作戰の戰力が、少くとも印度の重工業地帶を確保するまでは支那大陸に依存すべきものが多く、又共榮圈内に於ける民族の思想動向が米英擊滅に完全に統一せられる爲にも、支那並びに舊アメリカ領たりしフイリツピン處理の如きは一段の工夫を要するものといはなければならぬ。

共榮圈は何によつて、如何なる順序によつて作られて行くかに就いては豫斷を許さないものがあるが、恐らくは文化傳統の根差すところ深き漢民族の居住する支那の問題に始つたこの建設戰は、支那問題解決を以て最後とするものの如く思はれる。勿論、だからといつて支那問題を放置すべしといふのではなくして、目下わが國の戰力が支那の資源に負ふところ非常に大なるを思ふ時に、愈々支那問題に關する皇國民の眞劍なる關心を喚起する必要を痛感するのである。同時に皇國自らが皇國の傳統に生き、傳統を體認し、共榮圈建設の模範を圈内に示すことが緊要である。自分の國の傳統的文化に、矜持と自信とを持ち得ざるものが、他國のことに干渉しても何らの效果をもあげ得ざることはいふを要しないであらう。

皇國の文化とは、過去の文化遺產をも生んだ皇國の傳統的な文化形成のはたらきと力であるが、異民族が直接親しく接觸し得る皇國文化は、實に皇國臣民そのものに他ならない。如何に皇國の歷史の傳統を護持し、過去の文化遺產を誇つたとしても、誇る日本人自體が敬服に値ひしないとしたならば、日本文化に對する彼等の尊敬心は、決して起り得ない道理である。そのやうに、凡べてが深き聯關を持つのであるから、國内が肅正されなければ國外問題が解決され得ないといふのでもなく、又國内の改革は第二として、先づ國外の新秩序が出來ればよいといふが如き機械的なものでもない。皇國臣民が皇國の傳統に生きんとする熾烈なる意慾を持つことがまづ肝要であつて、その意慾を實踐することによつて國内問題の根本的な刷新が逐次醞釀する。一面又その委が共榮圈各地域に投影されて、各地區共に、日本の如く各々その傳統に生きんとする營みが開始せられるのである。この委が更に又皇國臣民の確信を强め、相互に啓發せられつつ、共榮圈が逐次稔りを結んでくるものと考へるべきである。

かつて岡倉天心が印度にあつて、「アジアは一なり」といふことを宣言した。然し今日、共榮圈を建設せんとする精神も亦「アジアは一なり」との確信に基づくものである。そこに、アジアが

一なる根柢がいづくにあるかといふ基本問題があるのであつて、これらの解明に向かつて精進せんとしつつあるものが、所謂地政學を論じ、又國土論を戰はしつつある若き學徒に他ならないのである。

季節風の齎す雨によつて米を主食として居るのが、アジア大半の住民の生活である。この衣食住に於ける共通性が、アジアを一ならしめる可能性を具現するのである。無論、アラビヤ、イラン、イラク、アフガニスタン等の高原地帶及び乾燥地帶は、海原の文化とは違つた日常生活を有するのであるが、この地域は所謂回教徒圈であつて、思想的に將來皇國に歸一する可能性を多分に持つものといはれて居る。問題は、唯可能性に於てのみ解決するのではなく、皇國と衣食住の生活に於て相通ずるものを持つ地域に、皇國の文化の理解を與へ、皇國の生成發展の姿に範を仰いで、各〻の傳統的文化に生きんとする意圖を燃え上らしむることである。されば、必ずしも生活の基盤に於て皇國と相通ずるものを持たざる地域に於ても、皇國の精神文化に歸一し得るに至るものと見なければならない。

皇國程多種多樣なる文化要素を包藏統一して居る國は世界に例がない。氣候的にいつても、寒帶、溫帶、亞熱帶に跨がり、地形に就いて見ても平原があり、山岳地帶がある。海流の關係からみれば、暖流、寒流、何れもわが國の周邊を流れ、わが水產業を盛んならしめて居ることは周知の如くである。卽ち皇國の日常生活は、共榮圈の特定の地域とのみ共通するのではない。南にも北にも存在する各種の文化生活の樣式の殆どすべてが數千年の傳統の內に醇化統一せられて居ると見て差支へないのである。

思想的宗敎的に考へても、印度の佛敎文明、或は支那の儒敎文明の如き、その國に於ける形とは違つた相に於て、然も眞に最も所を得た形に於て、皇國の思想の中に生きて居るのである。今後、單に思想宗敎の問題のみならず、萬般の文化が、皇國によつて今後の進むべき方向を必ず與へられるであらうとの確信が、我らの大東亞戰爭完遂の自信と勇氣とを與へ、更に又その責任を感ぜしめるのである。

最近南方に關する地理歷史の論著は汗牛充棟も啻ならざる有樣であつて、むしろ讀者がその何れを選ぶべきかを苦慮する程である。從つて、各地の地理歷史に關して詳細なることをこゝに述べる紙幅もなければ又その必要をも見ないのである。唯こゝに一言すべきことは、これらの諸地域の諸々の研究が概ね歐米人の手に成つて居る點である。ヨーロッパは、第二章に述べた如く常に民族興亡の歷史を繰り擴げて居るのであつて、猶額大の小天地に幾多の言語を用ひる各民族が

相剋を續けること實に數千年、彼等の間に造られた文化は、一面に於てはどの民族にも通ずる文化、抽象的な人間性を强調し、普遍妥當性を求める學問並びに相互の差異を明らかにして行くところの分析的な學問がその主流をなして居るのである。所謂彼等の民族研究の基礎の如きもかうした點に存するのであつて、ヨーロッパ人の觀點から眺められたアジア各地區の地理や歴史が、そのまゝ共榮圏建設の中核たらんとする我等の用をなし得るか否かは、更に檢討を要する問題である。卽ち、彼等の研究の飜譯乃至はそれらに基づいたものであり、日本人自身の實體調査に依らざる現在流布せる各種の文獻に於ては、徒らに文化の源流を辿り、民族の相違を分析し、これらの相互の分裂性をのみ史的に縷說し、或は又その差異の因つて來るところを地理的に基礎付けんとするところに重點が置かれて居る。既に述べた如く東亞共榮圏建設の根本方針は、御詔勅に示された如く、萬邦をして其の所を得しめ、兆民をして悉く其の堵に安んぜしめる如く、「國生み」をなすところにあるのである。それはヨーロッパ諸勢力の、侵入以前の、乃至は更に漢族侵入以前の傳統を南方諸地域に於て復活し、印度に於て復活し、更に漢民族自體の傳統的文化の興隆を計り、彼等を根元的な傳統に復活せしめることに存するのである。さればアジアを渾然一體たらしめ、皇國に歸一する體制を如何にして作るべきであるかといふ根本目標に向かつて私どもの調査研究は行はれなければならないのである。徒らに民族の分類をなし、各民族の特質を抽出したり、地理的條件が決定的なものであるかの如き意見を流布することは、共榮圏建設の阻害をなすものである。卽ち、アジアを一ならしめるといふ根本目標の下に、諸民族に於ける共通的な要素を發見し、しかもそれが、優れた日本の姿に轉回し行く如くに指導育成を强化して行く着想の必要なることを特に强調したいのである。

二、亞細亞の資源とその開發

アジア全體の地圖を前にすると、世界の屋根と稱せられるパミール高原から、軒が東西南北に突き出して居る形を觀取することが出來るであらう。卽ち、東北に向かつては天山、アルタイ、サーヤン、ヤブロノイと流れる山脈が、遠くベーリング海に續き、東南に向かつてはヒマラヤ、印度支那山脈がスンダ列島にまで及んで居るのであつて、この東北の峰の北側がソビエット聯邦であり、この二つの峰の中に支那、蒙古、滿洲が含まれ、その南に印度が半島部の如くに突出して居る。山系と水系とは密接な關係を持つのであつて、滿洲、支那、蒙古の地帶に於ては、更にそ

の山系から分かれた幾つかの山脈の裾を縫うて大河が流れ、そこに大平野が展開して居るのである。卽ち、滿ソを區切るものに黑龍江があり、滿洲を霑す松花江はその支流であり、滿鐵沿線の所謂南滿は遼河の領域に展開して居り、滿鮮を區切るものに鴨綠江と豆滿江が存すること之亦いふを要しないであらう。支那大陸に於ては、北支に大黃河、中支に揚子江、南支に珠江があつて、各々その流域に豐穰なる平野を展開して居る。佛領印度支那と泰國とを區切るものにメコン河があり、ビルマを霑すものにサルウイン、イラワヂの兩河がある。印度にはベンガル灣に注いでの大平野を形成するガンヂス河、ブラマプトラ河があり、スリマン山脈に沿うてバミール、ヒマラヤ山脈からアラビヤ灣に注ぐインダス河は又印度西北地區の大平原を形造つて居るのである。

ところが、現在私どもの最も深い關係を持つ滿洲並びに北支の地域に於ては屢々旱魃と洪水の災害を蒙つてゐる。殊に北支那に於ては、古來黃河の治水が支那統治の根本をなすものであるとすらいはれて居る。卽ち黃河を治めるものは支那を治むといはれて居るのである。北支を重要部分とする支那に於ては、治水史がやがて支那歷史であるといふ特異な姿をとるのである。支那を考へようとするものは是非この問題を考へなければならない。同時に又中支、南支の海岸地帶には北支と中支を繫ぐが如き平原がなく、仙霞嶺山脈があつて上海、廣東の陸運を妨げて居ることに

着眼する必要がある。かういふ地形が、やがては京漢線の延長が長沙を經て廣東に至り得るが、津浦線の延長乃至は海岸沿線に廣東、上海を繫ぐ陸上交通線が未だ作られて居ない理由である。

今一つ考へなければならぬ點は、西域の所謂黃土地帶と北支の平原とがまづ自然な勾配に切り崩されて居るが、五臺山を含む太行山脈が南北に走つて居る關係から、靑海省に源を發した黃河が蘭州附近から陰山山脈に向かつて北流し、綏遠の厚和の南で太行山脈に打ち當つて再び南下するが、潼關附近に於て北嶺に當つて更に西に向かひ、一擧に平原に流れ出て居ることである。こに潼關附近に集る洛水、渭水等々の合流によつて常に洪水の危險があるのである。而かも山東半島の頸部には泰山があり、この泰山の南を時には北を黃河が流れて居たのである。蔣介石の意識的な黃河決潰以前に於ては濟南の南を通り渤海灣に注いで居たのであるが、今や開封の附近から西南、淮河の方向に流れ、揚子江に合流して居ること等は讀者の熟知するところである。

そこで問題は、滿洲並びに北支に於ける洪水の第二の因をなす雨量の點に及ばなければならない。滿鐵調査部編『北支那の農業と經濟』上卷には、

降水分布の不平均は北支那の農業に大きな影響を及ぼしてゐる。春季雨少なきため甚だしく乾燥し、各農作物の播種を困難ならしめることは農耕上大なる缺點で、この現象は非常に憂

慮される點であるが、その後農作物が最も水分を必要とする生育旺盛期たる夏季には、その大部分が集中されるが故に、年降水量少く而も高溫にして多照なる北支那に於ても作物の成育に不足しない程度の水分供給が可能であり、諸作物の生育を順調ならしめるので前者を補ふことが出來る。更に後述する如く、北支那農業地帶の殆ど全部を占むる黃土乃至その堆積土壤は、水分の供給が規則的で且つ充分である場合にのみ其の特性を充分に顯現するもので、この時期の降雨は生產力を增大せしむるものである。（中略）降雨が集中的であるため降雨の恩惠を減殺することも大であつて、水の一部分は土地に吸收され得ないで絕えず傾斜せる平野の耕地を水蝕し、栽培されてゐる低地作物を崩壞物を以て覆ひ、且つ甚だしく强烈な時には河川は氾濫し、洪水は破滅的な暴威を揮ひ沈泥を以て河道を塞ぎ、そして排水の不十分な平地を水浸しにしたりする。北支那に於ては降雨が多過ぎたり少な過ぎたりしない年は殆どなく、そしてその結果は飢饉である。北支那に於ける飢饉の直接的な原因は旱魃と洪水で、この水の過少乃至過多が農業生產の安定性に影響する最大の要因である。

と述べて居るが、事實、最近に於ても、昭和十四年の大洪水の如きは、筆者も直接之を經驗した一人である。

支那に旅して農業の問題を耳にする時、北支那の農業は如何にして土地を霑すかの問題であり、中支那の農業は如何にして過分の濕氣を除くかの問題であるといふことが屢ゝいはれるのである。又滿洲公主嶺の農事研究所の談に依れば、北滿の農業は如何にして排水を行ふかといふことであり、南滿の農業は如何にして灌漑をするかにかゝつて居るといふことである。何れにしても水の問題であり、しかもそれが容易ならぬ問題であることを知り得るのである。こゝに滿洲、支那の農業に、決定的な解決を與へんとする日本の土木事業の問題があるのである。

既に吉林の郊外豐滿のダムは工事の過半を完了し、幅百米に垂んとする堰堤が視察者の眼を驚かしつつある。この事業の着想は、右に引用した調査報告書に說くところの、一時に多量の雨量のある滿洲特有の風土を活用し、新京周邊の雨を豐滿ダムの背後にある峽谷に集中し、略ゝ琵琶湖に等しい湖水を人工を以て造り、洪水の災害を避けると共に、適當にこの水を流して灌漑用水たらしめて、更にこの堰堤の落差を利用して大發電事業を起し、之によつて滿洲中部に電力を供給せんとする、一石三鳥の大土木事業である。しかも優れたる日本の土木技術は、既にその工事の過半を完成して居るのである。

このやうな事業は、既に鴨綠江の河口より稍ゝ上流の地點に略ゝ完成した水豐ダムによつて、技術的な自信と保證が與へられたことによつて可能となつたのである。更にそのやうな技術は、北鮮咸興北道の電氣化學工業の尊い經驗によつて養はれ來つた技術が基礎をなして居るのである。城津、興南、清津地區は、內地にも劣らざる大電氣化學工業地帶であるが、その電力は長白山山脈を分水嶺とする水系を堰堤を以て阻止し、大發電所を設けることによつて出來て居るのである。この電力が、城津に於ける高周波製錬事業となり、興南に於ける日窒の空中窒素固定による硫安製造工場を中心とする一聯の電氣化學工業を運轉してをり、更に羅津を含む大清津市の幹線道路の左右に新設せられた重工業地帶の動力源となつて居るのである。かゝる電氣事業を中核とする大土木工事の訓練が、今や支那數千年の歷史を通じて何人も解決し得なかつた大黃河治水問題を解決する基礎をなして居るといふ一事は、唯に皇國民の誇りであるのみならず、アジア復興の象徵であるといひ得るのである。

黃河が北嶺卽ち秦嶺山脈、伏牛山脈に當つて方向を西に轉ずる邊りに、所謂風陵渡がある。こに、既に述べた如く、陝西省を霑す洛水と甘肅省を霑す渭水とが合流するのであるが、それより少し下つた有名な函谷關の附近には三門峽がある。これが日本の偉大なる土木事業を待つて居る地域である。河北政務委員會直轄の建設總署技師で、才德衆に超絕した一青年がこの問題の中心をなし、支那民衆に對する限り無き愛情と比類なき緻密周到な用意を以て、着々と計畫が進められて居ることを知つて居る筆者は、この問題が必ずや遠からず解決されるであらうことを確信するものである。無論この地點附近には未だ匪賊が跳梁して居るのであるから、今直ちに工事に着手せられるといふのではないが、これを擔當しつつある技師の人物が、當代稀に見る逸材である點に、絕大なる信賴を置き得るのである。建設の基礎は人にある。正にこの建設こそは、最も理想的な人を得て居るといつてよからう。こゝに世界第一を誇る堰堤が完成した曉には、さしもの黃河の洪水も恐らく跡を絕つであらうし、又堰堤の背後の峽谷には、殆ど西安に達するまでの巨大な湖水が、恰かも　陛下の御惠みの如くに洋々として湛へられるであらう。この水が、運河となつて遠からず北支の農村問題を解決するであらう。またこの電力が河北の重化學工業を興す原動力になるのも近い將來であらう。既に石門附近にも、天津とこの地を繫ぐ所謂石津運河の開鑿が農民の協力によつて著しく進捗して居るから、河北一圓にこのやうな大運河の出現することも又單なる夢ではなく、霑ひを持つた黃土地帶が、驚くべき農業生產力を發揮するに至るであらうことは期して待つべきである。

黄土地帶の農業は、地下水が黄土層を毛管現象によつて上昇することによつて行はれるのである。このことは、蔣介石の暴擧によつて黄河が南流した結果、山東一圓の地下水に異變を生じ、昨年度に於て降雨量の少かつたことと相俟ち、山東の農産物を甚だしく不作に終らしめた實例に徴しても明らかである。北支の土木事業は、このやうに農業工業部門の將來の解決の鍵を握るものであり、更にその技術は、世界に冠絶したわが土木技術に負ふところのものである。

北支の農業といへば、その經營方面に於ても少からぬ問題が存する。即ち、歐米勢力が支那に侵入して以來、北支の農業は、自給の農業から商業を主とする農業に移り、棉花、鷄卵、豚毛、落花生等の如き外國の市場を需すものが大量的に生産せられて、得たる資金を以て河北民衆の主食たるメリケン粉即ち白麵が加奈陀、歐洲方面から輸入せらるゝ如き體制を作つたのである。從つて、支那事變以後米英がわが國並びに支那に對する經濟封鎖を行ふや、忽ちにして河北の食糧問題は危殆に瀕した。昨年の如く大東亞戰爭開戰以來船舶輸送の關係が窮屈となり、泰、佛印、ビルマ方面の米穀の輸送が困難に立ち至り、河南省に於ける蝗の害等が之に加はるに及んでは由々しい民心不安を誘發せざるを得ないのである。本年は目下のところ農作物は成績が良好であり、食糧問題も解消するのではないかと考へられるが、昨年の如き狀況に陷り、民心が動搖するとすれば、こゝに戰力增强の基礎をなす鑛業生産力の激減を招かざるを得ないのである。

戰力增强には色々な要素があるであらうが、直接的に武力戰の決定力となるものは製鐵事業であることはいふまでもない。而も、鐵を一噸造らんが爲には二噸三噸の石炭を必要とする。石炭も、燃料用炭ではものの用をなさないのであて、粘結性炭、即ちコークス用炭を必要とするのである。

支那大陸の鑛物資源を見るに、滿洲より北支一圓は炭層であるとすらいはれる位、無盡藏の石炭を埋藏して居るのであるが、鐵資源は、蒙疆の宣化附近の龍烟鐵鑛、或は山東地方の何れも規模狹小なる鑛山を持つのみである。したがつて大量の鐵資源は、中支に於ける大冶、桃冲、銅官山、或は海南島の田獨、石碌等に俟たなければならなかつたのである。即ち鐵と石炭とが一ヶ所に集り、そこに巨大なる製鐵施設がある時に始めて鐵が生産せられ、その鐵の製錬が行はれることによつて鋼鐵が生まれるのであるが、鋼鐵が造られる爲には、又タングステン、滿俺その他の特殊鑛が必要になつてくるのである。然るに、從來の支那の狀況を見ると、漢陽にあつた漢萍製鐵所以外には殆ど見るべきものがない。而かも漢萍の製鐵所は、蔣介石の退去に際して完全に破壞せられ、大冶から持ち出した鐵鑛石の一部を製錬する爲にわが日本製鐵が準備した石灰窯の熔

鑛爐の如きも、その主要部分が破壞せられて居る有樣であつて、豐富な鐵鑛石並びに粘結性炭が、近時に至るまでは何れも內地の製鐵所に運送せられなければならなかつたのである。

北支には著名なる炭鑛が各地に散在して居る。燃料用炭としては大同炭あり、製鐵事業の缺くべからざる粘結性炭としては開灤炭がある。開灤炭鑛の經營は、大東亞戰爭以前はイギリス人の手に握られて居つた。その他、支那事變後わが國の手に依つて經營せられつつあつた著名な炭鑛に、井陘、陽川、臨川及び山東に於ける淄川、博山等があつた。之らは、開灤炭鑛を除いては何れも海岸線より遠隔のところに存在する關係から、常に輸送問題が生產の隘路となり、船舶問題と鐵道問題とが常に戰力增强の課題となつたのである。

中支那に於ては淮南炭田がある。敵撤收の後を受けてその機能を回復したとはいふものの、中支那の鐵を製錬するに足る實力を持つとはいひ難い。かつて、漢萍の名に徵して明らかな如く、漢陽の製鐵の原料炭となつた萍鄕地區は未だ戰塵收らざる有樣である。したがつて、概括的にいふならば、北支には石炭があるが鐵鑛石がなく、中支那には、鐵鑛石はあるが製鐵用炭に事缺いて居るといつて大過ないやうである。近時輸送問題の解決の爲に新輸送路の建設が着々と進展して居るから、內地の製鐵所に依存せずして、現地に於て製鐵の事業が活潑に行はれるに至るであらうし、その爲には、先に述べた電力問題が大きな寄與をなすものと見られるのである。

こゝに注意すべきことは、わが國の戰力を培養しつつある之らの鑛山の從業員が、殆ど全部苦力であるといふ點である。彼等は勿論明確な東亞新秩序建設の意慾を持つものでもなく、皇國に對する絕大な信賴感を持つものでもない。彼等は生活の保證によつてのみ勞務に從事するといはなければならぬ。果して然らば、既に述べた支那に於ける食糧問題の解決が、わが戰力增强に對して大なる關係を持つことは明らかである。翻つて日滿支の食糧問題を考ふるに、從來わが國は、平年に於て〇〇萬石の米穀を朝鮮半島に仰いでゐた。朝鮮ではわが國に供出する米穀に代るものとして又滿洲から雜穀を仰ぎつゝあつた。然るに、前記の如き河北の農業狀況が存するので、河北も亦滿洲の雜穀に期待することが非常に大きく、しかも農業生產品の價格の變動と統制經濟の影響として、雜穀と米穀との價格の關係が直接變化し、わが國に米穀を供出すべき朝鮮に於て、米食者の數が逐次增加の傾向を辿り來つたのであるから、こゝに食糧問題解決にとつて一つの難點が生じた譯である。しかも、昨年度筆者が朝鮮を視察した七、八月の候に於て、南鮮地方に於ける旱魃は見る者の胸を焦がす感があつたのである。卽ち、苗代には遂に植付をなすことが出來なかつた苗が眞赤に涸渴したまゝ放置されて居り、水田たるべき耕作地は一面の赤土の地